6541 15-4-1

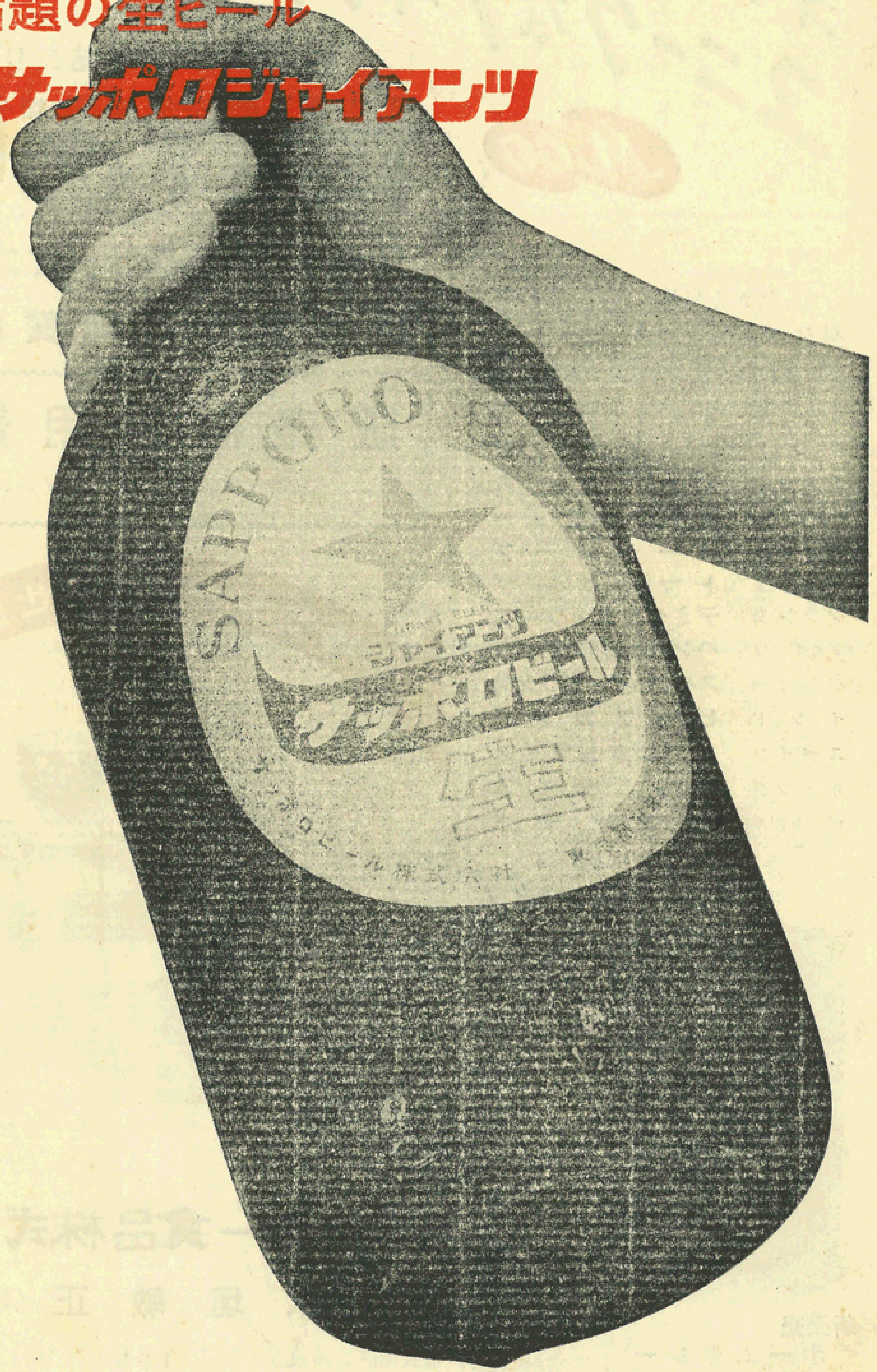
緑丘

No 42

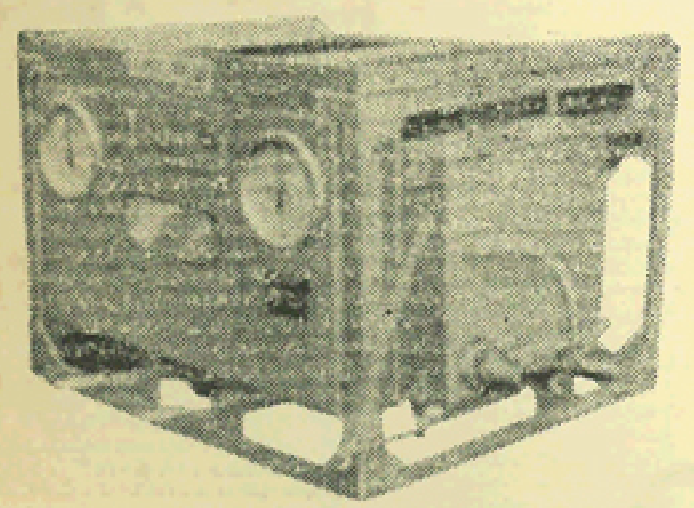
小林多喜二 特集

小樽商大
同窓会誌

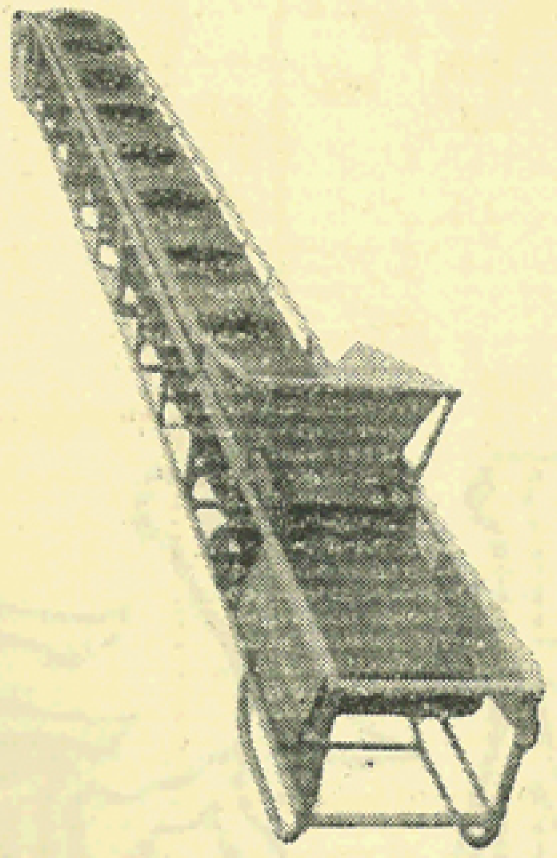
うまさもでっかい
話題の生ビール
サッポロジャイアンツ



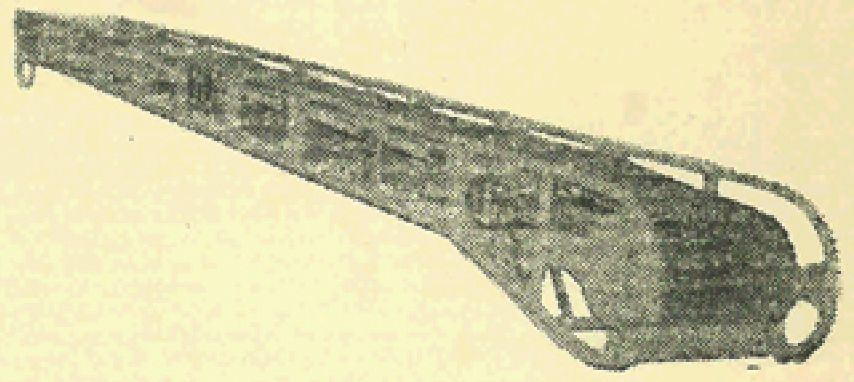
KYC 建設機械



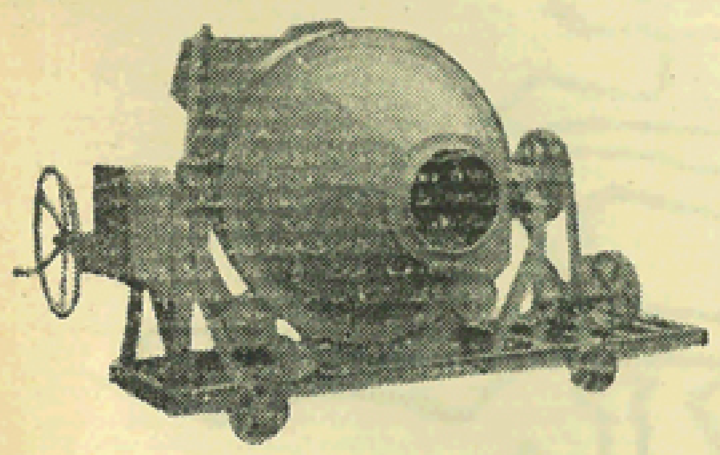
バッチヤースケール



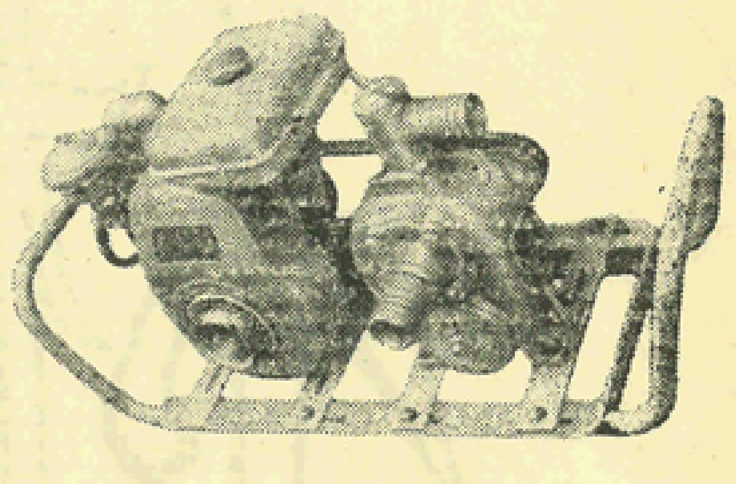
ニユークライマー



ベルトコンベヤー



コンクリートミキサー



自吸式ポンプ

営業品目

K.Y.C.コンベヤー各種　K.Y.C.ミキサー各種
K.Y.C.スケール各種　K.Y.C.モータープーリー各種
K.Y.C.ポンプ各種　K.Y.C.バッチヤープラント各種

綜合建設機械のトップメーカー

KYC 光洋機械工業株式会社

取締役社長　奥村正美（昭17）

本　社	大阪市北区南同心町1丁目12番地	電話大阪(351)3091～5
大阪営業所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(351)2039・(928)6531番
東京営業所	東京都千代田区神田鎌倉町6番地	電話東京(252)2012・(254)5601～5番
上野営業所	東京都台東区東上野1丁目20番地	電話東京(832)8819・8820番
福岡営業所	福岡市中浜口町19番地	電話福岡(2)4161～4164番
広島営業所	広島市平塚町39番地	電話広島(41)6525番
関西出張所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(928)6532・6533番
近畿出張所	大阪市北区末広町12番地	電話大阪(928)6532番
高松出張所	高松市塩上町1181番地	電話高松(3)4392・2771番
鹿児島出張所	鹿児島市加治屋町16の10番地	電話鹿児島(2)3055番
名古屋出張所	名古屋市東区堅代官町14番地	電話名古屋(94)1315・2860番
富山出張所	富山市豊川町17番地	電話富山(2)6505・2379番
仙台出張所	仙台市北2番丁83番地	電話仙台(22)5247・5592・6839番
札幌出張所	札幌市南11条西8丁目541の2	電話札幌(25)9868・(26)7964番
工　場	寝屋川工場・守口工場・枚方工場・所沢工場	

緑丘

全国版

（通巻）No. 42号（39年度 6号）

（編集責任者）
大阪市東区道修町三の一二
塩野義製薬株式会社内
蓁目英三

（緑丘大阪支部）
大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階
サッポロビール㈱内

小林多喜二碑建設について

小樽が生んだ世界的なプロレタリア作家小林多喜二の記念碑をつくろうという話が出たのは、もう数年も前のことでした。いく人かの人々がこの計画を実現しようとしましたがなかなか実を結ばず、ようやく昨年の暮になって具体化することができました。多喜二の古い友人の方々や作家、学者、労組、政党、同窓の方々など、百人をこえる方がこの趣旨に賛成して発起人に加わって下さり地元小樽市の安達市長、母校小樽商大の加茂学長、作家の江口渙氏、友人の蒔田栄一氏が、発起人代表をひきうけて下さいました。

記念碑は小樽市の高台、多喜二が愛した小樽の港と街を一望のもとに見おろす旭展望台のかたわらにたてられる予定で小樽市の御好意で敷地はすでに確保しました。碑の製作は本郷新氏にお願いし、設計図もできあがっています。

募金もようやく本格化し、地元をはじめ全国各地から毎日のように各方面の方々から尊い浄財がよせられています。碑は昨年の秋着工し、今年中に土台をつくりあげ、今年の五月、雪どけをまって完成する予定です。

どうか全国の皆様の心からなる御援助をお願いいたします。なお予算は次のとおりです。

記念碑工費　二五〇万円
除幕式および記念行事　三〇万円
事務諸雑費　三〇万円
土地整地代　五〇万円

とくに一口いくらという金額はさだめません。

送金先は
小樽市緑町五
小樽商大内　浜林正夫気付
小林多喜二碑建設期成会
振替口座小樽三六七〇番

小林多喜二碑建設期成会
発起人代表　安達与五郎・加茂儀一
　　　　　　江口渙・蒔田栄一
事務局長　浜林正夫
事務局　小樽市緑町5丁目　小樽商科大学

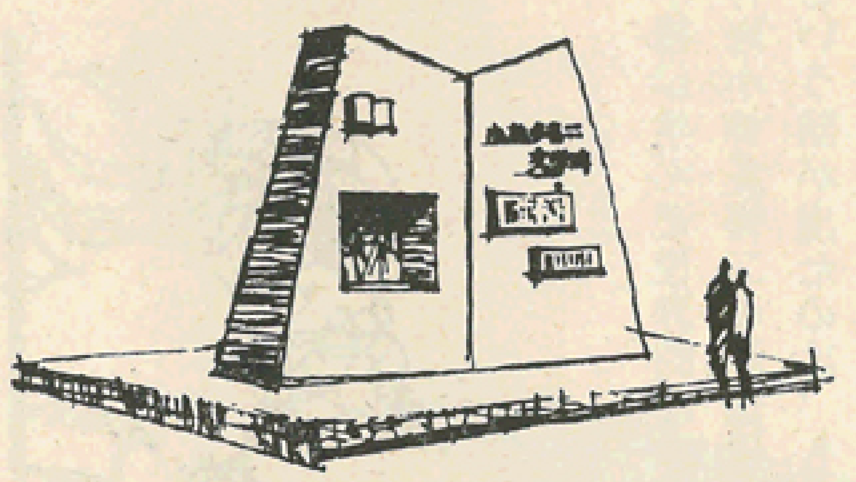
小林多喜二特集号

【目次】

小林多喜二碑についてお願い……伊藤整 4
多喜二碑の建立について……加茂儀一 6
"小林多喜二" 誤った指導理論の犠牲者…坂垣直子 7
小林多喜二と人口論……南亮三郎 11
多喜二の思い出……糸魚川祐三郎 13
多喜二特集号に寄せる……室谷賢治郎 14
少年の日の多喜二……片岡亮一 15
多喜二氏の絵……高桑市郎 16
多喜二の想い出……久木久一 16
写真の三人(?)……福田勇一郎 17
小林多喜二のある一面……島田正策 18
市井の人小林多喜二の片鱗…大野純一 19
多喜二と私……蒔田栄一 20
多喜二さんの執念……中野清一 21
小林多喜二と私……桜井長徳 24
小林多喜二君のこと……佐藤信雄 24
小林君……服部兵吾 25
大きな子供……武田暹 26
交遊抄（小樽高商の多喜二）…森 武臣 26
初めて多喜二と会った日……高崎 徹 27
思い出の場面二つ……野口七之助 28
吹雪の文学……水野清亀 29
多喜二断象……和田克巳 30
多喜二抄……越崎宗一 31
緑丘が生んだ二人の文学者…西川正己 32
思い出と記録……中野重治 34
親思いの多喜二……香川清夫 35
小林多喜二を憶う……田辺耕一郎 36
そのふた月前の彼……鈴木 信 40
親おもいに泣く……帖佐 猛 42
多喜二特集に寄せて 小野寺佐・飯坂久男・清水摂三 大島晃・宮地邦介 43
小林多喜二年譜・小林多喜二著作……48

小林多喜二碑についてお願い

伊藤整



小林多喜二文学碑完成予想図　石造（登別硬石）及青銅胄像　碑文その他　高さ16尺5寸（5m）

小林多喜二が死んでから三十一年が経った。

多喜二は緑丘で大正十三年の卒業である。彼が現存すれば六十二才になっている筈であるから、彼と同じ頃小樽高商に在学された諸兄もほぼその年齢になっていられるのである。

私事にわたるようであるが、私は多喜二の一級下にいた。在学時代から見知っており、一緒にフランス語の芝居に出たこともある。しかし私は彼と同人雑誌を共にしたこともなく、個人的親交もなく、芸術思想の上でも立場を異にし、政治的立場も別である。だが論争したこともなく、たがいに批評し合ったこともない。恩愛ともにないのである。

ただ私は在学時代から彼が高い才能をもっていることを知り、卒業後の彼が文壇に出て世の注目を浴びるのを見て、当然のことと思っていた。彼について人に聞かれれば、才能のある人だと答えるのをきまりとしていた。立場は違うが私はその後、彼と同様に専門の文士となり、彼よりもはるかに長く生きて今日にいたっている。しばしば人から多喜二の親友のように扱われるが、決してそうではない。そういう立場から書くものであることを念のため人に知っていただきたい。また私は近年流行の文学等の石碑があちこちに建って遊覧事業の商略の餌となっているのを好ましくないとも考えている。自分が万一そんなことにぶつかったら辞退する気持しか持っていない。

ところが昨年来、小樽で小林多喜二碑の話が進められており、発起人代表としても先輩の作家江口渙氏、小樽市長安達与五郎氏、商科大学長加茂儀一氏、旧友として蒔田栄一氏が当り、その事務は浜林正夫教授に引き受けて頂いているようである。私自身も発起人の末席に名を連ねこれに賛成した。

そして私は、この記念碑に限っては何とかして実現にまで運んで頂きたいと、心から願っている。昨年の夏、石狩当別町で本庄陸男君という多喜二や私などと同期に当る人で、多喜二同様プロレタリア文学系の小説家の「石狩川碑」というのが建てられた。この人は多喜二に遅れること六年、昭和十四年に亡くなったのであるが、当別町の開拓に取材した「石狩川」という作品を記念し、当別町が主となり、近藤町長が政治的立場を越えて奔走し、その献身的な努力により、全町の力を集めて、「石狩川のほとりに立派な碑が立てられた。私は招かれて参列した。そこは開拓の起点である外に何の意味ない淋しい所であった。その建碑の動機の純粋さを考えて私は甚だ感銘した。不遇、貧困の中に亡くなった本庄陸男をしのんで胸のせまるものがあった。その帰途私は浜林教授と連絡して小樽に出、多喜二碑の実行委員会の方々に面会して話をうかがった。

私はいつもの例で北海ホテルに泊り茶谷専務のお世話になった。御存知のように茶谷専務は多喜二と同級であり、私や多喜二などとフランス語劇を一緒にした人である。茶谷氏からもこの碑の件についての話をうかがい、諸方へのとりなしをお願いした。私は、自分が小樽高商出身の文士として、多喜二の碑が計画通り完成することを、どなたにもお願いしたい気持で一杯である。というのはこの建碑事業には困難がつきまとっているからである。

多喜二は虐殺されたのであり、その当時のことを考えると、まことに悲痛なものがある。しかし作家としての扱われ方は必ずしも不幸ではない。プロレタリア系の文学界においては、彼は宮本百合子と並んで、最も高い敬意を払われ、その作品は多くの研究家を持ち、世界の各国語に訳されている。しかし、小樽においての彼のあり方が淋しいものだということは否定できない。

私は、多喜二は郷里小樽においては政治的文学者として扱われるべき人でなく、小樽の生み出した稀有の才を持った文学の人として、もっと市民一般に近づけられるべきだと考える。政治的な意味というものは、四五十年も経てば消えるものである。石川啄木を今日社会主義者としてなつかしむ読者は多くない。歌人なる啄木として愛され、小樽にはその碑も立てられている。多喜二がなお政治的に見られるのは、彼の存在が甚だ大きいからなのである。その矛盾を越えて彼をもっと故郷が受け入れるようにしたいと私は考える。多喜二を純粋に小説家として、また小樽出身の最も輝やかしい文士として記念すべき時はきている、と私は考える。私は碑というものは好きでないが、それが多少とも彼を小樽市民に近づかせるのであれば、それがすでに進行中のこととなっている以上何とかしてそれを完成させるべきだと思うのである。

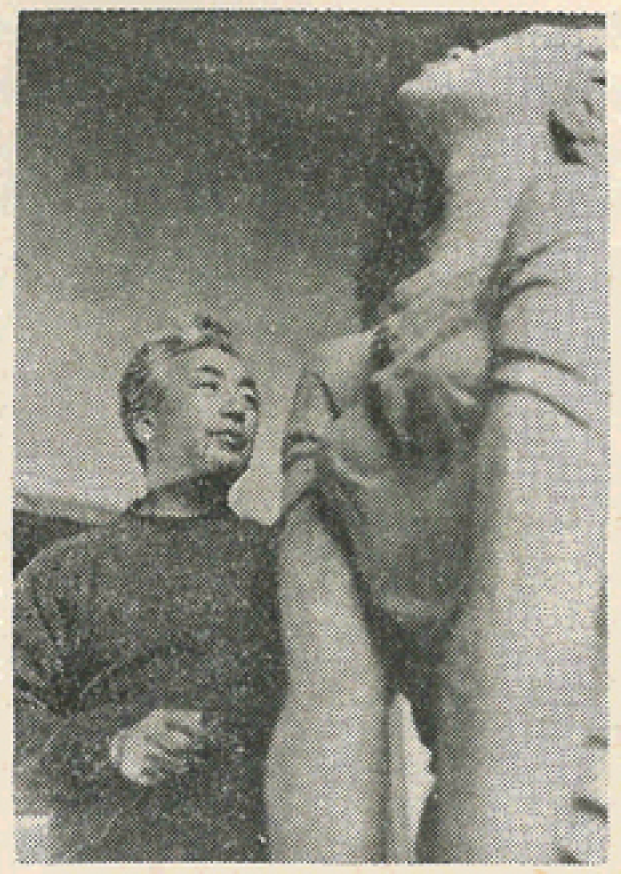
北海ホテルに集った日、茶谷さんの外に、多喜二の最も親しい友であり、私どもも同級の片岡亮一君が偶然そこに泊っていたので、氏にも一緒にその会に加わって頂いた。その日の話や更に翌日、安達市長、加茂学長の両氏のお話を聞くと、このことは私が外側から見ていたほど安易なことではない様子であった。どの人も具体的な事情は語らないが、地元にある種の抵抗があることが私にも分ってきた。

多喜二その人が、政治的作家として扱われている以上、政治的な問題が多少つきまとうのはやむを得ない。東京においても、共産党に分裂に近い事件が発生したためか、私は文芸家協会の月報に一文を書いて多喜二碑への協力を呼びかけたが反響は多くなかった。その理由の一つは、彼が上京してから死ぬまでが五年ほどの短期であり、その間文壇のつき合いは全くない、だから今日の文士で多喜二と面識のあった人は指で折るほどしかないのである。文壇においてもまた旧プロレタリア系は特殊な立場のものと見られ、多喜二の偉大なことがかえって人々の親近感を阻げている。しかし故人と縁のある数人の文士の助力もあり、私は出版社等からの協力を得るに努力中である。

片岡亮一氏は、旧小樽庁商系の人々に呼びかけて下さるそうである。安達市長はすでにこの碑のために、地獄坂の向って右側、旧市立高女裏の展望に大変よい土地を提供されるお話があり、その場所も見せて頂いた。港と市街を一望に見渡すことのできる結構なところである。またこの計画の進行には、多喜二の同級生で、同じフランス語劇の仲間だった札幌の北洋相互社長寿原九郎氏の御協力を是非頂きたいので、お目にかかりたかった。しかし次の日はまた私は本庄君の記念の催しに駆り出され、そのまま飛行場にかけつけたので時間がなかった。それで茶谷、加茂両氏に寿原氏へのおとりなしを特にお願いした。

この度塞目英三氏が、この「緑丘」誌上に多喜二碑の記念特集をして下さることは大変あり

多喜二碑制作の　本郷新氏　略歴



氷雪の門を刻む本郷新氏

明治三十八年　札幌市生
昭和　三　年　東京高等工芸学校（現千葉大工学部）彫刻部卒業
昭和　三　年　国展彫刻部初入選
昭和　五　年　国画会賞授賞
昭和　八　年　国画会々員となる
昭和　十四年　新制作協会彫刻部創立
昭和二十七年　渡欧ソ連等旅行
昭和三十二年　アジア、アフリカ、ソ、中、朝旅行

作品発表

国画会昭和三年より同十三年まで
新制作協会昭和十四年より今日まで
朝日秀作展　十二回
国際美術展　七回

受賞歴

国画会賞（昭和五年）
野間美術賞（昭和十八年）
平和文化賞（昭和二十八年）
国際美術展（昭和三十四年）

主なる作品

一、嵐の中の母子像（広島市平和公園）
一、戦没学生記念像わだつみのこえ（京都市立命館内）
一、泉の像（札幌市大通公園）
一、牧歌（札幌市駅前）
一、朔北の母子像（釧路市春採湖畔）
一、氷雪の門（稚内市裏山公園）
一、石川啄木像（函館市大森海岸）
一、ヴィナス（千葉県谷津公園）
一、鳥を抱く女（兵庫県高砂市）
一、青年像（東京中央大学構内）
一、その他いずれも公共の広場に建立のもの

がたいことである。多喜二の存在を小樽が産み出した傑大な精神力と考えることができれば、その当時の政治的立場や、現在多少は地元にあるわだかまりを超えて、緑丘の諸兄からの御援助を頂けるのではないかと考える。もしこの仕事が中絶するようなことがあると、二度目ということは仲々困難となるのではないかと思う。

多喜二の顔を見知っていられる当時の在校生諸氏は、文壇の人と違って数百名いられるわけであり、その方々からなにがしかの御協力をいただければ、今の困難は解決するものと私は考える。またこれ以外の緑丘人も、この企ての成立を母校に縁のある事業として何とか助けていただきたく、心からお願いする次第である。

（大一四）

多喜二碑の建立について

学長　加茂儀一

小林多喜二碑の建設にあたって今度編集部の企画で「緑丘」多喜二号が出ることを心から喜んでおります。人間というものはたとえどんな問題があったにしろ、死んでから何年経っても多くの人々に忘れられずその思い出がいつまでも生きているような人はやはりえらい人だと私は思う。亡くなってもその人の生きていたときの生き方の余いんがいつまでも消えないでいるような人間に私はなりたい。

しかしそれは余程のことでないとそうざらにそれだけの資格のある人は少ない。多喜二の生きていた時代は今よりももっと生きるのにきびしい時代であった。その時代に自分をすてて他人のことばかりに生きていた多喜二の純粋な精神には私は頭がさがる思いがする。

おそらく多喜二の生きていたときには、多喜二のために迷惑したと考えていられる方々もあるかもしれない。それは人間として考えるとき時間や時代の範ちゅうのなかではやはり、憎しみや憤りを感ずるかもしれないが、もし時間や時代を超越し、何か永遠につながるものが多喜二のなかにあるならば、私らは時間的制約のなかで生きている人間のもつ愛憎を越えたものを私らは、多喜二に対して感じなくてはならない。いつの世でも生きることはつらいことである。そのつらさの故にわれわれはお互いに憎んだり愛したりしているのである。

自分のくるしみのみでなく、他人のくるしみにも徹することができれば、お互いの愛憎は克服される。しかし悲しみやくるしみに徹することもやはりわれわれ凡俗には仲々むつかしい。そんなことを思うと多喜二のような人間に対しては私はとても近づけないものをつくづく感ずるのである。

その多喜二の碑が彼の一番思い出の地小樽の山上に建つことは小樽にとっても意味深い。私は多喜二の碑は最近流行の記念碑づくりの一つとは考えたくない。もしそうだと却って多喜二のような人間にとっては迷惑かもしれない。しかし小樽で今この碑を建てようとして動いている人々はもっと多喜二を身近かに感じている人々である。多喜二を卒業生として出した小樽の旧高商や今の商大の人々にとっても思いは同じである。東京でも札幌でも緑丘人はそのために有志で心よく応援をすることになった。これもわれわれ発起人にとっては有難いことである。そしてみんなのこの好意を無にしないような碑を建てたいと一同念願している。御声援を改めて感謝する。

××××

なお本学の戦没学徒の慰霊のことを私が始めて同窓各位に唱えたことが曩目さんによってとりあげられ、緑丘各位の御感動を得たことを私はどんなに嬉しく思っているか。私はみんなに涙をもって感謝する。

あの戦没学徒も有限な人間の肉体をすべて超越して永遠の世界に生きた人々である。あの純粋さに私は頭が下がる。あの若人らを私は永遠に忘れることのできない人々と心の中に捉えなくてはならない。それはあの若人たちを無駄死にしてはならないからである。私はあの若人らを思う度に何のためにあの若人らが死んでいったかを、つねに反省する。あの若人らを安らかに眠らせるためにはわれわれの祖国をいつまでも安らかにしなくてはならない。それは私らが彼らに対するせめてもの勤めであろう。

評論家　板垣直子

小林多喜二の記念碑のたつことは結構ですが、それが政治運動の拠点にならぬことを祈ります。多喜二はわれわれにとっては、プロレタリヤ作家として、すぐれているのですから、その文学碑はしづかに、清らかに、たてられた場所においておかれることを望みます。

小林多喜二碑建設期成会　事務局長　浜林正夫

この趣意書では募金目標を四〇〇万円としてありましたが、その後市から現物で協力するという話がありまた制作者の本郷新氏からも経費きりつめに協力するという申出であり、三五〇万円ぐらいで十分という見通しがつきました。

発起人には作家と地元の人たち、旧友などが中心ですが、緑丘同窓からも、協力をえています。多喜二というとイデオロギーの問題がからみますが、しかしこの記念碑はイデオロギーを越えて、旧友、あるいは文学者として多喜二を尊敬する人々の協力でつくろうというもので、たとえば作家では志賀直哉氏なども、大へん好意的でした。

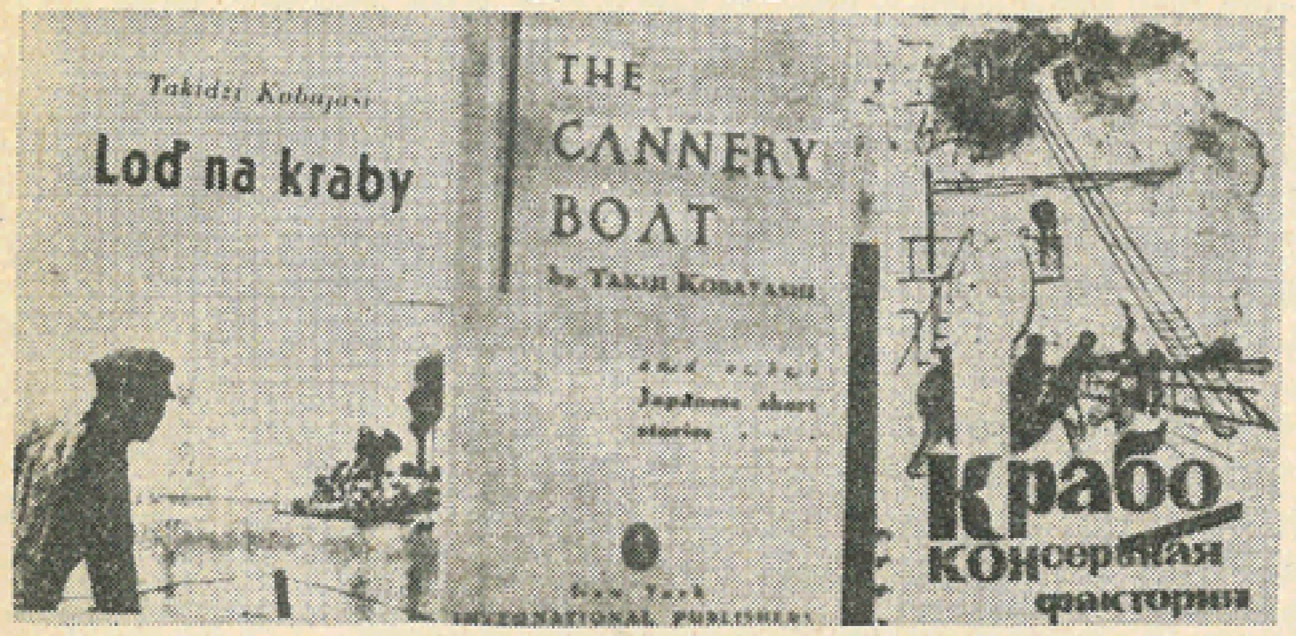
小林多喜二

誤った指導理論の犠牲者

板垣直子（評論家）

昭和初年が日本のプロレタリア文学の勃興と退潮を記念していることは、いまさらいうまでもない。プロレタリア文学への地下水は、日本では大正十年の「種蒔く人」（小牧近江による）という小冊子の刊行あたりからさかのぼって、ながれていたが、日本のプロレタリア文学が颯爽と、中央市場にすがたをみせだしたのは、昭和四年であった。その年の「戦旗」（機関誌）の五、六月号に小林多喜二の「蟹工船」が連載された。

「蟹　工　船」



チェッコ語訳（1947年）　英語訳（1933年）　ロシヤ語訳（1932年）

函館港からカムチャッカ方面のオホーツク海に蟹の漁獲にいった船の一つを舞台にしていた。船中の労資の対立と、型のごとき船員たちのストと、その勝利があったようにおもう。資本家の側にたってる監督あるいは支配役にある人物がおり、彼はあくらつで、官僚的であり、船員たちを酷使あるいは搾取する。過度に働かせるのみならず待遇もわるい。朝の味噌汁をすっても、なかなかジャガイモがひっかからない。大切な野菜をもってゆかないのだ。その他のこまかい悪辣さが、資本者の側にいろいろ書かれ、作品は船が函館に帰ってくるところで終っていた。

この作品は、蟹工船内の生活という、そのころとしては人々に知られていない珍しい環境を、文学に開拓した意味もあったし、そのころの蟹船団一般について、船中の労働状態やひどい待遇ぶりも明らかにした。それもこの作品に多喜二の作りだした文学的な効果の鋭さは大したものだった。「戦旗」のきたない灰色がかった紙の上では、作者の意図がよけいに烈々と感じられた。そして、それだけの文学的な感動を与えたのだったから、表現術も相当なものなのだが、そのころ読んだ印象では、金釘流ともいうべく、ひどく殺風景におもった。が、考えてみると、これもまた「ノイエ・ザハリヒカイト運動」の流れを、自然に汲んでいたのかも知れない。簡潔・明瞭な二十世紀的文体の線に入るわけだろう。

多喜二の文章は、あとになってむろんもっとうまくなったが、特別に円熟していったというわけでもなかった。文学活動の期間も、昭和四年から八年までの足かけ五年間位の短いものだったからだ。「蟹工船」をかく前に、もう二、三の作品をかいてる。なかでも「一九二八年三月十五日」や「東倶知安行」は、立派な出来栄である。だから、当時殺風景な気がしたなどという私の印象はとにかくとして、「蟹工船」の技術が劣っていた筈がない。引つづき発表された「不在地主」「工場細胞」なども、当時の日本のプロレタリア作品の中では、群を抜いた。「党生活者」も感心して読んだ記憶がある。「党生活者」はたしか多喜二が地下運動をしていたころの彼の晩年の生活を描いたものだった。隠れ家にすみ、ナスの漬物ばかり食べていたので、体力がなくなって、二階への梯子段を上る力もなくなりかけたという風な事実もかかれていた。食べ物は体力にそんなに影響があるのかと教えられた覚えがある。

昭和四年の六月以降から、おなじ「戦旗」に徳永直の「太陽のない街」も連載されだした。これは「大日本印刷会社」のストライキを題材につかった。「蟹工船」と「太陽のない街」の二つが世に出た昭和四年度が、日本のプロレタリア文学の擡頭期であり、同時に最盛期でもあった。そのころが、われわれ外部の人間にとっても、プロレタリア文学に対する新鮮な驚異感を引おこしたなつかしい時代である。その後しばらく、上の二人の作家は、日本のプロレタリア作家の双璧となった。「蟹工船」は方々のヨーロッパ語に訳されているらしい。私は以前に「太陽のない街」の独訳を入手した。その独訳はかなりづさんで、そのことを私がどこかに、そのころかいた覚えがある。徳永直もその後いろいろな作品をかいているし、また、あの時代のプロレタリア文学に加えられたきびしい弾圧から、作家自身も作風の転換を行なわないでいられなくなった。そのあと、プロレタリア文学が全く不可能となり、いわゆる「転向文学」の時代が、もう八年ごろにははじまっているが、徳永は昭和二十年代にまで入って、職業としての作家であった。

作家は何派にかぎらず、一生涯をかけて、芸術的な質での発展的な作風の道程をとり、その作家の最大の完成期に達してこそ、真に偉い作家ということになる。その意味からすると、徳永直の作風は、決してそういう種類ではなかった。そればかりか、彼には教養も知性も乏しかった。プロレタリア文学のゆるされなくなったあとの彼の作風の転換は、だから質の上で下った。

小林多喜二は小樽にいて、中央の作品をよみ、私小説作家志賀直哉の作品を愛した。いわゆる「私小説」とは、日本特産の文学である。その「私小説」を、私は全体として肯定するわけではない。「暗夜行路」なんかすぐれているけれども、これは身辺に取材したからいいのではなくて、作者の人間性への浸透力のつよさと、異常な事件をつみ重ねた迫力のもりあげ方のうまさから、すぐれた作品となったのだ。

　小林は志賀の技術を慕っていただけに、やっぱり引締った文章をかいた。文章に出ていたインテリ風な神経と知的な持味、私はそれらを好きだったし、プロレタリア作家のなかでは、その意味で実にユニークな存在であった。小林の一生涯にのこした作品をみると、左翼的な思操は堅固といったところだ。そして、その方では真面目な闘いの文学に終始した。プロレタリア文学のはやっていたころには、だから「ほんものらしいほんもの」の左翼作家だという気持がした。

　ここでちょっと話がわきにそれるが、転向文学の時代もふくめて、日本には二人の左翼作家でインテリ質の人々がいた。それは小林の他に昭和九年に「癩」や「盲目」で地位を築いた島木健作である。健作はプロレタリア文学が、ひどい弾圧の下で不可能になってから作家になったのだから、「転向文学」という名の下に、プロレタリア文学の余燼といった作品をかき、いわゆる「プロレタリア文学」を書くことはゆるされなかった。この人がまだプロレタリア文学のさかんだった昭和四、五年ごろにかいたとしたら、どんなプロレタリア文学をみせたろうかと好奇心をいだく。やっぱり階級闘争の立場をとった作品が生れたろう。型のごとき労資の対立、労働者側はつねに善良で搾取されており、資本家はきまって悪ものにされているに違いない。労働者側は一人づつは弱いけれども、団結すると強い力となるというマルクスの説にしたがって作品のなかでも、ストによって資本家側にあたり、たとえ困難があっても、作品の末には必らず勝つという、きまった公式を踏むのである。

　日本のプロレタリア文学は、昭和六年には発禁または発禁というひどい弾圧のために不可能となったが、七年度になると、さすがに質の上からも、社会的な需要も減った。公式的で硬化症状におちいった文学など興味をもたれなくなったのだ。プロレタリア文学は革命の発生地のソ連のみならず、ルール炭坑地帯などをもつドイツ、生産工業の盛んなアメリカでも盛んにかかれた。どこの左翼文学も公式化という鉄のくさりにしばられた共通性はあったが、しかし、扱われている材料とか世界が複雑であったり珍しい種類だと、文学としてかなりの興味をもたれる。アメリカの製缶詰会社や石油会社を描いたプロレタリア文学がある。これらは初期のころのソ連の「壊滅」、「若き親衛隊」、「セメント」、「鉄の流れ」などより、はるかに豊かな興味をさそう。ただし、通俗作品の域をでない。ドイツの方が質の上からは一番すぐれている。「エッセンの嵐」、「炎えるルール」、「祖国なき仲間」などを思い出す。

　むろんソ連にならってのことであるが、日本のプロレタリア文学は、闘争一途の狭い視野にたったから、作家の質もインテリであることを重要視しない。作家が教養の人であるよりも、闘歴の多いことを重く考える。けれども、闘歴をいくらもっていても、すぐれた文芸を書いたり、文学で発展できることにはならない。闘歴の尊重は左翼的な政党の指導者をえらぶときにも行なわれてきたが、これも考えものだろう。レーニンは政治家だが、カザン大学にいたころに、マルクスをよみ耽ったという。インテリで高度の教養をもち良識に富むべきことは、プロレタリア作家にとっても、必須の大切な条件である。プロレタリア文学のさかんなとき、それまで一般文学をかいていた作家たちで、新しい陣営にながれていったのがたくさんいたが、彼らはすでに最も壮んな時代の精力をつかいつくしたあとであったからプロレタリア文学、つまり新分野では、彼らの生涯の最良の記念的な作品をつくってはいない。

　前にいったように、島木健作がはじめからプロレタリア作品を書いたとしたら、たとえ公式的な線にのってはいたろうが、小林とならんで面白い作品ができたろうにとおもう。たとえば、彼は転向後の有名な作品の「生活の探究」（二巻）を書いて、広くよまれた。ベスト・セラーは、別に大したことでないが、新しい農村のあり方という積極的な題材を摑み、モラルを開陳した。これはヒューマニズムの問題、人間いかに生きるかの思考にふかく入っている。あのころに、このような問題を扱うことのできた作家としての資質の非凡さをおもうから、もし左翼文学に処女的な精力をそそぎだしたとしたらまた別なみどころのあった作品がでたろうと考えないでいられない。

　島木も小林も、大学教育をうけている。芸術文学としての作風の展開は、もしあとまで生きていたとしたら、運動歴だけでのぼってきた作家たちとは違う工夫をみせたろうと思う。すぐ行詰ってしまうことはなかったろう。作家の結局の発展は、質にかかっている。作家に適した質が、さらに高度の教育や教養により地固めされていなければならない。

　日本のプロレタリア文学については、いろいろの疑問がある。何しろ戦前にはプロレタリア文学によってたった政治思想は、日本では非合法の共産主義だったのだ。非合法的な政治思想を宣伝したプロレタリア文学が、弾圧をうけない筈はなかったのである。だから弾圧や破滅の問題も、もとはそこから派生したということができる。

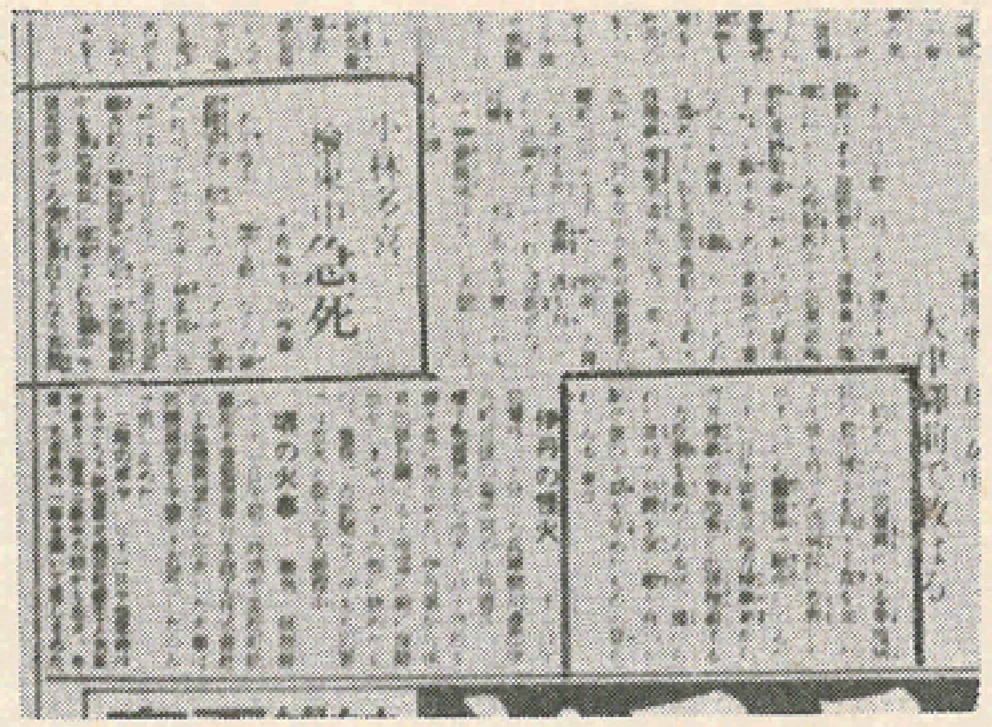
　共産主義体制を維持し、完成してゆくのには、文学をどういう風に、利用していくべきか。それが、プロレタリア文学の出発点であったし、また、永遠のゴールでもあるのだ。本場のソ連では、文学を指導してゆく協議所の「作家同盟」がつくられた。日本もそれにならって、「作家同盟」をつくった。そして、ちようどソ連のヒナ型のような日本におけるプロレタリア文学界の事情がおこ

ったわけだ。もちろん、ソ連はすべての芸術を統制したのだから、文学以外の芸術分野にも、統制の手がのびた（日本でも同様）が、文学以外についてはここにはぶく。

　文学とは人間の主体的な創作慾から生れるべきものだ。作品をとおして彼の描こうとするものは、広い意味での独自な人生観を表現することだ。独自な題材と独自な形式も、したがって、当然に生れる。しかし、統制文学では、作品を統一する精神は、作者の個性からでたものでなくして、政治当局という外から課される。そこで、社会主義を達成し、完成するために闘う「英雄」に指導される人民の結局の勝利を描くことが目的となり、共産主義の宣伝に他ならない。そのために、ソ連のプロレタリア文学も職場なり背景こそ違っていても、前にいったように、作品は公式化し、硬着したものが絶対多数を占めている。文学あるいは、芸術一般にとって、一番大切な作家の個性別が、不徹底化してしまう。

　ソ連で国家的な賞をうけた作品あるいは授賞されなくてもてやはされた有名な作品には、すぐれた文学に価する作品が少ない。ソ連では第一次五ケ年計画がしかれたとき、やっと創作方法を、「社会主義リアリズム」という体裁のよい名前でかかげた。つまり、これも「社会主義」建設を扶ける種類の文学を書けということであって、はじめからの主旨と変るものではない。ただ、あとになると、ソ連ではプロレタリア文学そのものに向上があったといえるだろう。たとえばショーロホフの「静かなるドン」（一九二八―四〇）などは、ソ連産の立派なプロレタリア文学だ。完成の時期があとにのびたから、「人間いかに生きてゆくべきか」のヒューマニズム問題で結び、よけいにいい作品となった。単純な公式ものだったりしていけない。けれども、「静かなるドン」よりもあとに着手した同じ作家の「開かれた処女地」（一九三二―四〇）は、闘士が集団農場（コルホーズ）の建設に活動して、成功する過程を描くという、それこそ公式化しやすい材料であるが、主人公の運動の方法もうまいし、なかなかすぐれた出来栄であって、さすがにショーロホフだとおもわせる。

　「静かなるドン」はコサック民族の「叙事詩」だといわれている位であって、せっかちに政治の御用をつとめる「階級文学」の類ではない。ここにはロシヤのなかのコサックの社会や人間が、その性格、風俗、生活、伝統の上で、非常によくでている。かつてトルストイやドストエフスキイを輩出させたスラヴ民族の強靱な文学的エネルギーの系譜が、ショーロホフにも生きている感じである。しかし、ショーロホフの作品のでたのは、一九一七年の革命達成後可成りたってからである。小林多喜二などは、日本のプロレタリア文学のごく初期にかいた。しかも、日本はソ連国のはじまったころの文学の指導理論を、うのみにして創作したのだった。日本のプロレタリア系統の作家のなかでは、小林や島木なら相当の作品がかけた筈であるが、指導理論の未熟だったこと、及び弾圧の下にあって、充分に才をのばせなかったわけだ。島木は前にもいったように、小林より少し時代がおくれてでたから、やむをえず転向文学をかいたのだが、養われたのはおなじ理論であり、それゆえ、プロレタリア作家にふくめて扱ってもさし支えない。



小林多喜二急死を報ずる
大阪朝日（昭和8年2月22日夕刊）

　さて小林多喜二が、地下にもぐって生活し、街頭連絡をしていたとき官憲にみつかり、追跡されて捕えられた。築地署での苛酷な拷問をうけたことから死んだことは、ここに語るまでもない。それは昭和八年の二月二十日であり、文学生活は足かけたった五年であった。年齢からいっても、三十才の若さで生命を破壊された。今日では小林のうけた拷問のひどさかげんを、彼の全裸の遺骸の写真を公表（出版物に）することで、いくらも社会に知らせることができる。腰の上からかけて、下半身が一面に濃い赤紫色に内出血していた。そのひどい拷問が、いかなる方法でなされたものか、われわれには判断できないが、拷問をうけた小林がいかに苦しかったかと、同情の心持がおこる。同時に同志たちの方は、それほどの肉体的な苦痛にたえても、小林は言葉で陳述しなかったこと、つまり志操の堅固だったことに、英雄を見出している。

　しかし、小林は時代の影響から、左翼の闘士として死んだが、われわれからみると、彼には並々ならぬ文学の才能があったのだ。あれだけの才能を、もっとながく生きて、文学に実現してもらいたかった。ショーロホフがドン河流域の祖国を描いたように、小林は北海道を描くことができたのだ。あの時代に生きたのだから、たとえ階級的な立場にたっていてもよいから、北海道の自然や住民の生活などをこくめいに描いて、そこのそれこそ「叙事詩」といわれる大小説をつくってもらいたかった。また、何も北海道とかぎらないでも、広い意味の題材についての創作化を望ましくおもうのである。警察署で死ぬよりも、生きてヒューマニズムにたつ一般文学をかく方が、小林の生きる道だったかも知れないともおもう。島木は大学時代に実際運動をして、よけいに身体を弱くしたが、小林の健康は頑強だったからまだ若くもあったし、あるいはすばらしい記念的な文学作品を、ぞくぞくと書かなかったろうと、誰が断定しえよう。

そこで問題は、共産党が非合法だった日本で、作家に実際運動をさせた指導理論の誤りを指摘したい。実践運動をすれば、作家生活への心持の落付と時間がまず破壊され、つぎに生命まで危険にさらされることは解っている筈だ。小林多喜二などはまさしく誤れる指導理論の犠牲になったのである。むろん運動に入った当人の反省も足りない。指導理論のもう一つの誤りは、公式的な形式の押しつけであろう。本場のソ連でもその後エーレンブルクの「雪どけ」（一九五四）がでた。これはスターリン治世下の官僚主義的、利己的な工場長を描いたものだ。スターリン治世下の出来事だから、フルシチョフの時代にでたのだろうが、しかしああいう革命人の作品でないものがソ連にでるようになった時潮に注意される。しかも、「雪どけ」の文芸思潮は、その後も干上るどころか、ぞくぞくと増している。エーレンブルクが「追憶」の発表朗読会をしたとき、数千の青年読者がつめかけたという。これもまたスターリン治世下の社会を扱っている。例の「パンのみによって生きるに非ず」（一九五六）は、新人のドウディンチエフの作品である。これもやっぱりスターリン治下の無名の発明青年に対する官僚主義の不正を描いている。筋をいえばながくなるから略すが、いくら政府筋の「作家同盟」が発表を好まないにしても、結局「雪どけ」文学を発表しないでおられない時勢のつよい進展には、抗しがたいのである。

しかし、もう一つの「雪どけ」作のあの「ドクトル・ジバゴ」（一九五五年脱稿、五七年イタリアのミラノで刊行）の作者のパステルナークに「ノーベル賞」を辞退するように仕向けたソ連は、やっぱりごろいんだ。「ドクトル・ジバゴ」は何といっても、あの一九一七年の十月革命の暴力を批判し、否定した作品だから、ソ連としては、それへの受賞は、望ましくなかったろう。「ノーベル賞」を指定されたとき、パステルナークはひどく喜んだ。実際どんなにうれしかったろう。しかし、当局はさんざんにわる口をいった。パステルナークは祖国にとどまることを望んだから、自分の方から辞退を申出さないでいられなかった。彼自身十月革命の暴力のギセイをうけていたのに。ただ作品の主人公のように、パステルナークは野たれ死しなかっただけのことだ。しかし、「ジバゴ」はなかなかいい作品であっていつまでも生きるだろう。かきたいだけながくねばりづよく、勢力的にかいたところもロシヤ人らしい。

統制文学なんて、いつまで作家たちをしばっていけるだろうか。作家らの内部でも、内心苦痛をもっているに違いない。今ソ連からときどき文芸家がやってくるが、ある談話会のとき、統制文学に疑いをもたないかと尋ねたら、しどろもどろだったと、私は感じた。統制は芸術の本質に反するからである。文芸家らを自由に制作させたら、この国らしく大文学が生れるだろうのに、惜しいことだ。

上にのべたように、文学の事情は「雪どけ思潮」が、せきを切って奔流しているが、他の芸術にも、そろそろ統制をゆるめている風がみえる。音楽と演劇が立証している。芸能の部分は、大衆への影響が大きいけれども、「社会主義リアリズム」なんかのワクをもうはめていられない。

小林多喜二の作家的な才能を高く買うだけに、あんな時代にでてきて偏向した文芸をかき、それに疑も持たなかったばかりか、実践運動をして若い生命をちぢめたことを残念で仕方がない。彼に自由な作家活動をさせたかった。彼の死後三十余年後に私は上の言葉を、広い文化史の立場にたって、彼の霊につげたいのである。

（昭和四〇・一）

〈多喜二の碑型決まる〉

碑の設計は本郷さんに依頼しいろいろ案を練ったすえ、レンガで縁どった鉄筋コンクリート台の上に、登別の硬石を積み重ねた高さ五㍍、幅二㍍ちょっとの二つの壁を据え、石壁には「小林多喜二文学碑」の文字と、彼の作品のなかから小樽を愛した文、さらに生い立ちをブロンズで浮き出させる。また左は、等身よりひと回り大きい厚肉のブロンズ胸像をはめ、壁をくりぬいて裏側に出し横から光を入れて像の立体感をきれいに出す仕組み。

建設場所は、小樽の港とマチをすっぽり見おろす旭展望台裏のガケの上にある千五百平方㍍ほどの市有地に決まり、ゆくゆくは玉砂利を敷きつめて花壇をつくり、ベンチも置いた小公園を計画している。

（北海道新聞所載）

広告マッチと美術印刷・紙工品
是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕
株式会社 三優社
京都市下京区寺町通松原下ル
TEL. (35)0271・4950・7713
取締役社長 山村太兵衛 （昭12）

小林多喜二と人口論

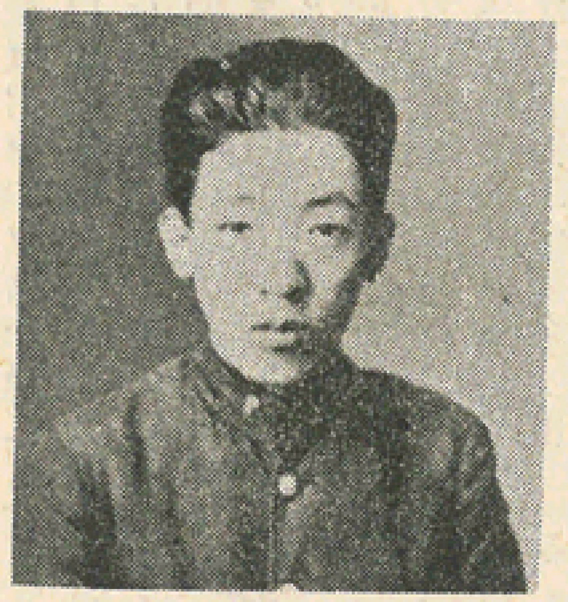
南亮三郎

この原稿は数年前、小林君の二十五年忌のころに書いたもので、未発表のまま今日にいたりました。編集者から度重なるすすめを受けたのを機会に旧稿のまま本誌に寄せることにしました。

I

中央公論に連載された伊藤整君の「若い詩人の肖像」（同誌昭和三〇年九―一二月号所載）を面白く読んだ。この作品は伊藤君が大正十四年に小樽高等商業学校を卒業せられた頃から昭和三年東京商科大学入学のために上京せられる頃までの数年間を自伝風に精叙したもので、地名も登場人物をほとんど悉く実名であらわれてくるので、その土地や人物に関係のあったものには格別にふかい興趣と親しみとを感ぜしめる。私の名もどこかで一回出ていたが、このように詩人として成長して行かれた当時の学生伊藤整君に、まだ二十歳台の若い教師としての私などがどんな印象を与えていたのだろうかと思うと、心恥かしさで耳の根元が真赤になりそうである。

ところで、この作品には、終りの方で小林多喜二君と伊藤整君との交渉のことが書かれている。小林多喜二君も小樽高等商業学校の出身で、伊藤君の一年先輩であった。小林君は大正十三年に同校を卒業して北海道拓殖銀行小樽支店に勤務していたが、いま「若い詩人の肖像」を見ると、その小林君と伊藤君との間に交渉が生じたのは昭和二年の春頃からであった。妙見川のほとりの、「越路」という喫茶店の二階がその場所であったらしい。伊藤君は小林君の風貌をこう描写している。



高商卒業当時の多喜二

「小林は、暗い写実主義の手法で、菊池寛が書いたような一種のテーマ小説を書いた。また彼は、色白で細面の小柄な男であったが、きっとなって人を見つめる癖があり、本質的の強気で、身体ごと物事にぶっかって行くという雰囲気を身のまわりに持ち歩いていた。彼が学校の雑誌に芝居で豚になって女を襲う役をする男が、それがもとで恋人に見すてられるという話を書いた時、彼はその役をした某君をモデルにしたのではない、と断り書きした。これは面白い、書こう、と思えば、彼は容赦をしなかったのである。だから、彼が左翼運動に入っているという噂を聞いた時、すぐ、それは本当だろうと私は思った。……小林を小林たらしめたのは、その敢て事をする気質とそれまでの四、五年間にこねまわすようにして身につけていた写実主義の手法の確かさであった。」

伊藤君はまた、自分の生い立ちを小林君のそれと比較し、作品にも人物にも強くふかく刻みこまれた小林君の性格をこう指摘する。

「私は小林のように叔父の庇護を受けて、やっと学校にやらせてもらうというような屈辱感なしに少年時代を過した。そして、潜水夫の空気ポンプを押して金を得るというような倦怠感で人間らしさをすりへらす労働をしたこともなかった。小林は社会的怨恨の感情というものを深い蕊に持って育った魂であったのだろう。」

いかにも小林君の風貌や性格がよく描かれていると思う。文学の性格や特色はよく分らないが、私の眼にうつった小林君の人間像も、たしかにそういうものであった。時はすでに三十年を経過しているが、いま思い出しても小林君のあの小柄で精悍な、しかしどこかにふかい陰の刻みこまれた面影が生き生きと浮んでくる。私は今、伊藤君の作品を昔なつかしく読んで小林君のことを思い出し、人口問題にからんだ一つの挿話を記そうと思うのである。

II

小樽高等商業学校は由来変り種の人物を多く出した学校で、私が東京の大学を出てすぐそこへ赴任した大正十二年の春には、虚子の曹子の高浜年尾君や小林多喜二君が三学年におり、伊藤整君は二学年にいた。この初年度に私は三学年でキャナンの"Wealth"を講読したが、二学年では秋の学期から大熊信行氏に代って経済原論の講座を担当し出した。伊藤君はその講義を聞いてくれたのであろう。しかし私は着任早々のことであり、また私の講義は語学などの場合と違って、二つとか三つとかのクラスを合併して行なう「合併教室」での講義であったので、個々の学生と相識るという機会は比較的少なかった。

学生としての小林多喜二君を知ったのは、この最初の年に私が校友会編纂部の部長になった時であった。小林君は編纂部の学生理事として、校友会雑誌の編纂をしていた。小林君がどんな人であり、どんな文学作品を書き出していたのか私はよく知らなかった。次の号の編纂の方針について相談にきたのが小林君を知る最初の機会であった。内容については私は何もいわなかった。ただこの雑誌は在学生の間ばかりでなく、卒業生との連絡の機能も果しているので、雑誌の末尾に同窓会関係の記事

をのせるスペースをとり、その部分をはっきりした体裁であらわすように本文との間に、赤い挿し紙でも一枚入れてはどうか、と私はいった。小林君は、「それは大した問題でない」といったようであった。いわれてみれば本当に大した問題でもないことを提案したものだが、小林君の返答もまたかなりとげとげしいものを含んでいた。この男は変わっているわい、と私はそのとき思った。やがて出た校友会雑誌には赤い挿し紙はむろん入っていなかった。

　在学中の小林君の記憶は、これだけであった。それから数年たって昭和二年の晩秋のことであった。当時小樽新聞の記者をしていた早稲田大学出身の米山勝美君（後に奈良と改姓）が、カア・ソンダースの"Population"という一書を飜訳し、北昤吉・高畠素之両氏編纂の新学説大系の一冊として「人口問題研究」（昭和二年一一月、新潮社刊）という書名で出版した。訳者の米山君は小樽中学の出身であったせいもあろう、この書物の出版後間もなく小樽中学出身の有志が集まって米山君のために出版祝賀会を催した。場所は公園通りの中程にその頃建ったばかりの千代田ビルの中の一室であった。

　私は小樽中学と何の関係もなかったが、学校での経済原論の講義の一部として人口問題の研究をはじめて居り、米山君が訳筆を進めていられる間は、何度かその訪問を受けたりした関係があったので、出版祝賀会には特に案内を受けて出席した。司会は誰がやったのかは、記憶にないが、その席上で私は司会者から指名されてスピーチをやった。その当時は全国の経済学者の間に人口問題が盛んに論じられ、高田保馬、河上肇、矢内原忠雄、大内兵衛、小泉信三等々の第一線の論客が「マルサスかマルクスか」といった問題で華やかな論争を展開していた矢先きであり、私もまた大正の末年から幾つかの人口論文を発表していた際であったので、私のスピーチには相当熱がこもっていたに違いない。その中で私は、マルクス学説にも言及して人口問題は社会主義社会でも避けられない旨を述べ、そのように重大な問題の参考文献としてカア・ソンダースの訳本が出たことに祝意を表した。

　ところが、私の祝賀スピーチが終って着席するや否や、席の横の方から一人の青年が立って言葉はげしく私のスピーチを反駁し出した。見ればこれは上気したように顔を赭らめた背広姿の小林多喜二君であった。

III

　小林君の反駁の要旨は、人口問題は資本主義社会の矛盾の一発露にほかならず、その秘密をえぐり出したマルクス主義の学説は、人口問題の永久の解決方向を示している。というにあった。言葉は少なかったが、その態度には寸毫の仮借をもゆるさぬ鋭さと不敵さがあらわれていた。

　思いがけない論敵の出現で、私は瞬時、どきんとした。祝賀会の席がたちまち火花の発する論議の場所となった。私は困ったなと思った。しかし、ここで黙しているわけに行かなかった。私は再度立ってこれに応酬した。「資本論」に書かれたマルクスの学説は資本主義社会の人口問題を説きつくしたものではない。マルクス主義の体系には、実は人口の理論は欠けているのだ。その証拠に——と私はそのとき、マルクス主義者として生涯をはじめながら人口理論のブランクを認めて自らこれを埋めようとしたカウツキーの青年時代の書き物のことを指摘したり、カール・マルロオという社会主義人口理論家のことを例証にあげたりして、マルクス主義はまだ決してマルサスの人口理論を全面的にくつがえしてはいないのだ、とのべた。

　この例証をもってする私の答弁は小林君の再度の発言を封じてしまった。小林君はなんにもいわなかった。しかし祝賀どころか、気まずい空気の中で幕となった。小林君は仲間の若いグループにかこまれて、席を蹴るようにして出て行った。私も間もなくそこを出た。玄関を出るときに、小樽中学の出身であり、米山君や小林君らの古い先輩に当る人で高等商業学校の英語教師をしていた私の同僚教授小林象三君とぶっかった。小林教授は持ち前の剽軽（ひょうきん）な表情で、にっと私に笑い顔を見せて、あたふたと雪解けのぬかるみの路上へ出て行った。

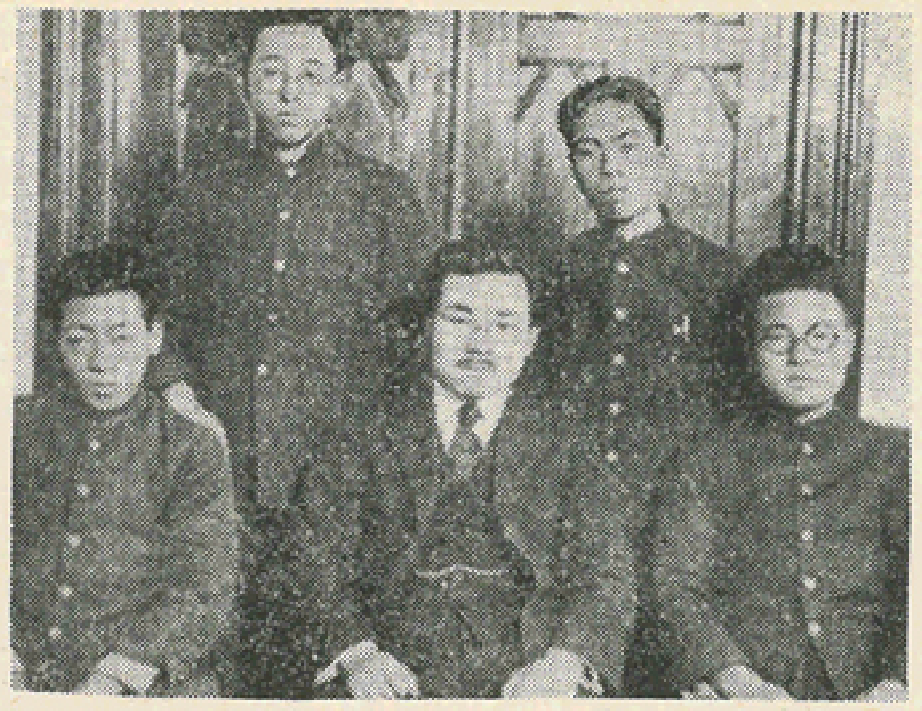
　その笑いが、神経の立った私には何ともいいようのない不快を感じさせた。私はその足で、自宅へ帰る気はしなかった。小林教授と同じように公園通りを右に向えば自宅への帰路であったが、私は左に向って歩き出した。この日まで、私は私なりにマルクス主義には相当に理解をもっていると信じていた。しかしこうして小林多喜二君から強い反撥を受けてみると、自分の周囲にはいつの間にか思いがけない大きな溝が掘りあげられて、どこからも手の届かない完全な孤独に投げこまれたような気持ちを味わった。昭和年代の初頭——日本の社会は人口問題とともに、目には見えない深刻な階級対立をはらみかけ、気慨に満ちた若い人びとは相ひきいて尖鋭な思想方向と実践運動とに身を投げこんで行ったのである。小林多喜二君もその一人であった。

　後年——それも昭和八年二月二十日、地下活動中の小林君が捕えられて、翌二十一日築地警察署の留置場で謎の悶死を遂げてしまってからずっとあとのことだが、小樽中学の出身者のある人から、昭和二年の晩秋のあの気まずい会合のあとのことを聞かされた。小林君は気負いこんで私の所論を反駁したものの、その反駁を彼の知らない豊富な研究の例証でたたかれてあとが続かず、非常にくやしがったということであった。小林君は学生時代から文芸作品を書いていた。そしてマルクス学説やその他は在学中の講義からでも知っている筈であった。しかし、あの強い気性で断乎として方向を左翼に取りマルクス＝レーニン主義と本気で取り組み出したのは、昭和二年の春からだといわれている。そんな矢先きが、米山君の出版祝賀会の席上での私との人口論議であった。

（次頁へ続く）

多喜二の思い出

糸魚川祐三郎


校友会誌編集部　前列左から　多喜二　糸魚川先生　高浜年尾　後列左から　佐々木妙二　安野安平

　私は母校へ奉職するといきなり校友会誌の編集に関係をもたされた。大正十一年のことである。武田英一先生が、君は雑務のできる母校出の教師だからとて押しつけられたものである。その頃校友会誌は文芸部の生徒が編集を担当していて、ある意味で文芸部員生徒の同人雑誌的色彩もあった。私の任務は、校友会誌のそのような色彩が濃くなりすぎるのを適度におさえて、同窓会記事を載せることにあった。その雑誌の出版費はもちろん同窓会から出ていたからである。私が同窓会員であることの他に文芸趣味をいくらか持ちあわせていたこともそのような仕事をおしつけられた理由の一つであった。

　部員に小林多喜二、高浜年尾、佐々木妙二などがいた。部員が書いたものを、編集上の必要があったことからしても、たまに作品の合評会をやった記憶があることからしても、読んだに違いないが、何を読んだかさっぱり記憶がない。多喜二は、自分の書いたものをあまり校友会誌には載せなかったような気がする。私もあまり書かなかった。同窓会記事は書いたおぼえがある。しかし多喜二が何か私の書いたものを読んだのであろう。「先生はそのような見方をなさるんなら、ビョルソン（ツルゲネフであったかもしれない）のものをお読みになったらよいでしょう」といった。そして私はコイツ生意気なことをいう生徒だなと思ったことをおぼえている。

　それから私がゾンバルトの「近世資本主義とユダヤ人」の英訳を図書館から借り出していたら、多喜二が「先生、私も読みたいから図書館へ返して下さい」と言ってきたことがある。この生徒、単なる文学青年でなく、社会科学の勉強をしているなと私は思った。

　卒業近くなって、多喜二に「君は作家を志すのか」と聞いた。すると彼は「素質、能力がないのに作家を志してブラブラしているのは、それだけ社会に寄食することであって、社会的な罪悪です。私は会社員になって、自分の生活を支えながら創作を続けます。社会が私の能力を認めるなら、その時、私は会社員をしなくても食っていかれるようになるでしょう。」と言った。

　彼が作家として認められ初めたとき、拓銀の小樽の店にいたが、銀行員として勤めながら知名の作家であることに、銀行は難色を示しているという話を誰からか聞いた。

　特高に追いまわされ初めた頃、妙見川筋でポッカリ彼に会った。青ぶくれのした元気のない顔をしていた。「どうだい？」と聞いたら「駄目です」というような意味の返事をした。何かほかの話もしたが、はっきりした記憶がない。

　以上が私の、多喜二についての思い出の全部である。

　なおその頃の文芸部員といっしょの写真が、「日本文学アルバム」の小林多喜二編に載っている。その写真は私のアルバムにもはってある。

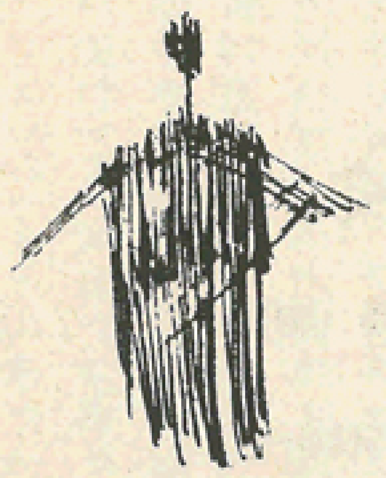
（大七・元教授・松商学園長）

IV

　伊藤整君が「雪明りの路」ともいうべき魂の苦難の道をひたむきにおって今日を成す土台を築かれたごとく、小林多喜二君も異常な努力を重ねて文学史上の不朽の地位を築いた。教師を教師とも思わず、対等の論客として旧師に食ってかかり、そしてそこから刻苦彫磨の衝動湧立たせるといった生き方——小林君はそうして大きく伸びて行った。そしてそれはひょっとすると、あの当時に満ちていた小樽高等商業学校の自由な空気と、若い学徒たちのがむしゃらな向学心と何かの結びつきがあったのかも知れない。

　ただ、そういう空気の中にありながら、そして自分自身でもそんな空気を濃厚に身辺に漂よわせていながら、小林君との間にこんな気まずい思い出を残してしまったのは、私もまた教師として未熟に過ぎたせいであったろう。

（大九・元教授・中央大学教授）



小林多喜二特集号に寄せる

室谷賢治郎

故小林多喜二君と私とは、緑丘学園で大正十二年度に、師弟関係が結ばれた因縁をもつけれども、特別に深い繋がりはない。小林君は、私が一橋の商大を卒業して、緑丘の教員に任用されたとき、最上級の三年生に在学していたのである。私の担当学科は、二年生全体に対する「経営学（当時は「商工経営」という名称であった）と、三年生に対するゼミナール予備形式の原書講読（これを「分料」と唱えていた）と三年生全体に対する商業実践の授業とで、私の「分料」に入っていなかった小林君は、夏休終了後の第二学期から始まる実践の時間に、毎週指導教官のなかに交る若輩の私を、観察していたわけである。私の分料のテキストは、**A. Marshall: "Economics of Industry"** を使用したが、これは既に私の着任する前に、学校の教務部で選択したものである。この特集号の寄稿依頼者になっている大十三代表香川清夫君は、実に、この時の私の「分料」に登録済の士である。

右の次第で、小林多喜二特集号に何か寄稿せよと依頼があっても、私には一寸困惑を覚えさせられるのである。しかし、〆切を延期しましたのでと、再度蟇目君から知らされると、執筆推薦者が中野清一君であったことに省みて、寸言を寄せずには済まされなくなった。

とは言え、文芸作家としての小林多喜二を取上げるのは、私の任とするところでない。社会運動家としての故人を論評するのも、ここでは差控へたい。唯々、私としては、三才違いの弟子に当る小林君が、死に至るまで常に自己を内省し、社会を凝視し、理論と実践との矛盾を絶えず超克しようと努めたスピリットに対し、少なからざる敬愛の念を抱かせられるのである。小林君が「秋田県の没落した貧しい農家にうまれ、北海道へ移住した一家とともに、小樽の労働者街で幼少年時代を育ち、伯父のパン工場で働きながら、小樽商業に通い、伯父の援助で小樽高商を卒業」（小林多喜二「蟹工船・党生活者」――角川文庫版、巻末手塚英孝解説より）したという家庭の事情もさることながら、凡庸な薄志弱行の徒の到底企て及ばない熱意が放射されたからこそ、小林君は尚ばれる存在なのである。しかるに大衆の間には、ともすれば小林君の事志と違い、ミゼラブルな悲劇的場面となった点のみをクローズアップして、これを世俗にどぎつく訴えようとする輩が見られる。小林君を英雄に祭り上げ、偶像崇拝を世俗に強要しようとする魂胆とも受取れる。これは故人の特性を正しく認識し、判断する所以では断じてないと私は思う。小林君の骨頂を、そんな浅薄なものと私は考えたくない。

近く小樽には、小林多喜二碑が建てられることとなり、期成会が動き出した。当初の一部の計画では、獄舎の鉄窓から首を覗かせている故人の姿を、巨大な彫像に仕立てるというのであったと聞いた。真偽の程は保証の限りでないが、聞いただけで唖然となる。これでは彫像を打ち仰ぐ青年男女に、何を学べというのか、莫迦も休み休み言へと怒鳴りたくなる。

旧臘、私は京都で開催された学会に出席し、そのとき俳聖芭蕉の門弟で、十哲の一人に数えられる去来の住んだ落柿舎を訪れる機会に恵まれた。嵯峨日記のものされた庭先には現代の俳匠高浜虚子の句が、私とほぼ等身の花崗岩に刻まれている。その句は、去来の墓が日本一小さいという意味の十七文字である。約百歩を隔たった竹籔のなかの去来の墓はまことわが膝を土に着けて拝まなければならなかった程の低い三十糎程の鳥帽子型の自然石一個である。私は、その墓の前の地上の落花を一片拾い上げてから、二尊院前に待たせてある車の方へ踵を返した。

記念碑、記念像、彫刻か、彫出か、矮少にするか、巨大にするか、金属か、石か、木か、――材料手法は千差万別であろう。すべては後に至る人々が、どれだけの尊敬と愛情とを以て、これを打ち見ることかに係る。小林多喜二碑の落成を私は期待し、故人の真の精神が大衆に謬なく了得されることを念願してやまない。

（巳年一月三十日）

（元教授・札幌短期大学学長）

積水化学工業
新日本窒素肥料
旭化成工業
特約代理店　プラスチックの綜合商社

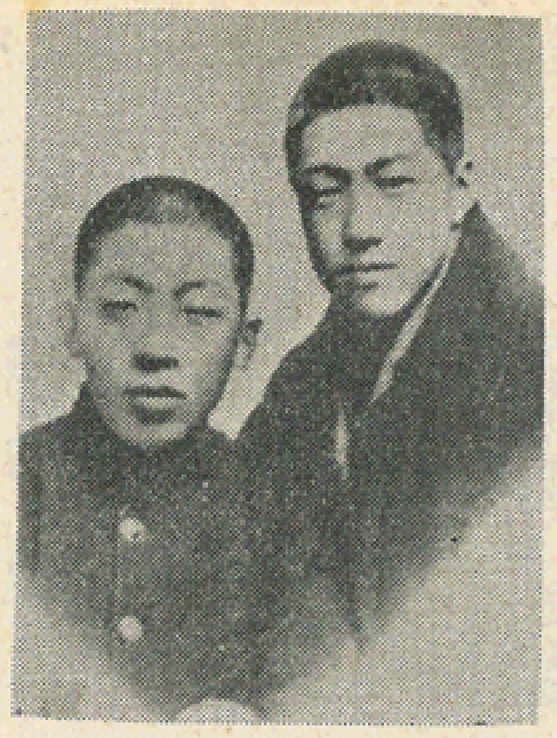
田中弥商事株式会社

取締役社長　田中弥三郎（大12）　専務取締役　山家利典（昭13）

（本社）大阪市東区北浜2丁目74番地　TEL(203) 6556(代)～9
（東京出張所）東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地　TEL(251)2271・5259

少年の日の多喜二

片岡亮一



小樽商業卒業のころ（左）喜多二（右）筆者

一

大正五年春、庁立小樽商業学校に入学して間もなく、上級生のO君の引合せで、多喜二との交友が親密となった。私は量徳小学校、多喜二は潮見台小学校の六年を卒業して、共に庁商に入学。O君はやはり潮見台小学校出であったから、いわばO君は多喜二の先輩であったわけだ。O君は後に小樽高商でも我々の先輩となったが、高商卒業前に登別で小樽の芸妓と心中して世を去った。

二

多喜二は庁立商業在学中は、小樽中学に隣接していた伯父の家に住み経済的にも、その世話で通学していたが、私の家とは、徒歩七、八分の所であったので、二人は極めて頻繁に往復した。共に絵をかき、短歌を競作し、また小説を書き、そして回覧雑誌を出すなど、いわゆる文学少年としての交友が続いた。しかし、多喜二は、その頃から、私などに比し遥に真剣味があったように思う。

三

小樽高商時代、あるいは、その卒業後暫くの間も、共に同人雑誌を経営し、私は専ら短歌に進み、多喜二は小説に集注して、すでに才能を示した。また、その方面の交友の範囲も大いに広くなっていた。既刊の多喜二に関する伝記のものなどに記述せられている通り、学校時代の多喜二の生活は物心共に決してめぐまれたものではなかった。彼の小説がプロレタリア文学に走ったのも故なしとしないわけである。（当時の関係者が現存していることでもあり、この辺の詳述は、今暫く遠慮せざるを得ない）

四

かなり極端な外股で、しかも胸を突き出し、肩をいからしたような歩き方の彼。一人の時は、やゝ厚みの口を一文字に結んで、考え深い目をしていた彼。しかも興が乗れば活弁の真似をしたり、にぎやかにはしゃぐ彼。私がある女性に思いを致しているのを知ると、その女性の名で、私宛に手紙を寄せ、デートの促進を図った茶目気を持つ彼。（これは私が見破ったので何事もなかった）その報復に、当時、多喜二は志賀直哉に傾倒していたので、私が、志賀直哉の名で、その文字を真似て多喜二宛に、「近く渡道する」旨の手紙を出したのを、真に受けて大さわぎとなった純真な彼。等々。数多いおもい出はすでに四十余年の彼方となった。（大一四　東京中小企業投資育成㈱常任監査役）

伊藤整　著

「若い詩人の肖像」から

その頃小樽で「クラルテ」という雑誌が出たことも私たちを刺戟した。その同人は平沢哲夫、小林多喜二、武田暹などであった。彼等は東京の文芸雑誌の投書家として、その実力を知られている人間か、でなければ、短歌の盛んなこの町での、文学のヴエテラン達であった。「クラルテ」というのは第一次大戦に参加して、後に、急進社会主義者となったフランスのアンリ・バルビュスの同名の小説から取った題にちがいなかった。

彼等はこの田舎町で言わば権威のある存在であった。私はその平沢哲夫とは文通はしていたが逢ったことがなく、小林多喜二とは毎日逢っていたが交際がなかった。その雑誌は真白い表紙に赤い大きな片仮名で「クラルテ」と横に書いてあり、大変新鮮な感じがした。その時私は殆んど知らなかったが、小林多喜二はこの頃から社会主義的傾向を持つと同時に志賀直哉に傾到し、雑誌に載った自分の作品を志賀直哉に送って批評を受けていたのである。

彼の志賀崇拝は大変強烈なものである時仲間の誰かが志賀の名前で、近く小樽に旅行するから逢いたいという手紙を小林に出した。小林はそれを真に受けて本気なって待っていた、というエピソードのあった時代である。この雑誌には小林多喜二が小説を書き、大態信行が詩を書いていた。

多喜二氏の絵

高桑市郎

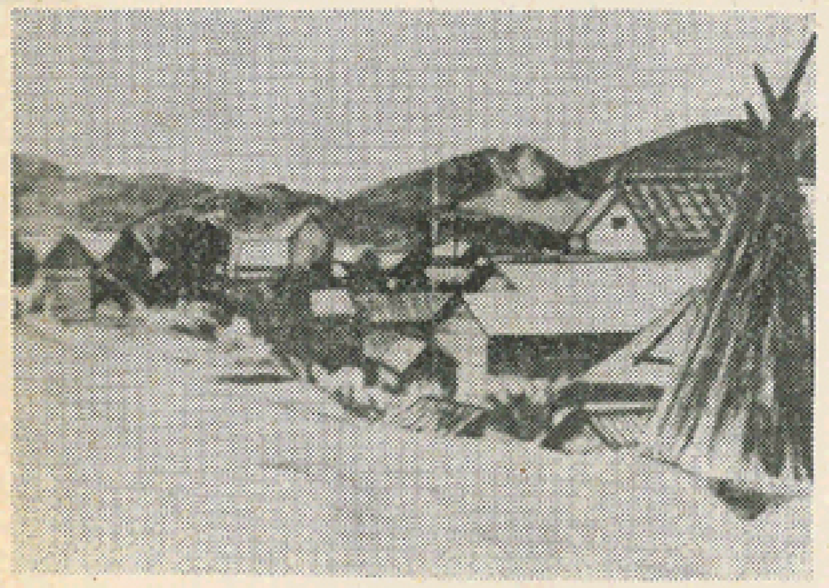
当時雑誌「文章世界」でコマ絵なるものを募集していましたが、この絵は写実よりも感覚を図案化したものに近いペン画でした。

多喜二氏はこれに投稿していたと言うことでした。

多喜二氏は庁立小樽商業時代、私が同氏の上級生の灰野文一郎（現日展会員）等と洋画研究所を開設した時、研究生として来たことがあり、

小羊画会　左から　多喜二　斉藤次郎　木下鳳一郎　灰野文一郎　西村羊三　高桑市郎

多喜二氏は無口で素直で絵の基礎的素養なしに大担ないわゆる自由画的な水彩画を黙々と描いていました。用紙は当時水彩画用紙として一般的の木炭紙の四分一大で、絵の具も泥絵の具に近い安物と太い筆を使っていました。従って、その絵はセピヤと濁った濃緑系が主で陰鬱な絵であったと記憶しています。これが彼の個性に適していたのかも知れません。（大一四　扶桑交易株式会社代表取締役）



水彩画

多喜二の想い出

久木久一

入学試験のとき、簿記か商算の試験がすんで、昼の弁当を喰べていると、握り飯を掴みながら、オイこの問題はこれでいいのかいと、見ず知らずの私のところへ聞きに来たのが多喜二である。入学を許されて同じ教室に彼を見出したので、始めて名前を知ったのである。ところが彼は新富町、私は入舟町なので、帰りにはよく一緒に歩いたものだ。彼は私に「お前は哲学なんかやって何になるのだ」とひやかすので、私は「お前は小説なんか書いたってどうするんだ。小説以上に面白い話は街に一杯あるぞ」とやり合ったものでした。

確かに彼が校友会誌に書いた小説はズバ抜けてよかった。読み始めると最後まで読ませたのは彼の小説だけである。彼は教室ではいつも後ろの方に席をとり、授業中も教料書で小説をかくして読み耽ったものだ。私も三年間彼と腐れ縁で同じ教室だったので良く覚えている。そして私にストリンドベルヒやその他の小説家の名前を教えたのも彼である。また当時校友会誌に小説や哲学詩歌の類しかのらないので、大いに憤慨していた矢先に、編纂部員の彼から是非何か書けといわれるままに、書いたのが Demurrage論である。そのために卒業のときは、彼から編纂部の銀メダルを一コ貰い、いまでも記念にとってある。彼への懐しいおもい出である。

卒業してから彼は拓銀に私は兵隊にと別れてしまったので消息がわからなかった。そして彼の最後を知ったのは、新聞記者が彼のことを糸魚川先生に聞きに来たときである。惜しい男を死なせたものと思った。彼は在学中は別に思想的にはなにも片寄った考えを持ってはいなかった。

それはあの校友会誌にのった小説や彼との会話で充分証明できる。しかし彼はよくしゃべる男だった。われわれが話していると、よく横合いから首を突込んできたものだ。いづれにしても彼は面白い男であった。頭がでかくて背が低く、風采はあんまり上がらなかったが。

今度小樽に彼の碑が建設されるようになったが、小樽高商の名物男多喜二の永遠の記念に、そしてわれわれの脳裡にいつまでも刻み込まれて忘れ去られることはないであろう。

（大一三　小樽商大教授）

写真の三人(?)

福田勇一郎

（左から）　乗富君　多喜二君　筆者

この写真は卒業の直前のであるから丁度四十年の昔である。三人とも長髪で気取ったポーズで写っている。戦災で全部焼いたが、奇しくもこれが私の手許に残った。

何ということもなしに、この三人は親しくなり、学校の帰りによく誘い合わして地獄坂を下りた。あるとき小林君が「マルクスってどんな顔？」と言い出したので坂の途中から図書館に引返し、河上さんの「貧乏物語」を借りて、その写真を見せたことがあった。

築港駅近くの小林君の家に遊びに行ったことがある。書棚にゲーテ全集が光って並んでいた。大学ノートに小さくぎっしり書き込んだ彼の小説原稿を繰りながら「志賀（直哉）先生から返事を貰った」と嬉しそうに話したのを覚えている。後年の彼をおもわす片鱗だに見出すことが出来なかった。もう一人の乗富道夫君は当時から尖鋭的であったようだ。彼から借りた当時発禁の書「共産党宣言」英訳本を徹宵して読み興奮した記憶がある。

卒業して小林君はT銀行小樽支店に、乗富君はY銀行函館支店に、私は東京に勤めることになって分散した。乗富君が函館の埠頭で遠洋漁船の船員から入手した手帳が小林君にわたり、それがやがて彼の作品「蟹工船」となった。

小林君が銀行を辞めるのと前後して乗富君も職を棄てゝ上京し、計理士の仕事をしながら左の運動に入った。前に戻るが、この写真が出来てからのある日、小林君は「昨夜、おばあちゃんに見せたら、この三人ともロクな死にかたはしないと言った」と笑っていた。

後年小林君は周知のようなことになり、その葬儀に列した乗富君も、その後二年を経ないで肺を患い寂しく逝った。その頃の私は札幌に勤務していた。

爾来渺茫三十年、辛うじて生残った私は、この先何時かっての小林君のお祖母さんの予言に例外を作らないことになったとしても悔はないように思う。

（大一三元朝日新聞社代表取締役）

小林多喜二 検束中急死

「不在地主」の作家

（昭和八年二月二十二日 大阪朝日新聞 所載）

「不在地主」「蟹工船」などの階級斗争的小説をものしてプロ文壇に打って出た作家小林多喜二氏（三十一年）は二十日正午ごろ東京赤坂区福吉町の芸妓屋街附近で街頭連絡中を築地署員に検束され取調中、午後五時半ごろ突如蒼白となり苦悶し始めたので同署裏にある築地病院の前田博士を招き手当を加えた上午後七時ごろ同病院に収容したが、すでに心臓痲痺で絶命していた。

二十一日午後東京地方検事局から吉井検事が築地署に出張、検視する一方取調べを進めているが、捕えられた当時大格闘を演じ、殴り合った点が彼の死期を早めたものと見られている。（東京）

文学の本質を考える

—小林多喜二の没後三十年に—

瀬沼茂樹（文芸評論家）

当時、川端康成が『三月文壇の一印象』（昭和八年四月・新潮）という文章で、珍らしく激しい調子で小林の死に弔意を表わしていた。この一文はむかしの『川端康成選集』第八巻にはいっているが、かんじんの冒頭の部分が削られているため、川端氏のショックは弱められている。あの災厄の時代をしのぶため少し引用してみよう。

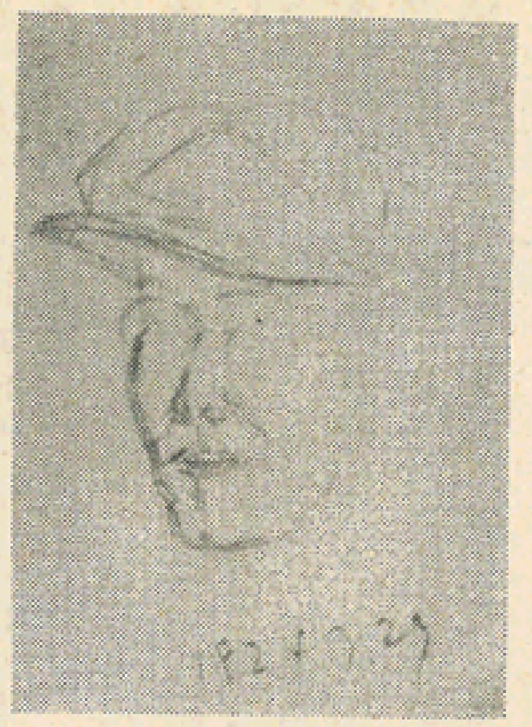
『小林氏の運命はやがて他のプロレタリア作家のうへにも相次いで降りかかる恐れが十分あるゆえ、いはゆる芸術派の文学者達も、そのやうな受難の続くのを防ぐために、せめてなにかの（伏せ字十一字）は、自由主義の文学者の良心的義務であると考へられるが、それもまた小林等の思想に立たざる限りそのやうなまぬるい動きは最早無意味に近い今日である。いまさら世相の険しさに驚くより先に、私は自らの暗さに堪へ難いのである。』（原文通り）

ところで、いまここへ川端康成を引用したのは、以上のことを紹介するためではない。同じ文章で小林の絶筆となった『地区の人々』をとりあげて、『生活の指標も希望もない諸家の作品を読み疲れた私を救い出してくれた』といい、さらに『私を明るくしてくれた唯一のものだ』とまでいい切っていることである。

（昭三八　北海道新聞所載）

小林多喜二のある一面

島田正策


多喜二描く筆者の顔

「如何に嘘をついたか」というのが彼の北海道拓殖銀行入社受験の弁である。「しかし、むこうでは高商で十八番とは大変良い成績ではないか、といはれた」と云っていたが、一体どういう嘘をついたのかは、いま何も記憶がない。

それから一年位経ってからの事と思うが、庁商時代小林と同期の斎藤次郎君と三人札幌へ出て、夕方帰りに北一条にある拓銀の重役の所へ寄り、私と斎藤は外に待っていて、彼一人塀のある大きな邸宅に入り、しばらくして出て来た。後で訊くと東京支店詰を頼んだのだという。

小林は小樽にいる間、若竹町の小樽築港駅の側に住居があって、南小樽まで汽車で出、それから色内町まで歩いて出勤していた。私は南小樽の近くに住んでいて拓銀の向いの三菱鉱業に勤めていたので、大抵いっしょに出勤していた。だからほとんど毎日のように会っていたが、遂に東京勤務は実現せず、そのうちに小林は街を歩きながら英語の本を読み始めた。あまり珍らしい事なので、何かあるんだなと思った。受験ではないかと思って訊くと、矢張り東京高商の専科を受ける積りだった。

しかし、受験で上京して帰って来ると芝居の話を皆にする。いま憶えているのは山本有三の「同志の人々」で確か猿之助が主演したものだったと思う。小林がそういう話をすると先ず天下一品といいたい程上手で役者のしぐさや台詞をこまかく、手に取るように話し出す。皆は神妙に聞いていた。

結局東京高商の受験も失敗に終った。拓銀入社当時は余程東京へ出て文学を勉強したかったらしいが、東京行きの計画が失敗しても、特別くじけた様子もなく、何時もと変りない様子だった。

話が変るけれども、彼はしばしば「俺は女子大出を嫁さんにもらうんだ」といって「妻をめとらば才たけて……」と歌ったりしていたが、大抵の男性がそうであるように、何処かに美人が居ると、すぐPRをはじめた。決してかくして置く事がなかった。

小林の女性観は恐らく晩年頃には確立されていたと思うが、「年に十三回血を流す冷血動物」というのがある。彼がストリンドベリイを勉強していた頃聞いた警句である。

人間というものは大きな事件に打ち当ると始めて真価が発揮されるものだと昔からいはれているが、或る日の拓銀で給仕をしていた佐々木キヨという女の人が、大金庫のなかで書類を棚から取り出す為に、脚立に上って働いていた。所が何かの拍子にコンクリートの床へ落ちて、倒れてしまった。その物音で、銀行員が駈けつけたが、あれよあれよというだけで只見ているだけ。彼女は顔を打って血を出している。誰も助け起そうともしない。小林は急いで洗面器を持って来たりして手当をした。そういう話を聞いた。

彼女は人目をひく美人の方で、小林も一時は彼女にひかれた事があったが、「他の人が変に思うから」というふうに断られて、そのうちに遠ざかってしまった。

田口　タキ子
（小林多喜二撮影）

その他にも話題の女性は相当居た。大正十三年の秋、斎藤次郎、渡辺それに失名したが、当時舞踏病といろ、手がひとりでに躍り出す奇病に罹っていた小林の同窓生たちが、山遊びの帰りに寄った山キ屋という小料理屋で、素的な若い美人を発見したという話に、好奇心を持った小林がそこで改めて、田口タキという彼の最後迄愛し合った悲しい運命の女性とめぐり会った訳で、田口とのいきさつは、小林多喜二全集にくわしいので、この位にするが、彼女との関係が小林の思想上に及ぼした影響また、小林の思想が、彼女との関係に如何に働いたかは、甚だ興味のある問題だと思うが、余白もないので擱筆する。

「小林多喜二」から

手塚英孝著

入学いらいの友人だった片岡亮一は、母親と二人で若松町に住み、小さな小間物店をひらいていた。新富町の伯父の家からもちかく、多喜二は伯父の家であたえられていた台所つづきの薄暗い部屋から抜け出し、ときどき片岡を訪ね、夕食をともにすることもあった。島田正策も近くに住んでいた。ちょうど中間にあって気がねのない片岡の家はときどき親しい三人の集まる場所になっていた。

「大正九年二月七日の夜、我が友島田君と一室に集い、夜廻りの鐘をききつゝ永い夜を過ごせり。題は十二題にして、一題約十分なり。島田君――四十五首ばかり、片岡君――三十二・三首ばかり、しかして　我は――僅かに二十三首に過ぎず。

夜廻りの鐘に驚きペン置けば火鉢に残りし淡き日悲しも

一つ一つ淡くなり行く電燈を数えるか淋しこの頃のわれ

音もなくただしとしとと降る雪に港の灯りほのぐもり見ゆ

市井の人小林多喜二の片鱗

大野純一（前学長　名誉教授）

私は大正十一年の四月に小樽高商の講師として赴任したが、その年の十二月一日から一年志願兵として一年四ケ月の間兵役に服した。

小林多喜二君は大正十三年の卒業であるから、私が小樽に来たとき彼は高商二年生であり、僅かに八ケ月あの丘の上で同じ生活をしたに過ぎない。当時初めて教壇に立つ若い連中には原書講読をさせるのが学校の仕来りであった。私は Esher の The Foreign Exchange explained を第二学年で講読した。一応皆に一節位ずつ割当てゝ直訳をさせてから、その意義について講義をするのが常であった。全然予習をしてこない者も毎日一人や二人はいた。しかし、小林君は順番が狂って他人のところが当っても必ず適切な訳をした。したがって、彼にとっては多分興味薄い科目であったろうが、良い点数をとっていた。こんな訳で、一学生としての小林君の印象は温厚で真面目な勉強家というに過ぎない。

しかし拓銀時代の小林君。（特に昭和四年―五年）については、世のなかの人のあまり知らない事柄を通して彼のおもかげを数々聞き知っている。というのは彼が拓銀支店在任中、彼と机をならべて仕事をし「不在地主」の原稿整理を一切手伝ってやった織田ムメ子さん（七十一才）とは私は今日までつき合ってきているからである。彼女を通して私の知っている小林君の市井の人のおもかげの一二をこゝに紹介しよう。

織田ムメ子さん（71才）と共に（S. 40. 2撮影）

小林君は誠に天分に恵まれた青年であって文学的素質のみならず、絵にも、音楽にも、同じ程度の素質があった。そしてそれは彼自身も意識しており、一時はこの三つの方向の何れに進むべきかに迷ったのであったが、結局は文学を選んだのであった。その理由として織田女に語ったところは、「文学は一番金がかゝらないから」だった相である。人間の運命は小さな岐路で大きく左右されるものである。もし彼が絵や音楽に志を立てていたなら全く違った小林多喜二が生れていたであろう。

彼の「不在地主」は中央公論社の要請で銀行に勤務しながら約二ケ月で書き上げたのであるが、その原稿の整理は織田女が一切引受けて自宅に持ち帰って行った。それが出来上った時、中央公論社から原稿料五百円也が送られて来た。それを彼は全額母の名儀にして定期須金にしたのであった。そして織田女には㊉から態々錦紗の反物を買って御礼に贈ったのであった。彼女はいまも羽織にして大切に保存している。

あの世事には疎く学問一徹に見えた手塚寿郎教授が、高商卒業に際し自分が三年間世話になった二寮の賄のおばさんに御礼に反物を買って贈ったこと、一脈相通ずるものがあるのも興味あることである。

小林君はまた「人は本を作るが、本は出た人を作るものだ」としよっちゅう彼女に口癖のようにいい聞かせ次ぎから次ぎと本を貸してくれたのであるが、彼女にとっては、いずれも難解なもの許りなので、意味のわからない当時の新語やかたかな文字をノートに書き抜いて、多喜二君に説明を乞うことにしていた。その度に彼は自からペンをとってそのノートに言葉の意味をやさしく説いて書き入れてくれたのであった。こうしたノートも数冊に及んだ。いまだに彼女は大切に保存している。

以上私は織田女を通して知っている小林君の人柄の一端を述べたにすぎないが、偉大な文学者は、また良識ある市井の人でもあったのである。

田口滝子への手紙

一九二五年三月二十日　小樽

「闇があるから光がある」

そして闇から出てきた人こそ、一番ほんとうに光の有難さがわかるんだ。世のなかは幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というのが片方にあるから、幸福ってものがある。そこを忘れないでくれ。だから、俺たちが本当にいい生活をしようと思うなら、うんと苦しいことを味ってみなければならない。

滝ちゃん達はイヤな生活をしている。しかし、それでも決して将来の明るい生活を目当にすることを忘れないようにねえ。そして苦しいことも、そのためだと我慢してくれ。

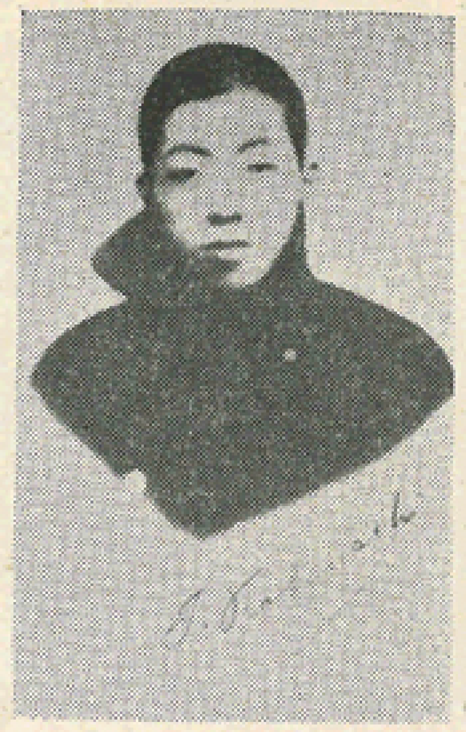
ぼくは学校を出てから、まだ二年しかならない。だから金も別にない。滝ちゃんを一日も早く出してやりたいと思っても、ただそれは思うだけのことでしかないんだ。これはこの前の晩お話しした通りだ。しかし、ぼくは本当に強い愛をもっている、安心してくれ。頼りないことだけれども、何時かこの愛で完全に滝ちゃんを救ってみせる。滝ちゃんも悲しいこと苦しいことがあったら、その度にぼくのこの愛のことを思って我慢し苦しみ悲しみに打ち勝ってくれ。

（中略）

滝ちゃんの借金は幾らあるんだ。ぼくとしては、もちろん出来るだけのことはしたいが、残念にも金がないんだ、それでも何かその返金に努

多喜二と私

蒔田栄一



多喜二のことは、もういろいろな雑誌で書いたし、小林多喜二評伝を書かれた手塚英孝氏に、資料を提供しつくしていることだが、お求めによって少しばかり書いてみることにする。

高商の下にある庁立商業で、三年間私は多喜二の同級生であり、親友であった。スキーや剣道で全国的に有名な学校にいて全然スポーツをやらなかったのが多喜二と私とであった。

多喜二は絶えず何か書いていた。私も絶えず歌を作っていた。私の同期生は大正十年庁商を卒業したのだが、その年に高商に入学したのはただの三人、多喜二と足立登と金井健四郎とだったと思う。三人共に故人となっているが、そのうち糞勉強をしないで合格したのは、多喜二だけだ。同級生のうち約十数名は一年遅れて高商に入学している。だから私が東京外語の英語部を卒業して高商に赴任した時、同級生十数名が高商三年に在学していたわけである。

多喜二は卒業して北海道拓殖銀行の小樽支店に勤務していた。色内町の同銀行支店にはチョクチョク訪ねて行った。ある時、多喜二に呼ばれて妙見山の神社の境内で逢ったことがある。五百円貸してくれないかという相談であった。それが田口滝子という女性を魔窟から救出する金であったらしいが、高商の教師の最末席にあった私には、そんな大金が調達できる当もなかったので断った。後に多喜二は何とかして滝子さんを救出し、東京の美容師養成の学校に入学させたことは衆知の事実であるが、田口滝子に宛てた手紙はラブレターの模範である。是非一度お読みになって下さい。全集の書翰集に収められています。

田口滝子さんには、多喜二の死後一度だけお目にかかるチャンスを得た。神田神保町のあるおでん屋の二階で多喜二追悼会を私が催した時、参列してくれたのであった。その時多喜二の手札型の写真（マントをきた庁商三年のときの姿）に彼のサインの入ったものを祭ったが、滝子さんはどうしても、この写真が欲しいと言う。私としても多喜二のサイン入りの写真はこれ一枚なので手離し難いものではあったが、多喜二が生前愛した女性が終生保存するというので、到々手離して了った。彼女は東北地方で幸福に暮らしていると風の便りにきいたが、その後どうなったことやら。

多喜二は私に約百通位手紙や葉書を書いている。それを少年の時以来一通も失わずに、保存していたものだ。ところが終戦の年四月東京の空襲が盛んだった頃、同盟通信社の記者をしていた私は、敗戦を人に言いふらした廉で憲兵ににらまれたらしい。丁度私が九州の佐賀県に出張して帰ると、同盟通信の同僚から憲兵がお前の住所を尋ねに来たから注意しろといわれて、帰宅後早速多喜二の手紙を一括風呂のかまどで焼いてしまった。思へば私も短慮であった。どうしてあの時、隣家にしばらく頼けることを考えつかなったのだろう。そうすれば現在多喜二の書翰集は実に多彩なものになっていただろうし、私もそれによって文壇に貢献出来たのに。憲兵隊は憎らしいといまでも恨んでいる。

昭和四十年には多喜二の文学碑が小樽に建つ予定ときく。商大浜林正夫教授の御尽力によって。多喜二が愛した小樽の町に多喜二の碑の建つことは私にとって、この上ない喜びである。皆様方の応分の御寄附を私からもお願い申上げて、この稿を終る。

（元助教授　高田外国語学校々長）

力したい、知らしてくれ。

最後に決して悲観したり、失望したりするな、ぼくたち二人の間の愛を信じていよう、いくら力弱く、はかないように見えるとしてもだ。無茶に酒を飲んで身体をこはさないよう、もし苦しくなって、酒でもグングン飲みたくなったら、ぼくのことを想って、少し我慢すること、いいかい約束するよ。ではさようなら、返事を待っている。

私の最も愛している滝ちゃんへ

◇……◇……◇

一九二九年十月十八日　小樽市外

滝ちゃん、ぼくがいま、どんな気持でこの手紙を書いているか、それを、とても手紙ではいへないことをどんなにか残念に思っているか分らないのだ。

たしかに受取りました。御手紙も小包も！

（中略）

いま滝ちゃんから贈られた万年筆で、滝ちゃんから贈られたドロップをなめながら、小説の一段落をつけてこの手紙を書いている。まるで、ぼくの小説が滝ちゃんのもので全部出来上ることを感じ、何んともいはれない気持でいる。

滝ちゃんが、ぼくのことばかり思っていてくれるとあったから、ぼくはこの頃ちっとも淋しくない。

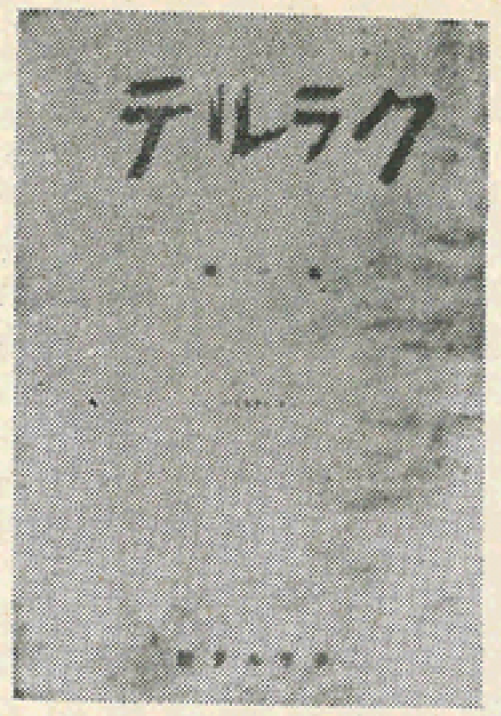
（中略）

ではまた書きます。身体を気をつけてなるべく、本を読むように、ではたった一人のいとしい滝ちゃんへ

（小林多喜二書簡集から）

多喜二さんの執念

中野清一



一

大正十二年に私は小樽高商に入学した。商業学校出身だからD組に編入された。入って一月もせぬ頃、多分四月の終りだったろう。小柄な人だが、先輩学生だなと直ぐ受とれた人が私たちの部屋に入ってきて、「高商に入ったからといって、簿記やソロバンばかり勉強するのが能じゃない。たまには文学や劇の勉強もした方がいい。」とよびかけてくれた。

高商に入る前に一年ブラブラして過し、読むものと言えば北原白秋や石川啄木、ストリンドベルクの飜訳ものなどが主であった。私には此上なく嬉しい言葉であった。廊下まで追いかけて行き、ドラマの本を読みたいという希望を申出た。先輩は近代劇研究会というのがあること、毎週一回か二回、いまはストリンドベルクの飜訳ものを読合わしていること、その場所はどこどこで時間は、という風に親切に教えてくれた。この先輩が当時三年の小林多喜二さんだったのである。

二

ストリンドベルク（小林さんはこう発音するのが正しいと教えてくれた）の読書会に、七・八回は出席した。場所は、第二寮の、福田勇一郎さん（現在、朝日新聞代表取締役）の部屋だったと覚えているが、この記憶は間違っているかも知れぬ。小林さんと同期の桜井長徳さんも常連の一人だったように思う。多喜二さんが中心になって、七・八人でストリンドベルクの「債鬼」を読み合った。

この読書会で多喜二さんに教えられた幾つかのうち、いまもなお忘れられないことが二つ三つある。イプセンの「人形の家」は甘い、ストリンドベルクの作品は芸術品（こういう言葉を小林さんは使われた）かどうか分からんが、グングン人を引張っていく、と言われたし、どんな種類の本でも本ものかどうかは、見せかけで決まりはしない、流行できまるのでもない、お金をどっさり稼ぐために書きなぐる奴がゴロゴロしている、読んで、いや読みながら、思わず立止って考えこませる本が一番いい本なんだ、とも誓められた。

三

私たち十三回生は、関東大震災（九月一日）のあった年の春に入学、そして、いわゆる「軍事教練反対事件」（十月十五日）が起った年の翌年、大正十五年に卒業した。文字通り天変地異の三年間を過したわけだが、その頃の母校には、社会科学研究会もあれば、哲学研究会もあった。前者はマルクス勉強会だったし後者はカント研究が中心であった。現代風に言えば、左よりも右よりも共にあったわけだが、不思議にも、お互いにいがみ合うようなことはなかったように思う。母校のその頃の雰囲気は、それこそ伊藤整さんの言われる通り「当時の自由主義的な雰囲気のなかで、一種の溌剌とした校風を作っていた。（中略）何か盛りあがるような気分が教員と生徒の間にあった」（「小林多喜二の思い出」）そういった校風が、マルクス派とカント派とを和やかに並存どころか、いとも仲良く競争させる背景になっていた。

だから大正十四年の五月の何日かに、それまで社会科学研究会のリーダーの一人だった斉藤磯吉君、私たちと同期だったが先きに書いた軍教事件の学内首謀者と見られて退学処分になった人だが、その斉藤君が、当時弁論部の委員をしていた西野嘉一郎君、西川正巳君や私を訪れ、「近く小樽で政治研究会支部を発足させる。そのために大山郁夫先生を迎える。序でに高商でも弁論部主催の恰好で講演会を開いて欲しい」と要望した時、三委員とも喜んで引受けた。弁論部長であられた苫米地先生も快よく承認して下さった。

その時の大山郁夫さんの講演の詳しい内容は忘れて終ったが、四十年の月日が流れたいまでも忘れられぬ一節があり、それがまた多喜二さんの思い出につながって行く。「関東大震災が起った瞬間、私の隣りの家に住んでいたお婆さんが、助けて下さいといってシガミついたのは、この私だった。そのお婆さん、普段は人一倍熱心な神信心の人だったのだが……」云々という一節で、言うまでもなく、マルキシズムの立場から宗教無用論を説き、社会科学の必要を説得しようとする含みの一節だったのである。講演が終った後で、クリスチャンであり、その頃熱心にモーリスの原書を読みふけっていた西野嘉一郎君は、大山さんにも社会科学への信仰があるよね、と淡々と感想を私に告げた記憶がいまもアリアリと浮ぶ。当時「寛容」という言葉はあっても流行語ではなかった。それでいてお互いの間には、それこそ地についた寛容があったのである。

大山さんの講演のあった次の日の夜、左文字という本屋に行った時、私はバッタリ、多喜二さんに出会った。一緒に公図通りの方に向って歩いて行った。当時の小林さんは、拓

銀小樽支店の確か為替係をしていたと記憶しているが、「銀行勤めはどうですか」という私のつもりでは世間話程度の質問に、一生懸命な面持ちで次のように答えられた、「銀行勤めは辛いよ、しかし仕事は僕なりに打込んでやっている。だから時間が余る日が多い。そうかといって勤務時間中に余計な本をよむことはいけないことだし、適当な紙きれに、ゆうべ読んだ本のメモめいたもの書いたり、近く、君も知っているクラルテという雑誌にのせるつもりの、小説の筋書らしいものを書いては時間をやり過しているよ。それはそうときのうは大山郁夫さんを地獄坂の上まで引張りあげて、宗教阿片論をきいたそうだな。良い事だよ。一つの本、一つの考方にこだわっては駄目だ。どんなものでもガツガツ食った方がいい。あれもこれもと、欲張りと言われようが、手当り次第に聞いたり読んだりすることだ。本当の整理や自分の確立は、その後に自然に出てくるものだ」という意味のことを言われたのである。本当に良いことを教えてくれたと私はいまでも感謝している。

　なお、上記の小林さんの言葉のなかに出てくる、クラルテに発表する予定の小説というのが、純情で、しかも良い意味で執念深い愛情をその人のうえに傾けた田口滝子さんにゆかりの深い「田口の『姉との記憶』」という一篇だったのである。このことは「北方文芸」の昭和二年になっての何集目であったかを、後輩の野口七之輔君から貰った時、同君の説明で始めてわかった。昭和三年卒業の野口君は「北方文芸」の発起人の中心になった人で、高商入学前は私同様に北海商業に在学していたという二重の先輩・後輩関係もあり、小林さんをめぐる色々なエピソードを聞かしてくれた。そのなかでも、多喜二さんという人は、同じ作品を何度も何度も念入りに時間をかけて書直す人で、「その執念は一寸、類がない」と知らしてくれた点が特別に印象深い。

　なお、上記の創作が「クラルテ」に発表する予定だったらしいのが、「北方文芸」にどうして変更になったのか、別に深いいきさつはないのだろうが、その辺の事情は私には判然としない。野口君や、クラルテ同人であった片岡亮一さん（大正十四年卒）にでも聞き合せばわかるかも知れぬ。

四

　多喜二さんにはいま一度、そしてこれがいま思えば最後の対面になって終ったのだが、やはり偶然にお会いしたことがある。昭和二年の七月の始め頃だったと記憶している。札幌からの帰りの汽車のなか、それも三等車のデッキでのことだった。汽車がひどく混んでいたのを覚えているが、多喜二さんは銭函か張碓の駅から乗込んでこられたと思う。

　当時九州大学の学生であった私の学生服の、大の字の浮んでいる金ボタンをまじまじ見つめておられた多喜二さん——あの独得のなで肩で、しかも黒っぽい薄地の背広姿の小林さんは「君はいま、大学だね。どこ？。そして何を勉強しているの」と人なつかしそうに、聞く。大学は福岡、高田保馬先生について社会学の勉強しています。と答えると、「高田保馬？。ああそうか。福本和夫の本で読んだよ、ハハハハ。社会学の勉強でストリンドベルクを忘れるなよ。もっとも、そういう僕もストリンドベルクはそろそろ卒業しかけているがね」と言われた。築港駅に来た時、降りられるんじゃないですか、と聞いたら、いや銀行へ行こうと思ってね、と答える。小樽駅からつれだって、あの停車場を下り、拓銀支店の裏口のある小路に一緒にまがり、そして、ではまたね、と言われて別れた思い出がいまも懐しい。

　歩く道々、多喜二さんに聞いた話は、多喜二さんの卒業論文のことが中心になっていた。第二外語はフランス語だった小林さんは、ワルラスかゴッセン、特に何ということなくゴッセンにひかれていたし、ゴッセンをテーマにしようと始めは考えたという。「よくは分らないが、心理主義的な欲望説の立場から、ゴッセンが労働価値説をどんな工合に批判するのか、それを調べたかったのだな。ほら、限界効用均等の法則とかいうのがあるだろう。ゴッセン御自慢の学説らしいな。ぼくは別に経済学説史上の偉業をつくろうなどと大それた気持は無かったが、本当の均等法則はもう少し別のところにあるんじゃないかと考えたりしてね。だけんど何度読んでもサッパリ何のことか分らない。客観学説だの主観学説だのと、学者の生甲斐はまるで別世界のものなのだな。けれども読まなくちゃあ、と思い直して何度も読もうとガムシャラに食い下ったが、結局駄目さ。ゴッセンの廻りの連中を読みあさって、とやっているうちに、大熊（信行）先生に習った記憶もあって、今度はアントン・メンガーにひかれ始めてね。それも生存権説を主張した、というのに魅力を感じたという程度のしろものだがね。んだけど、ドイツ語じゃ歯がたたないと思ってやめっちゃった。

　英語で行こうと考え直し、カアペンターの思想何かで聞きかぢっていたので、カアペンターにきめたものの、原書がどこにも無かった。だれかの講義でカアペンターのこと聞いたから、その人を思い出して、その人のところへも尋ねて行ったよ。アッサリしたものだな、カアペンターの本は一冊も原書も翻訳も無いといわれた。教室の講義ではカアペンターを何度も読んだかのように講義していたんだがな。アレと思ったよ。孫引きで月給もらえるんだよね。もうイヤになったから、ストリンドベルクを書こうと考え直した。根岸先生に相談したら、文学ではね、と首をかしげられた。文学ものと学問ものと、一緒に組合せてもいいでしょうか、と念のために聞いたら、マアいいだろうと言われた。それから校友会誌の編集顧問だった糸魚川先生に相談したよ。糸魚川先生なら、銀行論の先生でも童話を書いていたし、童話の関係で恋愛をし、いまの奥さんと結婚したという噂さを聞いていたからね。それで、スウトロの「見捨てられた人々」というドラマ、短かいものだが、ウエストエンドの貧乏人ドラマだったな、それと、君がよく知っている斎藤君から借りたクロポトキンの「パンの略取」の原書を借りてね、両方共翻訳して出すことに決めたんだ。糸さんも、あのおおらかな響きの声で、それでいいよ、と言ってくれたしね。……適当に序文を書けよと言われて、それを書いて出した。その序文が本当の卒業論文だったわけだな」

　多喜二さんのこの話を聞いた翌日私は久振りに地獄坂を登り、図書館の木田橋さんに頼み書庫に入れてもらい、そして小林さんの卒業論文を探し出して読み耽った。序文の一部分は、そのまま書き写したが、そのメモはいまも私の手許にあり、三十七年前のことがアリアリと浮んでくる。

　書き写したのは、「他の人がだまってコツ、コツと小説を書いている時、トルストイは「その小説」——即ち「芸術とは何ぞや」という事を考えた。考えて考えて、とうとうその後に産れ出た作品は非芸術もおびただしいものばかりであった。これは知られた事実である。しかし、このトルストイの、この一義的な態度にこそ、その非芸術であることを補ってもまだ足りない偉大な、人間としてのトルストイの存在していることを知る。」「植物学者としてのクロポトキンが、無政府主義者になったことによって駄目になったと考えることは、或は正しいであろう。しかし、そのためにクロポトキンはより偉大な、人間として自分たちの間にあることは忘れることの出来ない事実である。」

　このメモを私は、私のようなものでも、メモ類のなかでも一番に大事にしている。

五

　多喜二さんとの最後の対面の後一月ほど、まだ夏休みの頃、思いがけなく寺田行雄君（同期）が訪ねてきた。タイムス新聞記者としての苦労話を聞いた。雑談のなかで、小林さんがマルクス勉強を始めた頃、よく僕のところへやって来た、と言い、小林さんが僕に親しくしてくれるようになったのは、僕たちが卒業の年の五月、小樽で始めてメーデーが開かれ、僕が散会の直前の合唱を指揮したのを小林さんがまじまじと見てくれた、そのことがきつかけになった、とも言った。死の直前まで文学を愛し、地下にもぐっても作品を書き綴った多喜二さんだったが、マルクス勉強の、最初の、そして一番に頼りにしたその方での相談相手は、あの矢張り物静かな、マルクス主義を身につけながらスローガンだけをふりまわすという行き方を極力避けていた寺田君だったのである。

六

　その寺田君も、また前に書いた野口君も、話が多喜二さんのことになると、立派な執念、という形容をよく使った。昭和二年の五月三十日の小樽新聞に、「十三の南京玉」という随筆風の評論——珍らしいスタイルの一文を小林さんは寄稿した。そのなかには、あれから四十年近いいまでも珠玉のように光りを放ち続けている文章が幾つも含まれていた。「ある発展段階のうちの一つの段階の姿を持ってきて、それを固定的、普遍的真理の形にしてしまう。」という文章があった。そういうあり方は好ましくない、という姿勢をとる多喜二さんは、この鋭利な武器で、一方では、「利己心は人間固有のものだ」と断定する独断論を切ると同時に、他方では、「プロレタリア文学は宣伝手段でなければならない」と割切って終う連中にも刃をつきつけている。現代の、泥沼に似た修正主義論争を読む度毎に、私は三十八年前の多喜二さんのこの文章を思い出す。

　「十三の南京玉」には、あれほど長年、ドラマものでは一番に愛好し続けてきたストリンドベルクへの訣別？の文章も含まれている。「実にたわいもない反動的なものであることが分りかけて来た。」と書いた上で「——自分はストリンドベルクが使った言葉をそのまゝに『では他の峰に移って行く』時であると思う」と結んだ。

　この随筆風評論は、小林さんの大きな転回のシンボルとして小林多喜二論を書く程の人は必ず触れる名高い一文だが、私は私で、一番最後に近く書かれている「唯物弁証法を聞きかじったからって、単純に芸術のことは分ってないものだ。足が地に浮いている夢殿的芸術については論外だが……」という一節は、多喜二さんの、秋田県貧農の家に生れた人の、若竹町や新富町のスラム街に住みつつ庁立商業や小樽高商で磨きをかけた人の、何ともいえぬ風格の謎をとく鍵を秘めているように思えてならない。

　志賀直哉に久しく私淑しもした、トルストイを読みイプセンを読みもした、しかしその後それらの知名作家に訣別しても幾度かまた読み直したし、共産党員になってからも志賀直哉を山科にわざわざ訪れては手厚くお礼の言葉を述べている。東京の刑務所に拘置されてからも、現在は広島在住の田辺耕一郎さんあての手紙（一九三〇・一〇・二）にあるように、バルザック・ディケンズ・ビヨルンソンなどを読んでいた。こういう姿勢の多喜二さんは、単に物好きとか、濫読とかの言葉で無雑作に片づけられぬ何ものかを身につけていた。野口君や寺田君が何度か使った表現そのままに、多喜二さんらしい執念が「執念一路」ともいうべき内容で一筋に貫かれていたのではなかったろうか。ストリンドベルクに訣別を宣言してからも、何度かこの作家の作品を読み直し、ストリンド氏はやはり中々良い、と書いてもいる。これは皮相に「未練」ときめつけるべきたちのものと違う。

七

　「論語読みの論語知らず」という言葉を卜部先生から聞いた思い出が私にある。マルクス主義者が案外マ

ルクスを読んでおらず、アダム・スミスをあれこれ言う人が本当はスミスを読んでいない、と皮肉ったのは確か大熊信行先生であった。その大熊先生に小林さんが親しく接触を続けた有様は伊藤整さんの「思い出」記のなかにもアリアリとえがかれていた。大熊先生の影響もあったであろうが、その上に持前の風格も加わって、多喜二さんは、党員になってからも、マルクスやレーニンを「特定の歴史的条件」と結びつけて読むことを忘れない人だった。だからこそ、先きに書抜いておいた、田辺さんあての手紙のなかでも、弁証法でよく云々するアウフヘーベン――揚棄という言葉についても、その真意をつかもう、つかもうと、それこそ執念深く食い下った努力の跡を伝えている。「実際にはただ単に否定という意味位にしか使っていないこと」を反省しようと努力もし呼びかけもした。

この執念こそ、昭和八年二月二十日、特高につかまえられ、空前の拷問にかけられたのに、悲しい死を以てしてではあったが、結局耐え抜いた多喜二さんのいのちを支えた一番の底力だったのではないだろうか。そしてこの執念、文芸評論家平野謙さんが小林文学の面目に迫ろうとして設定した二つの概念、「実践者」・・・と「表現者」この二つもろともの根抵に、第一義的にうづくまっていた執念、これこそは、小樽高商生活で芽生えたものでは勿論無いにしても緑丘で、或いは緑丘にゆかりの深い人々との親交のなかで鍛えあげられ精錬されたもののように思えてならない。最近の緑丘の苦い人たちが、もしマルクスを読み、ドラッカーを語るなら、その傍ら、小林さんのものにも眼を通して、そこから、あの素直で弾力に富み、なお且つ弾力な執念をこそ学びとってほしいと願わずにおれない。（六四・一二・一）

（大一五　広島大学名誉教授）

小林多喜二と私

桜井長徳

友達や知人がえらくなったり、有名になったりすると急にあちこちに「無二の親友」や「面倒をみた」人々がゾク出するようです。私もいままでいろいろの方面から何回も〃小林多喜二について〃執筆や談話を求められました。そして、その都度多少「親友ぶった」発言をして来たことを若干面映ゆく思っています。

小林君と特に親しかったわけではありませんが、学校で同級生であったこと、いっしょに校友会雑誌を作ったこと、学校以前から投書家仲間であったこと、卒業後もしばらく小樽にいて、つき合ったこと（彼は拓銀小樽支店、私は北海タイムス小樽支社）などの点からすれば〃多喜二を語る〃資格は多少ある、とも思っています。

ただ私が申しあげたいことは、前述程度の〃知り合い〃は「プロ作家小林多喜二」あるいは「多喜二の思想と文学」といった本格的な多喜二論とは、およそ縁遠いもので〃資料や文献〃としては全く無価値のものであるということです。

私に語る資格あり、とすれば、それは彼が得意とした「マンダン」についてぐらいのもので、いわゆる〃多喜二談義〃の域を一歩も出ません。私は彼が作家活動をはじめた拓銀時代の初期は、いくらか知っていますが賢明な彼は私のようなおよそノーイデオロギーの縁なき衆生に、思想的アピールを試みるような無駄な愚は一切しませんでした。ただわづかに当時来道、公演をしはじめた築地小劇場のポスター張りや、前売券うりをいっしょにしたぐらいのものです。

なおご承知のように小林君の文学碑が明年小樽に建てられることになり、札幌でも募金活動をはじめ、私も奉加帳を持って廻っていますが、成績かんばしからず、最近では加茂学長、浜林先生までが見かねてご来札、彼の為に低頭されている始末で、クラスメートの私たちとしては、いよいよ無資格を恥じている次第です。一九六四・一二・八日（大一三）

小林多喜二君のこと

佐藤信雄（大一一）

私が三年の時、小林君は二年であった。個人的につき合ったことも話し合ったこともない。しかし、小林君が小説を書いていることはよく知っていた。校友会誌に出た同君の短篇を興深く読んだ記憶がある。また私の親友の一人であった宇野長作君（故人）が、小林君が多分主になってこしらえた「クラルテ」という同人雑誌に関係していたらしく、宇野君の詩や小林君の短篇を、その「クラルテ」という薄っぺらな雑誌で読んだ記憶もある。

小林君は私よりはいくらか大きいかも知れないが小柄な人で、特に文学青年らしい風ぼうでもなく、地味な格好で廊下などを歩いていた。小林君が後年あのように有名な作家になり、あゝした最後を遂げることになることを、当時の誰が予想しえたであろうか。

私が「蟹工船」をよんだのは「戦旗」という雑誌であったと思うが、その時は強烈な感銘をうけた。それから小林君の物は手に入るだけ読むようにしたが「一九二八・三・一五」は当時は手に入れることができず、戦後になって始めて読んだ。

小林君が生きていたら、今年あたり還暦というところであろう。かえらぬ繰り言とは知っているが、残念なことと思う。（六四・一二・五夜）

小林君

服部兵吾（大十三）

小林君とは、学校の廊下などでまともに出会うと、いつも雑誌かノートを小脇に抱え、ヤーといった挨拶で柔和な顔が消えてゆく、どこか真摯な人柄を思わせた。こんな印象が文芸委員をしていた彼の作品に、私の目を向けさせたのであったろうが、そこには相当渉臘のあとがあり、中々の外国文学通だなあと思ったことだった。私は碁を打っていて不勉強だったから、文学のことは一向わからなかったが、彼の文才と勉強家には窃にあやかりたい念願をもっていた。

ある夏の日に、小型のリヤカーを挽いているのに出くわしたが、この時も互にヤーといった挨拶で通り去って行った。家業にも忠実な孝行息子だあなと感じ入ったことだった。

学生時代の小林君とは、こんな程度の関心に過ぎなかったから、趣味も勉強も思想的背景にも、共通点を見出せないので、その態度には窃に敬意を表しながらも、特別の親交はなかったのである。こんな間の彼と年を経て痛飲快談をする機会にめぐり合ったのである。

富岡町から花園公園への上り口、橋を渡ると妙見川沿いに、花月とかいう小料理屋があった。私は市役所の前の方に下宿していたから、勤めの学校が早く退けると、帰りにここでちょっと一杯気晴しをやる。当時小林君は、拓銀の調査課の要位にいたろうと思うのだが、彼も勤めの帰り途、両手をオーバーのポケットにつっこんだ格好で、この料亭に入って来た。こんなところで対面しようとは、全く不思議な機縁である。それは確か、高商を出てから四年目の冬の寒い夜のことだった。二人は共に社会人になっていたから多少の経験もつみ、環境こそ異なるが、それぞれ話題のもち合せもあった。そこは同窓級友のよしみ、飲んで愉快に過ごそうという意気投合となり、談論風発とは、凡そ似もつかぬ静かな会話であっても、互に一夜を楽しくしてくれた。話は幼稚な人生論であったろうか。時も刻み、終に互の未来を祝福し、からだを大事にしようと肩を叩いて別れたが、その情景はいまなお脳裡に去来するのである。

それ以来の小林君とは、互の文通はおろか、再び会う機会は来なかった。人の世の会うも別れも、こんなものであろうかと、心残りして悔むことのみ多いのである。その後幾月も経ず、彼は勤めを辞して上京した様子であった。

これからが彼の真実の人生が展開し、文学に開花し実際活動が始まるのだが、いままでの一小林君は、その名も小林多喜二として、吾が国左翼文壇に旋風を捲き起し、思想作家として著名になっていったのである。

恋愛至上や耽美派に飽きたらず、心ひそかに磨いた開眼が東倶知安行をものし、不在地主や、あの蟹工船と矢つぎ早に世に問うに及んで、世人の目を惹き、警戒的な視線をあつめるところともなっていった。

多喜二（左）と石黒政信君

私は今次終戦直後のことであるが羊蹄山麓に真狩別（この村には私の疎開する予定の農家があった）を訪ね、地主不在の見渡す限りの馬鈴薯畠や、広漠たる玉蜀黍の畑作を望見して、親しく倶知安界隈の風物に接しては、彼を忍び冥福を祈ったのである。（中部証券金融株式会社）

小林多喜二特集　読後感について

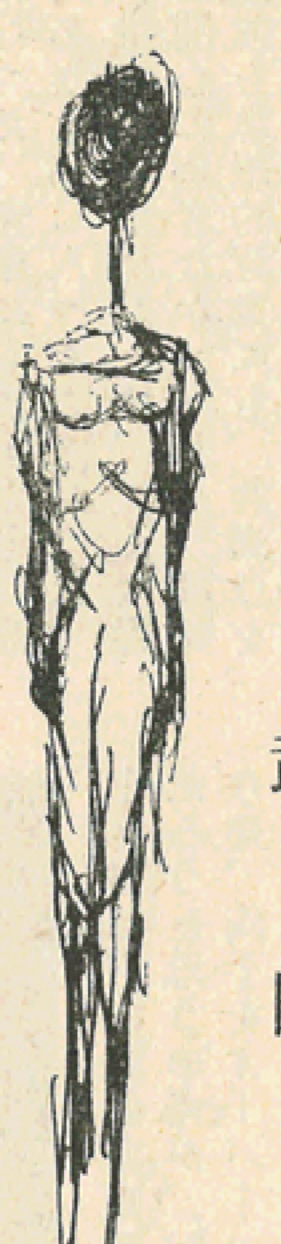
初めて六十数頁の特大号を御送りします。新春号に続いて休む間もなく多喜二特集を編集して参りました。

然し果して御期待に添い得たか疑問であります。今後の「緑丘」編集上の参考ともいたしたく、御指導の意味で読後感をお洩らし下さい。

表紙について、内容について組みの形式について、その他。

大きな子供

武田暹



小林との交遊は、彼が高商を出て拓銀に入ってからの十年ほどであるが、その間、小林は思想的にも文学的にもぐんぐんとじつにすばらしい成長と発展とがあって、私との距離はみるみるうちに遠くなってしまったけれど、といって友人としての交遊にちっともひびがはいらなかったのは不思議である。

小林のもって生れた人間的な妙な魅力が私なぞを離さなかったからであろう。この小林の人間的な魅力については、私はいままでもかなり書いてきたが、これからもその人間像を書くのが友人としての私の仕事だと思っている。小林は風呂なぞは時間が惜しいといって三月くらい入らなくても平気だったが、油気が人より少ないせいか、その割合いに皮膚がよごれていない。しかし、たまに銭湯にいくと、風呂代を倍額おいて二人分ゆっくり入るよと番台にことわって、事実、まことにのんびりと時間をかけて洗いだすので、一緒に入っている私はあまりに長いので手持無沙汰になってしまう。小林という男は何んでもとことんまで追求する。頭とからだで納得するまでは止めない。風呂にしても入らなければ三月も入らないで平気だが、入ったとなると風呂に入る目的を十分に完全に果たすのである。小林を裸にすると面白い。丈は五尺そこそこで、肌はなめらかに白く、手足もきやしやで、大人らしい骨格を持っていない。顔、頭は大人だが、からだつきはまるで十二、三の子供だ。最初に銭湯にいった時なぞは、私は大きい方なので、こんな少年を友人にしている自分が阿呆らしく、くすぐったくてしようがなかった。

とことんまで追求して止まない小林のこの性分は天下一品である。彼は銀行を退けるとまっすぐに家に帰る日は一年を通して数えるほどしかない。したがって夕食は町でたべる。たべものの話だが、たとえば、どこそこのトンカツがうまいとなると、その店ばかりに続けて何回でも通うのである。毎日、そのトンカツのお相伴にされるこちらがまいってしまう。さてその店を卒業（彼はよくこの卒業という言葉を使う）すると、別のトンカツ屋へまえと同じように通うのだ。そしてこの二つの店のトンカツを比較研究して、そのうまさ、まずさをきめるわけである。味覚もここまでくると味気ないが、小林はこれで十分にたんのうしている。

たべものの話をもう一つ。東京から三、四人ほどのいわゆる文化人が小樽にやってきて、われわれと会合をもった時、たまたま、たべものの話がでて、ひとりひとり好きなしやれた外国などのたべものを披露におよんだ。小林は、とつぜん、おれは白いたきたてのご飯に塩鮭をこまかくふりかけた、あいつが最高にうまいといったので、みんなはクスクス笑った。傍にいた私の顔も赤くなった。小林はなぜみんなが苦笑したのか、それが通じない男なのである。

小林の友人の細君が、小林さんてまるで大きな子供ね、といった。女人の眼のするどさである。まったく小林のわれわれを離さなかった人間的な魅力というものは、せんじつめれば小林はいつまでも大人になりきれない童心であったからであろう。小林の仕事は大きい。しかし、その仕事というのは大人が大人ぶってできるような仕事はなかった。

「回想の小林外喜二」武田暹
蔵原惟人・中野重治編「小林多喜二研究」解放社（昭和二十三年発行）
「小林多喜二の恋」中津川俊六（同氏ペンネーム）
婦人公論（昭和二十四年一月・二月号連載）

交遊抄

小樽高商の多喜二

森武臣

大正十年四月、私は小樽高商へ入学のため北海道へ渡った。十九歳の春のことだ。校舎は小樽の裏山にかかる中腹、緑ケ丘に建てられ目の下に港がながめられた。

簿記や商算が苦手だったし、そのころから台頭しかけた軍教に反感をいだいていた私は、教室をぬけ出しては校庭の片すみに臥（ふ）して、大学入学の準備の本を読んだり、小説などを読みふけったものだ。

いつかしら、もう一人の青年が校庭の私のいる所と反対側でごろごろしているのを意識するようになった。しかし私も彼も別にことばをかわすこともなく一年ぐらい経過した。どちらからともなく近寄って、名のり合って彼が小林多喜二であることを知った。私どもが二年生になった新学期、所は校庭の片すみでクローバの葉は青黒く茂って、その花の香が甘くにおった記憶はいまだに新しい。

彼は道産子（ドサンコ）で、小学校の教師をしていた姉の仕送りで通学していた。小柄で額のにきびをいつも気に病んでいた。人なっこい性格でかつ潔癖、不正はトコトンまでにくむ男であった。あまり勉強はせずに成績は上の部にあったようである。

私の宿をたずねて来て、渋茶をすすりながら、人間性、社会、人の幸福などについて語り明かしたことが何回かあった。また大学ノートに克明に書いた小説の批評を求められたこともしばしばあった。

曲がりなりにも学校は卒業して私は仙台の東北大学にゆき、彼は函館の北海道拓殖銀行に勤務することになった。卒業を数日後に控えたある晩、将来の夢を語りあって、その時できあがっていた卒業アルバムにお互いの感想を記して交換し合った。確か彼の書いたものがいなかの文庫倉のどこかに残っているはずである。

私はその後、仙台から東京に出て東京電燈に奉職するようになって文通は途絶えがちになるころ、彼が左翼作家として、あるいは共産党員として活動することを新聞で知った。ある日の夕刻、赤坂の弁慶橋のたもとで彼にバッタリ出会った。服装も顔色も全く疲れ果てている様子を見てとった私は、久方ぶりのめぐり会わせのなつかしさよりも、何か目の底から悲しみがわいて眼頭にジンと来るものを感じた。しかしたちまち昔の友人にかえって肩を並べて紀尾井町の坂を上り、上智大学前の土手で太い黒松の幹をなでながら語り合った。

町に灯がともったのに気がついて四谷の小さな店で夕食を食べて別れた。

彼が警察で悶死（もんし）したことを新聞で知ったのは別れてから幾日もたたない日のできごとであった。

（富国生命社長）

（昭三八、四、一　日本経済新聞所載）

初めて多喜二と会った日

高崎徹

大正十四年（一九二五）四月四日に、私は小樽新聞社員として迎えられ、同時にまたロシア語講師として小樽高商に奉職するため来樽した。そしてその年の十月頃のある日に、初めて小林多喜二に出会ったのである。当時私は富岡町二丁目で小樽駅のすぐ線路脇の土手の上にある家に住んでいた。たしか日曜日だった。二階の自室の囲炉裏に炭火をおこしていると、玄関に訪う人の声がするので、降りて行くと、黒の背広に黒いボヘミアン・ネクタイをした豊かな長髪の蒔田栄一君が微笑して立っている。そして、その脇には紺がすりの和服に袴姿の学生のような青年がいる。早速二階へ案内して炉辺に文字通り鼎坐した。

蒔田君は東京外語時代から承知しており、彼が《日本詩人》に詩を発表していることなども分っているので、助教授蒔田としてではなく、詩人蒔田として対した。「今日は小林多喜二君を紹介し、ぼくらのやっている〈クラルテ〉にきみも入ってもらおうと思って、二人でやって来た」と彼は言った。小林は懐中から一冊の〈クラルテ〉を取り出し、「小林多喜二です」ペコンとお辞儀して「見て下さい」と言いながら雑誌を私に手渡した。その挙動がいかにも都会人らしくない朴訥さなので、第一印象から全く好感が持て、少しのてらいもない誠実な人間だなと感じた。

この時まで私はまだ小林多喜二を知らなかった。話してゆくうちに大正十三年に小樽高商を卒業して、すぐに拓銀小樽支店に就職勤務しているとのことも初めて知った。さて、私たち三人の話題は、世間話や社会問題、政治問題などは一切なく、ただ文学に関することばかりであった。まさに三人とも単なる文学青年であったようだ。多喜二に「日本の作家では誰が好きか」ときくと「志賀直哉です、作品を送って見てもらっています」とのこと。まだプロレタリア文学へ走ってはいないが、しかし彼の話の節々には、当時の日本文壇の作家と作品とには不満を持っていることがはっきり窺えた。第一、同人雑誌に《クラルテ》と命名したことからしても、すでにバルビュスを愛好していることが知れた。

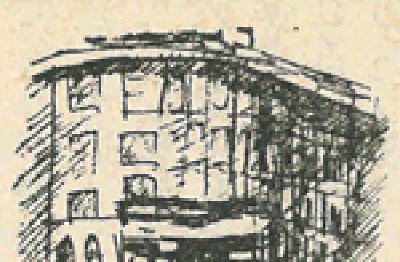
外国作家について大体私と共鳴した作家は、フランスではフイリプ、モッパーサン、ゾラ、ユーゴー、スタンダール、ロマン・ロランなど。私は専門のロシア文学以外には、その頃特にスカンジナビアのものに興味を持っていたので、クヌート・ハムスンやストリンドベリ、イプセンなどを語りだすと、やはり彼も読んでいて、「好きだなあ！」と共鳴してくれた。ロシアの作家では、やはりトルストイとゴーリキイとを彼は最も敬愛していた。話がはずんで、以上の諸作家の作品について、その思想性に関してはあまり論ぜず、むしろ主人公の性格とか、場面、雰囲気の描写とか、そういったことについていかにも文学青年的に熱っぽく語り合ったものだった。例えばゴーリキイの初期のもの、〈チエルカシ〉とか、ストリンドベリの〈赤い部屋〉とかハムスンの〈飢え〉とか等々。

要するに、その時の多喜二はロマンチックなところが多分にある理想主義者で、しかもまたエネルギッシュな熱っぽいものを持っているという印象を私はうけた。会談は約三時間ぐらいも続いた。初対面としては大変長いが、そこらのところも呑気な文学青年同志の場合は、めずらしいことではない。じっさい、この日は私にとっては愉快な有意義な日であった。その後二年経って、古川友一君らと社会問題研究会をやるようになり、その会に多喜二も参加したのであるが、もちろん、この日の二人――多喜二も私も――はそうなることなどは全然予知し得なかった。

二人を送って富岡町の通りを行くと夕陽がすでに日光院の後の山蔭に去っていて、そこの山も、市立高女の裏山も、一面に唐錦のような紅葉であることに、小樽へ来てまだ幾らも経たぬ私は、独り心のなかで「凄い紅葉だなあ！」と思ったものであった。（一九六四・一二・一六）

思い出の場面二つ

野口七之助（昭三）



「いま、これまでにない新しい小説を書こうと思ってるんだ。今晩は時間に制限はないから、それについてゆっくり話し合いたいんだ」

年譜を調べないと何年の頃かはっきりしないが、ここでは無理をせずに、記憶に浮ぶままに、いくつかの場面を漫然と描いてみたい。

北海道拓殖銀行の地下室、といっても夜の宿直室で、夜更けまでたっぷり話合える時間をもったことで、小林とぼくは満足感でいっぱいであった。御馳走を舌鼓をうって貪るように、ひっそりした地下の一室で二人は豊かな時間に舌鼓をうつことができた。

この頃は、毎晩のように会っては話し合うことがつづいていた。それも生やさしい話し合いではない。議論がもつれると、すぐ喧嘩腰になり相手を説伏するまで渡り合うので、果てしがない。始めは妙見川畔の喫茶店越路の二階で一時間か二時間ねばり金のあるときは、どこかのおでん屋で飲みながらつづけ、しまいには十二時をまわって開店しているところがなくなると、雪の街路を「俺の方で送ろう」といって小樽の南端（手宮町）まで歩く。だが話はいよいよこじれて結論に達しない。「では、こんどはこっちで送ろう」そして烈しい語調を交しながら、ぶらぶらと、こんどは街の北の端（勝納川）辺まで行く。「よし、では街の真ン中で別れよう」また引返す。そして話の方は未解決のまま、町の公園通りで別れる。

もはや明け方である。夜がすっかり明けたこともあるが、とにかく二時や三時はざらである。真夜の小樽の街上を、右に左に、歩きながら時間を消すのである。これが二、三日つづくと、いくら若い頃でもさすがに疲れる。ところが、一日でも用事にかこつけて会わぬと、「個人的な行動をとるとは怪しからん」と妙な理屈をつけて、ムキになって憤る。まったく始末がわるい男である。生やさしくない、といったのは、この意味で、その代りこっちが疲れるのと同様、向うでも疲れている筈なのであるが、あくまで頑張るのだ。根気のいいことは無類である。だからいかに銀行の宿直室の会談は、豪華な気分で舌なめずりしたことか、御想像して頂けるであろう。

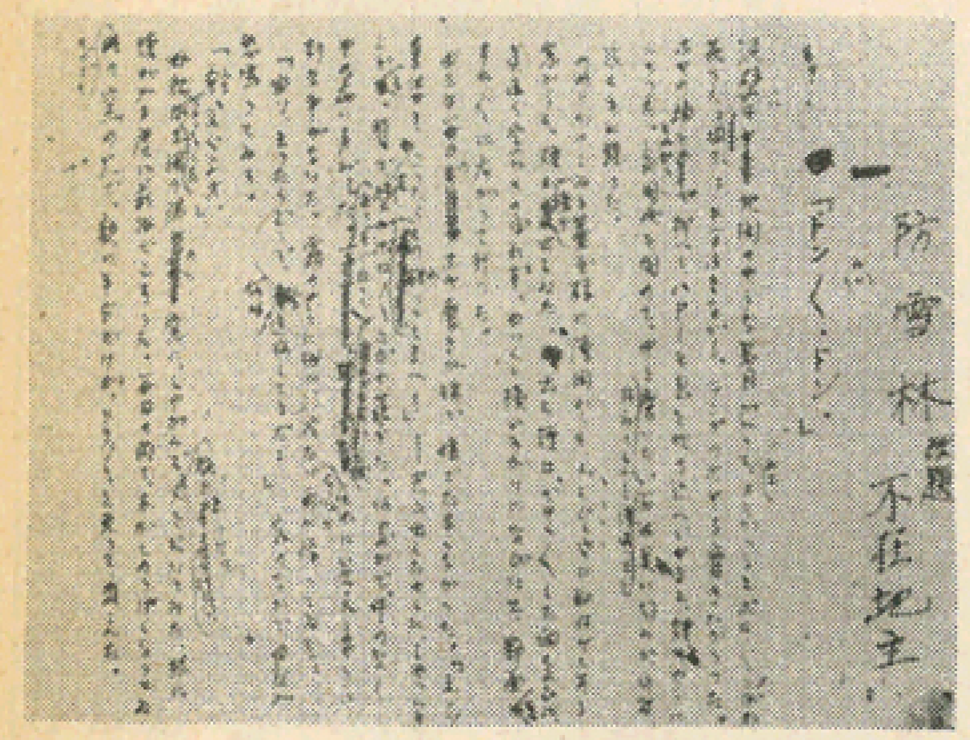
「第一に、主人公がないのだ。どうだ、変ってるだろう。今までそんな小説はないよ。したがって固有名詞もないのだ。登場人物は仇名とか通称ばかりで動くことにする。つまり集団が主人公で、それを表現する適切な方法だと思うんだ」

ぼくは、この小林の言葉を聞いて本当はすこし怪ぶんだ。

「たしかに面白い。しかしそれだけに難しいな。要は表現力が成否を決することになる」

「うん、それなんだ。三一五（作品）と同じリアリズムで、あれをもう少しテンポを速くすれば、相当の効果がでると思うんだが、どうだい」

小林はしだいに熱気を帯びて、次から次へと自分の着想をつづける。これは稀しいことで、書く前にテーマをこんなに詳しく口外したのは始めてである。この夜は十二時頃までその後に生れた「蟹工船」について語り合ったわけであるが、妙に印象深く、いまでもその折の情景を思い浮べることができる。



「不在地主」が中央公論に載って間もなく、小林は拓殖銀行をやめた。勧告された依願退職である。形は決して強制ではなかった。拓銀小樽支店では、小林は人気者で、やめた時は、上下から好かれていたので、支店長が大分悪役にされていたようである。小林の口から再三そんなことを聞いたことがある。それはともかく、いままで毎日のように会っていたのが、こんどは糸が切れたように本尊の小林からぷっつり音沙汰なしである。ぼくは仕方なしに、小樽図書館に勤めていた武田と会っていたが、

「なーに、心配することないよ。あいつはタフだから、元気で何か書いてるんだろう」

というばかりで、一向に気にかけない。

「いや、そうじやねえな、ぼくはどうも怪しいと思うな」

「大丈夫だつたら。あいつはいまや日本の作家になったんだ。悠々としてるよ」

なんだか、こっちが嘲われているようである。そこで一日、こっそりぼくは若竹町の小林の家を訪ねてみた。行ってみると、小林は案の定、在宅であった。寝間着のままで、寝ころんで本を読んでいた。ぼくの顔を見ると、お母さんや妹たちはとても喜んで迎えてくれたが、肝心の小林は、

「何しにきたんだ」といわぬばかりに、笑顔も見せず、声もかけず、黙って本を読んでいる。起き上ろうともしないのである。

ぼくはすぐ胸にぴんときたので、一向平気で、こちらも小林の方など見向きもせずに、お母さんたちを相手に陽気に話しかけた。

「野口さん、ほんとによく来てくれましたよ。銀行をやめたら、もう内の者に話もしないで、病人みたいに寝ころんでばかりいるんですよ。身体にさわるから、といっても、外へも一歩も出ないんですよ」

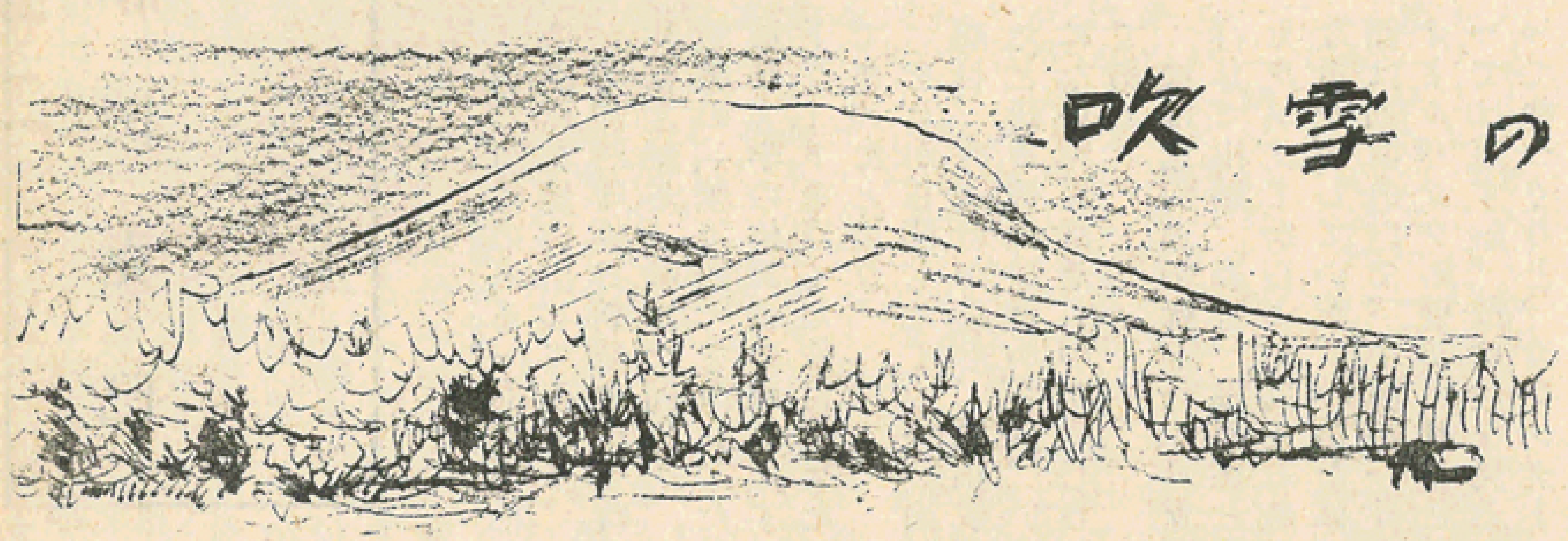
ぼくは、何か訳の分らぬことをいって家中をひびかせて笑い出した。

「もう小林は日本中に有名なんだ。銀行にいたら、それこそ見つともないよ」

なにしろ、景気のいいことをいったが、本人の小林は日頃の元気はどこへやら、髭だらけの蒼い顔をして寝ころんだままである。小林はあくまで「失業者」ではなくて、単なる「人気作家」であったのだ。商業学校出身なので、サラリーマン根性が身体の奥深く滲みこんでしまい、いわゆる自由職業人にはなり切れぬのであった。それがよく分るので、ぼくはおかしさが込み上げて、どうしても笑いをとめることができなかった。

世間の人に顔を見られるのも恥かしがり、友人に会うのも気が引けて家のなかに涙ぐんで引つ込んでいる実直な銀行員の失業者が、いまや日本中を沸かせている輝やかしきプロレタリヤ作家の実際の姿とは、おそらく誰一人として想像もつかないことであろう——諸君、だからぼくはおかしくて笑ってばかりいたのである。笑わずにいられなかった。

しまいに、とうとう小林も笑い出した。一緒に食卓についた頃は、家族のいう、何日ぶりかで小林の笑顔を見た、そして一層ぼくの訪問を謝していた。書きながら、また思い出して、ぼくは、いま笑っている。



吹雪の文学

水野清亀

……空が暗くなって、粉のやうな雪が地面と平行線に、矢のやうに鋭く吹き飛んできた。何時の間にか魔法でも使はれたやうに、マツカリヌプリのあの大きな図体が、フツと吹いて、カキ消されたやうに見えなくなってゐた。……「山が鳴ってるよ。」馭者が風に逆らって叫んでゐる。馬の鈴も風の工合で、ちっとも聞えなくなったり、と思ふと、耳もとではっきり、リン〳〵と聞えたりした。——ただ真白だ。その真白が沸えくってゐるやうに、狂い廻ってゐるだけ！そして不思議な底気味の悪い「響き」が——「うなり」が大荒れの時の物凄い海なりのやうに聞えてゐた。それがこの地面を揺ってでもゐるやうだった。……：鈴が又吹雪の中で調子よく鳴り出した。風の向きは一分置き位に変る。前から吹いてゐると思ってゐると、それが馬橇の左側に移ってきて居り、と、すぐ逆な側になり、私達はその度にそれに従って坐り直さなければならなかった。空間の全部が麦粉のやうな雪の吹雪だった。そしてそれ自身一つの大きな真白い旗ででもあるやうに風の工合で出来る吹雪の濃淡が丁度旗がなびくやうに見えた。時々、そういふ只中に、数十丈もある大理石の大円柱がフツ立つことがあった。そしてそれがグル〳〵廻りながら、私のろへを横切って消えて行った。……（原文ノママ）

引用した文章は、北海道の吹雪の壮絶極りなき情況の描写である。吹雪の描写として、これ以上美しく、これ以上壮大な文章を見たことがない。但し、この文章は中学の教科書にも高等学校の国語読本にものっていない。筆者は昭和六年の正月、北陸の田舎の女学校で国語教師をしていた時、たまたま前年十二月の雑誌「改造」で、この文章を発見して、教室で何度も生徒に読んできかせたことを記憶している。

この文章こそ小林多喜二の「東倶知安行」の一節である。「東倶知安行」は一九三〇年多喜二二十七才の作である。多喜二はその前々年一九二八年二十五才で、拓殖銀行小樽支店在勤中、普選法最初の国会選挙に立候補した労農党の山本懸蔵の応援演説のため東倶知安に行ったのである。その時の記録から小説「東倶知安行」が生れたのである。

この雄大な吹雪の文学「東倶知安行」について小田切秀雄氏は「それは、吹雪があったから、それが描けたというようなものでなく——自然のどんな場面にぶつかったって、それを描く力のない者には決して描けるものではない——時代の吹雪に若々しく、ヒューマニスティックな情熱の一切をこめて自身の全身をさらして行こうとしていた当時の小林の文学的な感受性のみが北方の吹雪の素晴らしさを自分の手でとらえることができたのだ。」とその著「民主主義文学論」でのべている。

（大阪陶芸教室）

多喜二断象

和田克巳

ある時代のある一面の小林多喜二の断片を想い出してみよう。

昭和四年朝日新聞の文芸時評で平林初之輔が「戦旗」同年四、五月号所載の「蟹工船」を激賞したことが彼が文学の桧舞台に躍り出すスポットライトを当てた役目を果たしたのであったと思う。

それから間もなく中央公論社や新潮社、改造社からも、原稿依頼が来たと語る彼の口調からは、いままでにない精気漲るものが感じられたのである。

彼は北海道拓殖銀行小樽支店へ入行して出納、調査、為替係と移り、カウンターからよく見える奥の大きな机を領していた。小柄な体つきで顔は細面色白で、小鼻が一寸ふくれオールバックの髪が乱れると首を振っては直す癖。彼は僕を見ると立上ってゆつくりと、カウンターへ、また原稿の催促かと言った顔で来るのであった。

彼と僕とは友人藤橋茂を介して、小樽映画鑑賞会発行の「シネマ」への投稿依頼が交友の発端であった。其後親交を重ねるに従い彼の嘗ての「クラルテ」グループの武田暹とも呑み友達となって、この四人が共鳴して「新機械派」と言う同人誌を創刊したのである。多喜二が評論、藤橋が詩、武田が小説「傾く大尉」僕が掌篇小説を書いたのである。

この多喜二の評論中「革命」の文字が印刷後散見され、藤橋と二人でこれは大変と消したことを未だに忘れない。こと程左様に左翼言動が弾圧されていた時代であった。「新機械派」は二号と続かなかったし、手許にもない。この創刊号を、もしやお持ちの方があれば是非お知らせ願いたい。

昭和二、三年頃は四年に日本最初のトーキー松竹「マダムと女房」が、出現する無声映画時代の末期であり小樽では松竹座の関楓葉、熊谷暁風、公園館の原紫翠、杉原芳翠の活弁黄金時代でもあった。

「シネマ」所載の多喜二の映画評は郷利基のペンネイムで「チャップリンのこと其他」昭二、十二「海戦を中心としての雑談」昭三、一「とても重大なこと」昭三、二「ヴォルガの船唄その他」昭三、五「第七天国」昭三、六「映画雑感」昭三、七「映画には顕微鏡を?」昭四、一「毎月の映画短評」等である。

よく熱心に映画を見る暇があったものと吃驚した記憶がある。この「シネマ」も残っていないから内容は勿論忘却の彼方である。

行内での彼の評判はフエミニストといわれて、よくサンタルチアを口誦んでいたそうである。銀行慰安会でロシア民謡ニーナを歌ったことからニーナとニツクネイムをつけられていた。

中央公論昭和四年十一月号に「不在地主」が発表されて好評であった。この素材は磯野進小樽商工会議所会頭の小作争議を扱ったもので、この資料は彼が銀行で収集したものといはれている。

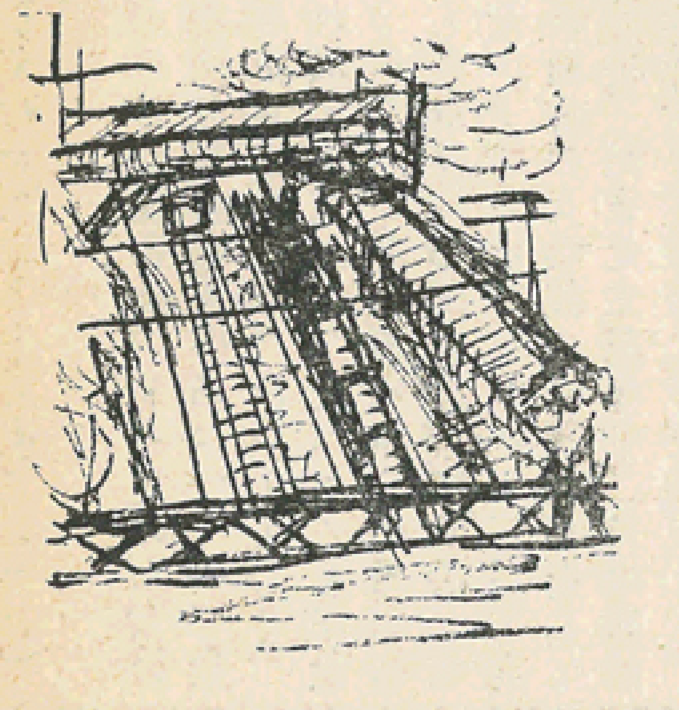
「うちの行員が左翼小説を書いてゐる」とある重役の娘が騒ぎ出してから、重役間の問題として表面化して行ったのである。それまでは大目に見られていた業務の寸暇の小説書き上層部の眼が追詰めるように感じられた。

ある日彼が部厚い本を一寸見ていた机に、つかつかと宮口真支店長が近寄ると、物も言はずに、その本を取上げて発止とばかりに床に叩きつけたのである。唖然とする周辺のオドロキの目。

多喜二は銀行を止めた。党の地下運動と、理論の実践を具現する作家活動をする為——何時も行っていた妙見河畔の越路洋品店の二階の喫茶部で原稿を書いていた彼は上京したのであった。

（四〇、一、一七）

（東亜石油株式会社第一販売部次長
推薦者　中野清一氏の友人）



多喜二抄

越崎宗一

昨年七月当別の本庄陸男文学碑の除幕式に参列のため来道した伊藤整氏に会ったら、今度小樽に小林多喜二文学碑を建てるのだと大層な熱のいれようだったが、帰途小樽に立寄り、市長と共に敷地を見分した記事が新聞に出ていた。

多喜二は僕と同様に小樽庁商（現緑陵高校）高商（現商大）に学んだ、僕より二年下だった彼は庁商時代から既に文才があり片岡亮一君（高商卒業後日銀へ入行）や坪田豊太君（一橋卒業後三菱鉱業入社）西岡徳蔵君（歌人元緑陵教諭）などと共に文学グループをつくり時々集っていた。僕は坪田君に誘われ何度かその会に出たことがある。多喜二は当時短篇長篇ものを盛んに書き文学雑誌に投稿していたその集りでは彼は若い方だったがこと文学に及ぶや仲々負けていず熱弁を振ったものである。この時代に既に文章を練り文学には大いに野心を持っていたのだろう、然し小説家として身を立てるとまでは考えていなかったと思う。この頃多喜二は新富町で三ツ星パンをやっていた伯父さんの家から学校へ通っていた。

僕の手許に大正九年三月に出た庁商の校友会雑誌「尊商」第三号があるが、これは僕の卒業後で僕は卒業生として駄文を投稿したので贈られたらしい。この号に多喜二は習作二篇「病院の窓」「電灯の下で」と詩「秋の夜の星」「秋が来た」を投稿している。

「病院の窓」は足を傷けて学校から病院に運ばれた私（多喜二自身であろう）が松葉杖をかりて室内を歩けるようになり窓際から暮れてゆく町を見下ろしながら色々感に耽っていることをものした短文である。その中に彼は「この美しい都には無くてはならぬ、この華かな都をシンボル化している灯……その灯の後にはさうしたものに比例した濃い陰影がある。そして富者征服者の狂う歓楽を眺むる人に想像のつかない生活難の叫び、社会敗残者の呻がある……という事を。こうした現実の醜い矛盾を考えるようなそして苦しむやうな者となった私はむしろ私のせつない運命が生んだ最も悲痛な人生の同情者であるということを自覚するようになったのだ」と書き伯父の工場でパン製造の重労働に服しながら苦学をつづけ世の矛盾を痛感した彼は既にプロ作家の萠芽を見せている。

これに反し詩「秋の夜の星」は如何にも純真な少年が無限の宇宙の神秘にうたれた気持ちをうたったもので

輝く星！　見なさい
　青い水底の静寂の中で
仰げ、瞬く鈴蘭
　おゝ無限の宇宙の
おゝ輝く星、冥想なさい
不言の神秘……奥深い
　　　またゝき
冷たい秋の夜、独り
　　　たゝずむ
仰ぐ、おゝ遠い星
聞きなさい、心の耳を傾けて
　幽玄な星の囁き——神秘な
青白い沈黙、ゾッとする
　　　冷気の厳粛
　おゝ超自然!!

もう一つ詩「秋が来た」があるが略す。

この雑誌は数年前東京の某出版社が多喜二の全集を出すので洩れているものを採集したいとの事で来樽されたので図書館で御見せしたから多分全集には入っていると思うがその後なしのつぶてなので判らない。

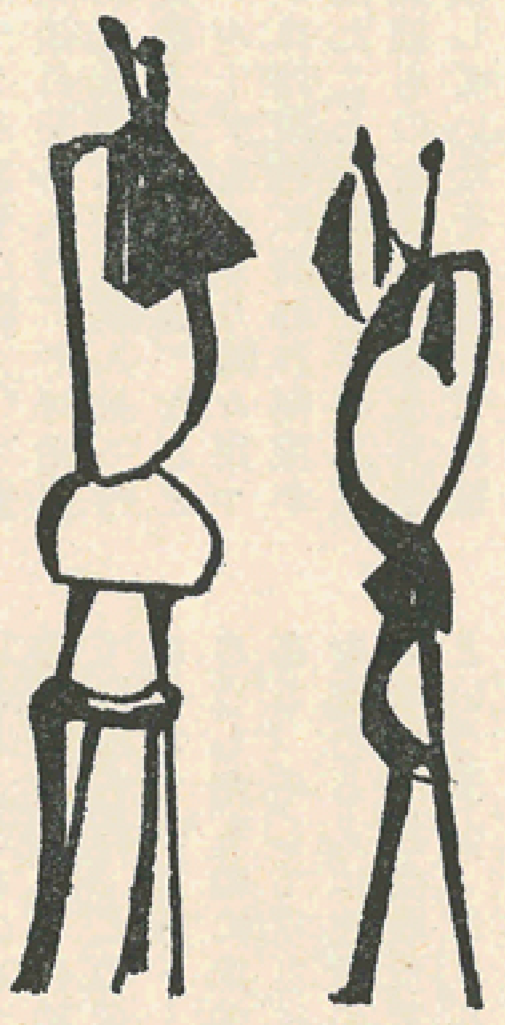
多喜二は僕より二年後即ち大正十三年に高商を卒業し拓銀小樽支店に勤め背広を着て几帳面に仕事をしている姿を見掛けたが僕も上京遊学後札幌に勤めたりして彼が本領たるプロレタリア作品を次々と発表し遂に拓銀を解雇されて上京後の活動のことについては残念乍ら語る資格がない。

（大一五）

冷暖房及び管工事全般設計監督施工
日邦工業株式会社
取締役社長　井藁政市
相談役監査役　宮地邦介（大11）
大阪市西区南堀江通1丁目2番地　電話大阪（531）8461㈹～5番
出張所　堺市浜寺石津町東2丁702番地　電話堺(0722)③2642番
工場　同上

緑丘が生んだ二人の文学者

西川正己



「多喜二特集号」には真先に伊藤整さんが原稿を寄せて臺目さんの企画を激励されたそうであるが、自分はこのことを聞いて本当に嬉しく思った。文学者としてこの立場や思想の上に相違があっても、多喜二、伊藤整お二人の文学者こそ緑丘の歴史の上で永遠に光り輝く得がたい至宝であると思う。

この二人の偉大な文学者を生んだ当時の母校の姿を想起して、あるいはこんなことがこの二人の後の文学活動に影響を及ぼしたのではあるまいかと思われる二、三のことをのべてこの稿を埋めたいと思う。

中村光夫が伊藤整を論じて実に不思議な正体の知れない作家であるといっているのは一方には単なる訴訟記録以上に文学作品としても高く評価される千枚近い大作「裁判」を書き下ろす一方「群像」には数年続いて「日本文壇史」というこれまた従来の文学史家や批評家の試みなかった新しいユニークな近代文学史をたゆまず書き続けていられるし、また東京工大教授として優れた学者生活を立派に達成するとともに小説、批評にも驚くべき健筆を振われるという八面六臂の驚嘆すべき大活躍の故である。中村光夫はこの伊藤整のこれらの特質を理解する手掛りとして

第一　彼が北海道の生れであること。

第二　英文学によって育てられたこと。

第三　東京商大中退という作家として珍らしい学歴であること

を挙げているがこの第三の項目は小樽高商を経て東京商大云云と書き代えないと当を得ないと思うのである。右に掲げた三項目はあるいはまた小林多喜二を論ずる人にも援用されていい彼の特質を理解する手掛りとなると思う。

僕達が入学した当時の小樽高等商業学校には非常に明るい自由な空気が漲っていた。入学試験という暗い重苦しい関門を経て上級学校へ入ったときは誰しも何より明るい青春の気分を満喫するものであるが、大正末期の母校の空気の中には特にそうした明るさと自由があったように思う。

Rounds さんがはじめての授業に教室に這入ってきて "Good morning, gentlmen" と挨拶されたとき伴先生から入学式で「諸君を紳士として取扱う」と宣言されたときと同様に一寸戸迷いを感じるほど「ああ俺達はもう大人なんだナー」という実感に耽ったものである。岩波文庫に「反時代的考察」の飜訳を出し「大和古寺」「関東古寺」などという優れた「古寺巡礼」を書いたニイチェ学者井上政次氏は僕等と入違いの母校の卒業であるが、当時の小樽高商の学風を「下手な文科の専門学校」と評されたことがある。井上さんをニイチエに導いた先生は多分第四寮の寮監をされていたスピノザ「哲学体系」の訳者小尾範治先生であったろう。優れた経済学者大西先生の影響でアカデミックな学問的雰囲気もみなぎっていたように思う。大野先生の貨幣論の冒頭に盛んに哲学用語が頻出にして「アプリオリ」だの、「純粋根本概念」だのという言葉を日常講義の中で何度も聞いた覚えがある。当時の図書館の館長であった中村賢治郎先生の好みで文学書が多かったと「若い詩人の肖像」の中で伊藤整さんがのべていられるように僕はあの図書館の書棚に並べられた新刊書によって当時の新進作家の名前も数多く覚えたのであった。

一年生のとき稲穂小学校の講堂で牧野英一博士が講演されたことがあった。牧野博士は、その当時における最も進歩的な法律学者であって、「所有権は義務を伴う」というドイツ法律思想の展開から、始めて終始「正義衡平」の法律思想をかんで含めるように講述されたのであるが、こうした講演会が市民の間でも歓迎されるほどに小樽という町そのものも他の諸都市よりは進歩的な思想に培われ、港湾労働者の間には可なりの左翼的な風潮も強く流れていたのではないかと思う。「保険」や「交通論」の講義を受持たれた高松勤先生などもあるいは組合運動の思想的指導者の御一人ではなかったのかとも推察される。

大熊信行先生が、一年生の僕達の原論を受持たれて尨大な **Mill** の **Principles of Political Economy** を講じられるとき真先に「君達のうち唯物論と唯物史観について知識のある者は手を挙げてみよと質問され僕が鳩が玉鉄砲を食ったように目をパチクリさせている中に四五人の人が勇敢に手を挙げたのを覚えている。この新進の経済学者はまた文学に深い関心を持つ学者で新定型短歌を提唱し「まるめら」一派の主導者であった。

　このおれの性格をひしまげ
　るぐらいなら
　いっそ全世界よ砕けてしま
　へ

というのは先生の作品の一つであるもう一つ。

　さびしいと思うと何か白い
　花が
　木にたくさん咲いている

佐々木妙二、土田秀雄などという人々は先生の文学の弟子でもあられた。弁論部にいてある時の市公会堂（公園の中にあった）での高商の講演会で今井健四郎さんが啄木の

　一隊の兵を見送りて
　かなしかり
　何ぞ彼等のうれひ無げなる

の一首を枕に盛んに軍隊に対する批判的な弁論を展開されるのを僕は驚異の耳をたてて聞いた。

　平手もて吹雪にぬれし
　顔をふく
　友共産を主義とせりけり

も啄木小樽在住のときの一首であるが僕自身も保証人になって頂いた方の一友人で小さな町工場を経営されていたKさんという人が、遠慮のない社会改良案を口角泡を飛ばして論じるのを聞いたとき啄木のこの一首を思い出して吹雪に暮るる小樽の町の何処かに激しい思想の波の吹きあれているのを身にしみて感じる思いがしたことがある。

伊藤整さんが母校の新聞に、伊藤さんが何かの飜訳（多分ジョイスのユリシイズの共訳）を出されたときに故浜林生之助先生が「伊藤の語学力は小樽高商で養われたものだ」と仰っしゃった、と書いていられるのを見たことがある。事実小樽外語学校の異名をとった程に語学力の養成には今以上に力を入れていたのではないかと思う。（いまも商大の **Language Laboratory** の施設は北海道一だと聞き）

「自分の姓は大平頼母、古風なことだけは高商一」だと何かの座談会のときに、笑っていられた大平先生には、一年のときに **Readings on Contemporary Science** を講読して頂いたけれど先生は毎日英字新聞を日本語で御読みになるんだという噂があった。岩波からパネット原著の「メンデリズム」の訳書を御出しになった。今では本書は文字通り稀覯本で同窓の中でも所有しているのは僕ぐらいでないかと思う。英国ロンドン市マクミラン株式会社から、ドクトル・オブ・フイロソヒー大平頼母殿と宛てた原著飜訳の許可書まで巻頭に添えたもので小樽の古本屋さんにもうないのではないかと思う。浜林さんのことに伊藤さんの「文学と人間」の中でも英文学へのゾーケイの深さを嗟嘆していられる。

苫米地先生が商業英語の権威者であられたことはいうまでもない。小林象三先生の発音学や英詩の傾倒、中村和之雄先生の博学、いずれ劣らぬ優秀語学陣にラウンズ・マッキンノン両先生と母校には伊藤さんの言葉を借りると「大変よくできた人たちばかりで、ああいうできる先生方はこのごろの東京の諸大学にもあまりいない」いい先生方に恵まれていたのである。

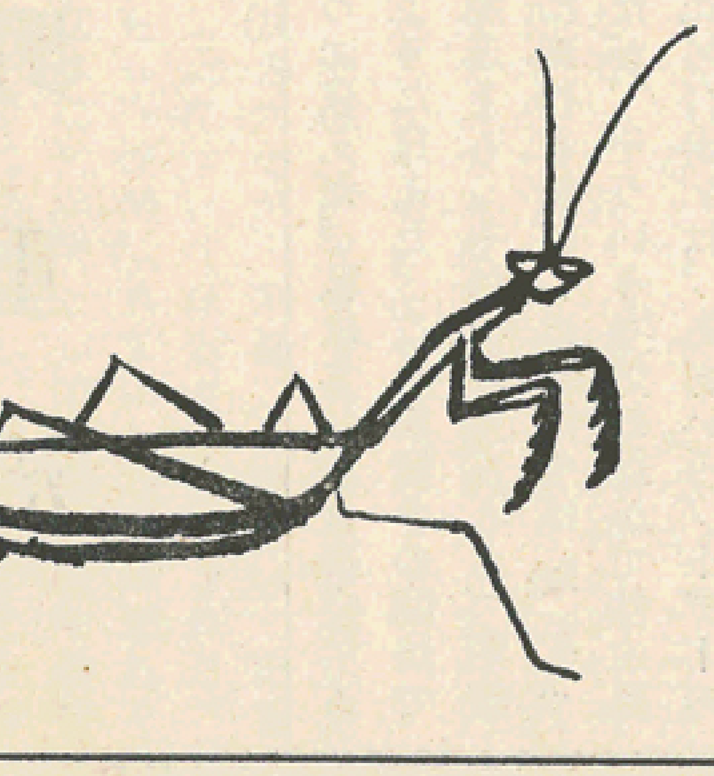
伊藤孝次氏が「ロレンス・スタアンに発してこれを凌ぐ趣きすらある」と評した伊藤さんの語学力と英文学への深い理解は母校三ケ年間にその基礎が築かれたのであろう。

伊藤さんについては、荒正人氏が「マルクス主義に対して自我の問題を控え目にではあるが、しかし執拗に提出してそのリフレインが特に面白い」とのべているようにそこには「カトリシズム」を想わせる激しささえも秘めていることを作品を通じて感じとることができよう。

小林多喜二が我国プロレタリア文学に打ち立てた数々の記念碑に示した構想力と情熱の烈しさは何処から生れてきたのであろうか。

その出身からいえば貧乏な水呑百姓のせがれであった多喜二が、伯父の援助で母校に学び卒業して拓銀に職を得ていつしか小市民的インテリゲンチャとしての生活の内部的矛盾に悩み、大正末期の日本の民主革命運動に大きな変貌と進展のあった年代に、小樽の労働組合運動の再建に直接力を尽して働いたりするうちに社会主義運動や、プロレタリア文学運動の影響を比較的たやすく受けて革命作家としての悲痛な最後も当時の社会情勢から見れば、必然のコースだったのかも知れない。しかし返す返すもその最後は残念であり、同窓の一人として当時の官憲への怒りを感ぜずにはいられない。多喜二をして今日あらしめたら――。こうした妄想にこそせめてもの多喜二への愛著と追慕が具象化されそうだと思うのは僕独りであろうか。

（大一五　宇治山田商業高校）



思い出と記録

中野重治

一九三〇年の春わたしたちは関西へ講演旅行に行った。「『戦旗』防衛」のためで京都、大阪方面がおもだったが、三重の松阪へ行ったときに私たちの泊った宿屋へ農民組合のある人がやってきた。私はこの人に一九二八年春、香川県で会っていた。香川県の農民組合を土台にあのとき大山郁夫さんが衆議院選挙に定って、その応援に出かけて行って私はこの人に会ったのだったが、この時は例えば後の島木健作にも私ははじめて会った。この男は香川の農民組合の書記をしていた。割りに背の低い、色の白い、声にふくらみのあるような青年だったが、誰かの話ではなかなか豪胆な男でもあるということだった。

三・一五事件でむろん香川の農民組合はばらばらにされていた。それをどう再建するかについてはいろいろの意見があるらしかったが、私は詳しくも知らなかった。さてその男がきている日、その再建のためにいろいろ費用がいる。作家同盟としてでもよく作家同盟の作家個々人としてでもいいが、できたらいく分の応援をしてもらいたい。再建方向についてわれわれの――つまりその人たちの考えに対して批判もあるかも知らないが、批判は批判として、農民組合を大衆組織として再建して行くことでは意見一致しているはずだから、よろしく頼むうんぬん。私が知り合いなのでとにかく私が彼を一座に紹介した。そしてわれわれは多少の金を出した。小林多喜二は割合に奮発して出したように思う。

この農民組合の人の各々を私は今思い出せないが、これはしらべればわかる筈である。たくさんの人が死んだが、この人は生きているようにも思う。そしてもしその人のところに、あるいはどこかに、そのときの奉賀帖が残っていれば小林の拠金額は数字でわかるわけである。

なぜそのとき、その農民組合の男が、われわれの考えに批判もあるかも知れぬかということをいったかというと、その全部はわからぬにしても、そのとき出ていた川崎メーデーの話にからんでのことだったことにまちがいがない。川崎のメーデー示威で、武装が行なわれた、竹槍を持ち出した、警察の妨碍に対して武装自衛に出たという話がその朝はいってきて、私たちは驚きもし、昂奮もし、しかし疑問に捕えられもした。小林は割りに興奮していた。彼はそういうやり方をさしおき肯定するように見えた。私はさしむき否定するように見えた。これは傾きの問題で両者とも（その他の人びとも）明瞭に理否を検討したわけではなかったが、そういう空気のなかで件の農民組合書記は、ああいうメーデーのやり方に明らかに反対だということを自分でいっていたので、それに関係して批判うんぬんが出たのだったろうと思う。川崎には作家同盟関係の人間も何人かいた。かれらは逮捕されなかったが、かれらと親しかった何人かは逮捕されてその後刑務所へおくられた。小林自身は、東京へ帰ってからは別の見方をするようになったらしかったが、何しろ東京へ帰るなり私は逮捕され、小林は一旦大阪でつかまり、東京へ帰ってからさらに逮捕されてしまったので、松坂の時のことで、ゆっくり話あう機会は持てないでしまった。一九三一年には私たちは外へ出てきたので、三一年中にあの種のことをゆっくりみんなで検討することができたらよかっただろうと思う。

その頃私たちはかなり貧しく暮らしていた。小林と立野信之とは割りに近所にいたが、ある日立野がいっしよに飯を食おうといい出した。

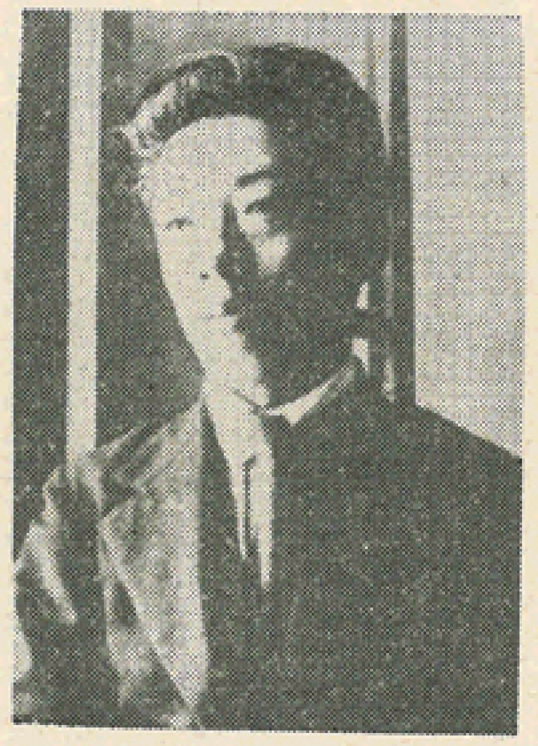
いい魚がはいったから、水炊きをしようといって呼びにきた。立野、小林、中野、それに橋本英吉がいたかと思う。立野の家で、立野の細君がいろいろとやってくれて非常にうまかった。

「これで多少のビールがあるとな………」と私がいってみんな笑い出したが、笑わしたものの、かなしいようでもあり、しかし誰も貧しきそのものを悲しみはしなかった。

ただ今になって考えるが、貧しさということでは、実地にもやや学問的にも小林はいろんなことを知っていたように思う。貧乏ということのいろんなあらわれ方、それが人間に及ぼして行く精神的なゆがみおよびその逆のそんなことで私たちが、もっとゆっくり話したりしらべたりする余裕があの時間にあったらよかったと思う。

これは当時の日本の情勢分析ということにも、関係して行くにちがいないが、文学の面からする徹底的な情勢分析がもっとできたのだったら非常によかったろう。その道がもう少し開けていたら、小林の知識経験に大きく物をいったのだったかも知れぬと思う。これはそれ以上のところへも話を持って行くが、いまのところこの程度でも私は残念に思う。

手塚英孝が長いことかかって小林評伝を書いたあと、私は偶然「為横死之小林遺族募捐啓」というのを北京の魯迅博物館で見つけることになった。これは「中国の文学者たちが小林の遺族のために募金をした事実」を語るもので、発起人は郁達夫、茅盾、葉紹鈞、陳望道、洪深、杜衡、魯迅、田漢、丁玲の人びとだった。



一九三〇年　上京直後

これは日本のわれわれが知らずにいたことだったので、私は『アカハタ』にそのことを書いて、手塚が新しい版を出すときには、それに触れるように、できればそれまでに何分のしらべをして書いてくれるように言っておいたが、それは実現しなかった。この次ぎの版がでるときには何とかそれを願いたい。

（一九六五・一・三〇）

多喜二の親思い

香川清夫（大一三）

学生時代、あのなつかしい図書館で、数度語り合った所謂蒼白い、自信に満ちた小林君の印象もさることながら、母親っ子の僕にとっては「親思う心にまさる親心」で逆縁の御母堂（小林セキさん）に御慰めの手紙を差上げたことがあった。

私はものの不自由な昭和二十二年の七月に次男を亡くした。その翌年に続いて同じ七月当時芦屋高女三年の長女を盲腸で失い、言うに言われぬ悲しみを味わった。それから数年して、多喜二、百合子研究会編、雑誌「多喜二と百合子」を入手してはからずも多喜二の母小林セキさんの住所を発見した。子供を失った者の心には、何か相通ずるものがあるような、悲しみの共通の場を見付けたような思いがして一筆手紙を認めたことがある。早速佐藤ちまさん（多喜二姉上）の代筆で「香川さんはどちらの香川さんでしょうか…云々」というご返事をいただいた思い出がある。今「緑丘」が多喜二特集を発刊することを聞いてその時の手紙を出して何かお役に立てたいと思い、探して見たが見当らず、はなはだ残念である。

三月のはじめ友人、朝日の福田勇一郎君が朝日新聞社を辞めて東京へ発つことになったと聞き、大阪に居る僅か許りの同期有志が集まって、一献かたむける機会を持った。その時福田君は「緑丘」へ写真に添えて学生時代の三人の思い出を書いたが書洩らしたことが一つある。それは多喜二が昭和五、六年頃、治安維治法で逮捕されて刑務所から出て来てから、ひょっこり福田君の家を訪ねてきた。久しぶりだ上りたまえといって部屋に招じ入れた時、彼の右前額から頬にかけて紫色になっていたのを発見した。すぐ「ここをさわって見たまえ」と小林のいわれるままに触れて見た。こわばって堅くなっている。冷く感じた感触が今でも残っているとのことであった。この話を聞いて我々一同その当時の拷問の程を想像すると共にいまさらに彼の信念の強さに敬意を深めた。あの白色の彼を思い出しつつ。

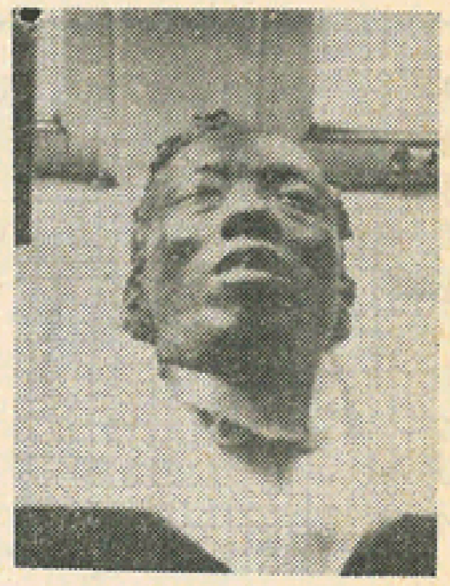
多喜二が死んでから色々な本が出版されたが、多喜二の親思いであることについては方々で散見された。もし今彼が生きていたならば恐らく立派な文学者として、母や姉や弟をどんなに幸せにし、彼の幼少よりの親孝行や姉弟思いが立派に実を結んだのではなかろうか？

（公認会計士）

小林多喜二を憶う

田邊耕一郎

右から
原　泉
岡本　唐貴
田辺耕一郎
上野　壮夫
立野　信之
山田清三郎
鹿地　亘
千田　是也



三十二年前の小林多喜二のお通夜のときの写真に、千田是也、立野信之、原泉子などと一緒に悲痛な面持ちで小林の死顔をじっと見ている私がいる。いつ見てもこの写真は感慨無量の思いをさせ、あの頃のことを思い出させてくれる唯一の資料である。終戦の年の春、

東京の空襲で家と一緒に何もかも灰になってしまったので、その中には、小林多喜二が当時の白色テロのためにむごたらしく虐殺された直後「小林多喜二の死と作品」と題して長谷川如是閑先生主宰の「批判」という雑誌に私が書かせていただいた掲載誌もあったし、「中央公論」編集長だった佐藤観次郎（いま社会党代議士）からもらった伏字一つもない小林の絶筆となった小説「党生活者」のゲラ刷もあったのだが――。

私が彼の死を知らされたのは午後一時過ぎだったと記憶しているから、小林多喜二が虐殺された日、すなわち一九三三年二月二十日の翌日だったにちがいない。手塚英孝の「小林多喜二」によれば二十日の午後七時四十五分に絶命したとあるから、小林が絶命したあとまる一日築地署の冷たい留置場入口のところのたたきの上に、丸裸で仰向けにしてころがされ、きたないドンゴロスの布切れをかぶせて引取人がくるまで放ったらかされていたものと思われた。私が駈けつけたのは三時ごろだったと思うが、その時そうなっていたのだ。

私はその前々年の大晦日の夜半に西郊外の高円寺のおでん屋で、小林と偶然に逢ったので、彼ははしゃいで酒を呑んだ。そのとき除夜の鐘が鳴りだしたのでしんみりとしてしまって、「ことしは君とこうしてここで除夜の鐘をきいたが、来年は俺はどこで除夜の鐘をきくことになるかなあ。君、もし俺がどうかなったらおふくろと三吾（弟）の相談相手になってやってくれよね。」と、小林は泣きだしそうな顔をした。それが、まだ眼の底にある。それからまた一はしゃぎして、踏切のところで、デワ！と言って別れた。それから一年余りも逢っていなかった。予感した通り彼はまもなく馬橋の家から出て行ったきり帰って来なくなった。私の下宿は近かったので、そのことを三吾君が知らせにきたとき、「三吾君、騒いでやるなよ、どこかに元気でいるはずだから」と言ってやったことがあった。

彼は左翼の流行作家だったが、私は食って通るのがやっとだったから「どうしていますか？」と言って彼の不在になったあとのお母さんや三吾を訪ねてあげるのが関の山だった。彼は地下生活をしながらジャーナリズムに作品を発表して母と弟の生活を助けていたらしい。私が力になってあげられなかったことを私は今もすまなかったと思っている。しかし彼はお母さんや三吾君とどこかで逢っていたらしい。

私は小林多喜二と近くに住んでいたばかりでなく友人として親しかった。彼は作品や評論を発表したら、そのたびに「君、読んでくれた？」と言って熱心に私の批評感想をききたがった。私が何か発表するとよく眼を通してくれて、感想を語ってくれていた。彼はチャイコフスキーの「アンダンテ・カンタビレ」が好きで、私を誘って阿佐ケ谷の喫茶店に行って、コーヒーを呑みながら二回でも三回でもくりかえしてそれのレコードをかけさせて聴くのを楽しみにしていた。彼はまたチャップリンが好きで「黄金狂時代」を見るために浅草の帝国館へ行こうと言い出し私もチャップリンの映画には眼がないので、小林多喜二、立野信之と私で出かけたことがあったが、どこでも彼はたいへんなはしゃぎようだった。

だが、こういう愉快な友達づきあいも長くはつづかなかった。彼が小樽から出てきて二年あったかなかったか。作家同盟の書記長になった小林多喜二は、はげしい情熱をかたむけて文学運動の埒をこえて、党活動に深入りして行ったようだった。そして、そこから文学運動の指導をはじめた。変名で指導理論を発表しだした。政治と文学の問題ではげしく果しない議論をしたこともあった。そのころの小林はなにか大きな力に駈りたてられているようだった。

「蟹工船」や「不在地主」を発表したあとの自信のみなぎった人間小林多喜二は消えて、せかせかと肩をふって動きまわり、焦燥にみちて痩せた感じだった。もう私は何も言わずハラハラしながら見ていたのである。そうして彼はわれわれの前から姿を消して行った。

それから一年余りたっていた。

一九三三年二月のその日、東京の同じ屋根の下でそんなことが起っていようとは知らないから、城北地区の赤羽で開催された城北文学サークル連盟主催の文芸講演会に講師として呼ばれてゆき、壇上に立って、一語か二語しゃべりはじめた時、

「電話です、読売新聞から、急用だと言っています。」

と司会者が告げた。

困るなァとは思ったが、急用だというのでしぶしぶ壇を下りて行って受話器をとると、河辺確治という小林も私もよく知っている文芸部記者の声で、

「小林多喜二が死んでいる。それも怪しい死に方なんだ。場所は築地署だ、すぐきて見てほしい。」

と、せきこんだ声がいきなり飛びこんできた。

「ナニ小林が？　よし、すぐ行く。」

私は再び壇上にとって返し、

「みなさん、小林多喜二が死にました。残念ですが、このまま私は駈けつけます。許して下さい！」

場内が驚いてどよめき総立ちになったのをあとに、赤羽会館を私は飛び出した。駈けつけて後のことは、手塚英孝がくわしく書いているからここには省く。

小林多喜二のことでは書きたいことが沢山あるが、また別の機会にしたい。ただ、逮捕されたのは地下組織の中のだれかに売られたのにちがいないが、どういうことがあったのか私には久しい間わからなかった。それが共産青年同盟の責任者三船留吉というもののしわざであり、三船は地下組織内にしのびこんでいた秘密警察のスパイであったと手塚英孝が書いているのを読んで、はじめて謎がとけた。

小林多喜二はいいやつだったから純粋な作家として、友人として、三十二年を経た今でも、彼の死を心から痛憤せずにはいられない。その思いは消えない。一つは当時の白色テロに対してだが、もう一つ、あれほどの大作家を地下生活に引きづりこんだ日本共産党のやり方についても「痛憤」の一語は言わずにいられないのである。

（評論家）

多喜二のデスマスク

原　泉　談

その夜更け、貴司山治さん、千田是也さんと一緒に車を拾って、築地から阿佐ケ谷へかけつけましたが、尾張町あたりではっと気付いたのはデスマスクのことです。それには石膏が要ります。ちょうど数寄屋橋に向って左側に小さい薬屋があり、もう深夜のことで寝静まっているところを叩き起して、石膏を二袋ばかり買いました。すると千田さんが、友人の佐土哲二が彫刻をやるから、起して連れて行こうというので、永福町へ廻って佐土さんも一緒に小林さんの家にとびこみました。着くなりすぐ小林さんの顔に油を塗り、デスマスクをとったのですが、何しろ石膏が固まるには時間がかかります。

朝になったら警察のものがきて、折角とったデスマスクも持ち去られてしまうと、気のせくままに生乾きの石膏をはがしたので、四、五片に割れてしまいましたが、それを佐土さんに持たせて、夜が明けないうちに永福町へ帰しました。こんないきさつで小林多喜二さんのデスマスクが、今日世に残ったのです（日本文学全集・日報三五所載）

香川公認会計士事務所

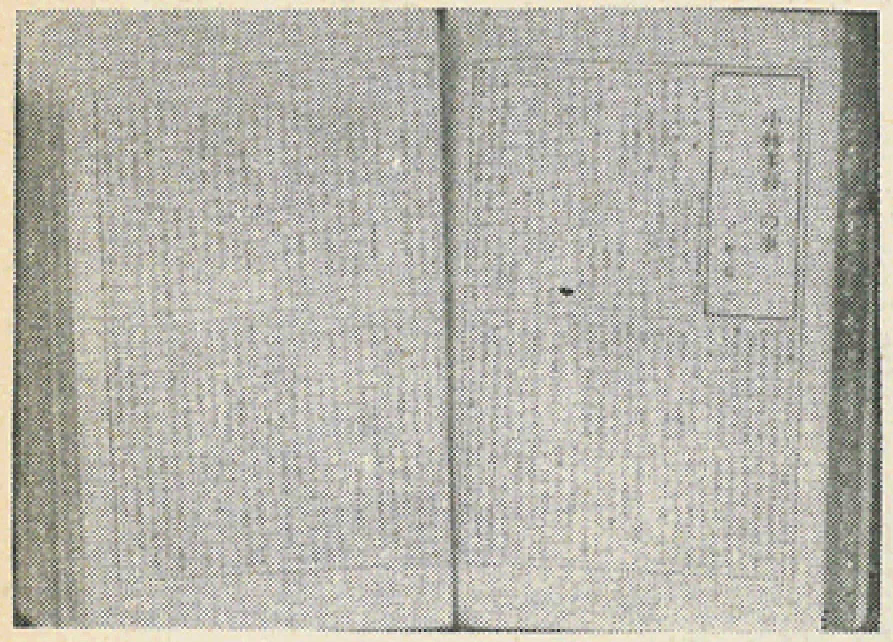
公認会計士
税理士
企業診断員　香　川　清　夫（大13卒）

事務所　大阪市南区安堂寺橋通1の44　安堂寺橋ビル
電話大阪（261）5320番

自宅　大阪市東住吉区田辺西之町八丁目一番地
電話大阪（692）2243番

小林多喜二の事

立野信之



その日

その日の午後、僕は用事があって家を出た。小林多喜二の久しぶりの小説『地区の人々』の載っている「改造」三月号をふところに入れて——そして途中、川口浩の所へ寄った。

川口は急ぎの仕事をしていたが、僕の顔を見るとペンを置いて、「小林の小説を読んだか？」ときいた。僕は、まだ三分の一しか読んでいないが——といって、自分の感想を少しばかり述べた。

そこへ夕刊が投げこまれた。障子の近くにいた僕が受取って、何気なく開くと……「プロ作家の闘将小林多喜二氏留置場で怪死す」と大きく出ている。

「おい、小林が××××……！」

と僕が叫んだ。川口が「えゝッ？」といって、新聞をのぞきこんだ。

二人はだいぶ長い間、一言も発しないで、ただ新聞面をじっとみつめていた。大きな嘘の中に投げこまれたような気がしてならなかった。

「……とにかくおれは小林の家に行ってみる。お母さんが北海道から帰ってる筈だから。」

僕はその足で、すぐ馬橋の彼の家に駈けつけた。が、家はキチンと戸締りがしてある。——アトで分ったのだが、お母さんは多喜二の死を隣りのラジオで知り、それから夕刊を見、おどろいて取るものも取りあえず、孫（多喜二の姉さんの子供）をおぶって、単身築地署へ駈けつけたのだった。弟の三吾君はヴァイオリンの稽古に行っていて、家にいなかった。

「やっぱり事実なんだな——」

僕は錠のしまっている玄関の硝子戸のまえに、しばらく茫然と佇んでいた。——

屍体は、その晩の十一時頃、半狂乱のお母さんと叔父さん（これも新聞で知ってかけつけた）に守られて帰ってきた。そして僕は約半年ぶりで、物言わぬ彼と顔を合わせたのである。

古い作品について

小林が同盟に入ったのは、僕より半年か一年アトである。が、彼はその前から小説を書いていた。

僕が彼の名をはじめて知ったのは僕の親戚の者が発行していた（そして山田清三郎が編集していた）「新興文学」という反プロレタリア的文学雑誌である。小林は、それに小説を投稿してきて、当選したのだ。何という題名だったか——忘れたが多分『東倶知安行』（改造社発行）の中にある『籔入れ』ではなかったかと思う——宮島新三郎氏の選で「老巧云々」の選評がついていたのを、僕はおぼえている。大正十二年頃のことである。

その後小林は「文芸戦線」に『女囚』という戯曲を載せている。女囚のトルストイの『復活』の中に出てくるような生活を、こくめいに描いているだけで、まだ明確なプロレタリア的観点もなく、大して問題にもならなかった。

その後は、文芸春秋社から新作家の登龍門として出されていた「創作月刊」に『滝子』を発表している。やはりこくめいな、自然主義風の筆致で、淫売婦の生活を描いたもので——「創作月刊」では内部的にかなり評判がよく大いに嘱望されたように聞いている。

だが、この作品にも生活に対するハッキリした世界観は出ていなかった。

「東倶知安行」の中に納められてある彼の古い作品はすべてそうであるが、自然主義的筆致で、人道主義的な、生活にしいたげられている者への涙——といったようなものが、感じられる作品が多い。が、取扱われている題材は、ほとんど淫売婦だとか、奉公人だとか、人夫だとか、労働者だとか——そういった下層階級の生活である。そして作者は、それを自分の少青年時代の生活を通じてよく見、よく知っているものの中から選び出している、だから題材の範囲も、作者の第二の故郷である小樽から一歩も出ていない。

当時の小林は、トルストイやドストエフスキイを愛読していたらしく日本の作家では、志賀直哉に私淑していたようにきいている。『萬歳々々』という短篇は、作者自身が僕に「好きな作品だ」といって指摘していた自伝風の小説だが、志賀直哉の影響が多分に出ている。

「三月十五日」

「創作月刊」に小説を発表してから間もなくだったと思う。小林が例の『一九二八年三月十五日』を書いたのは。

ある日、蔵原惟人が分厚な原稿を持って、僕の所へきた。

「これを読んでよかったら戦旗へ載せるようにしてくれ。」

といって、原稿を渡した。それが『一九二八年三月十五日』だった。僕は小林多喜二の名を一目見て、

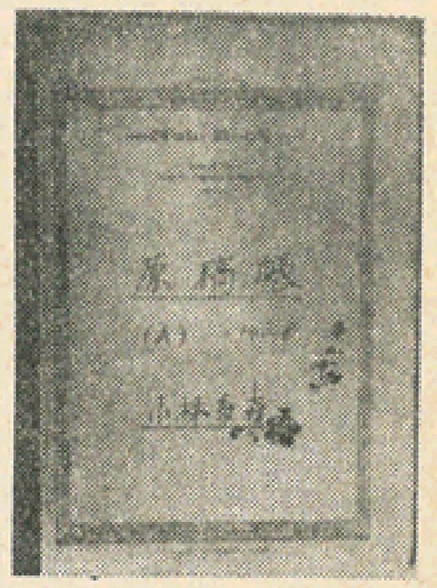
「あゝ、これは古い作家だよ。」

と、いった。

原稿を見て、僕はおどろいた。いかにも銀行員らしい几帳面な書体で一字も消してないのである。まるで上手なプリント刷かなんかのようだった。

これはアトで聞いたのだが、小林は決して小説をいきなり原稿紙には書かないで、最初はノートに書いていたのだ。それは当時彼は銀行に勤めていて原稿紙をひろげて書く時間を持たなかったせいもあるだろうが、何よりも作を忽せにしない彼の真摯な作家的態度がそうさせたのであろうと思う。——彼は先ずノートへ下書きをかいてそれを二月も三月も、時には半年もかかって直す。そしてもはや一字一句も直す必要がなくなったとき、はじめて原稿紙へ書いた。

もう一つ、彼がいかに真摯な態度で創作にのぞんでいるかを示すに足る一例をあげると、彼は創作に油がのってきて一時間に三枚も四枚も書けるようになると、自重してペンを置く、と僕に告白していた。興にのりすぎて、描写が上すべりするのを極度に恐れたのである。



『一九二八年三月十五日』は、そうした一生懸命な努力の中から生れた。作品には、彼の真剣さがあふれていた。

僕はその真剣さに打たれ、原稿をさっそく「戦旗」編輯局へ廻した。果然、評判がよく、小林はプロレタリア文学運動の本道の上に力強い第一歩を踏み出した。

ホームランを打つ

『三月十五日』が出てから半年ばかりして、小林は彼の不朽の名作『蟹工船』を書いて、やはり蔵原の所に送ってきた。そして蔵原宛の手紙に次のような意味のことが書いてあった。

「自分では、前の作品では人間の個性を描いたが、今度は人間の集団生活を描いた……。云々。」

『蟹工船』の原稿を受取ったとき僕はやったな！と思った。背中をドカン！と力一杯どやしつけられたような気がした。事実『蟹工船』は彼の全作品中の白眉であるばかりでなく十年間の日本のプロレタリア文学史上に聳え立つヒマラヤである。

小林に背中をどやしつけられたのは、『蟹工船』だけでなく、その後もひきつづいて——『不在地主』のときも、『工場細胞』のときも、同様にやられたのだった。それは単に量的に受ける感じではなく、一作毎に目先きを変えて、次々と大きな題材にぶっかって行く、彼の作家的精進が打ってくるのだ。小林の階級的作家としての成長ぶりは実際めざましい。彼は、いわばプロレタリア文学運動の旗印のようなものだった。

僕は「都新聞」で、小林がインテリ出でありながらぐんぐん成長して行った躍進ぶりを、ドイツのベッヒエルやフランスのバルビュスに比較する、いやそれ以上だ——と書いたが、実際彼の努力と、彼の躍進ぶりとは絶品である。

彼はよく、「ホームランを打つ」ということを僕等にいっていた。監獄から誰かにあてた手紙の中にも、ホームランをかっとばせ」と書いてあった。そして彼自身、一作毎にホームランを熱望しつつ書いたし、事実、プロレタリア文学の最強打者であった。

藤原惟人は理論家として「世界選手」であると評価されている。としたら、蔵原の指導した道を、最も忠実に、最も力強く歩いた作家としての小林もまた「世界選手」の名に価すると思う。

日本のプロレタリア文学は、いま二人の「世界選手」を奪われている。一人は刑務所に一人は「死」に！

交遊記

僕は小林を写真——よく本の扉に出ている、銀行員当時の写真だけ見ていたとき、色の生白い、脊のスラリとした「お坊ちゃん」型の文学青年を想像していたものだ。これは僕だけではなく、大がいの人がそう思っていたらしい。

ところが、一昨年の三月、同盟の第二回大会に、彼が北海道から上京してきたとき、はじめて逢ってみてびっくりした。

「なんて貧弱な男だ——」

洋服はボロだし、股の間に大きな色のちがったツギのあたったズボンをはいて、髪の毛はボサボサで、色白の長身どころか、陽にやけた小男だった。そして秋田訛のガアガア声で、しきりに喋った。

——こんな貧弱な小男に、よくあんな大作ができたもんだ。

と、僕は感心したほどである。

その後、徳永直が僕の家で小林にはじめてあったときも、同じようなことをいい「君は偽物じゃないかい？」

といって大笑いしたことがある。

実際「偽物」のような小林の、なりふりにかまわない様子が、あまり僕の想像と喰いちがっていたので、僕は、わざとらしさを感じたほどだった。

が、それは小林の「わざとらしさで」はなく、真実ありのままの小林だった。約一ケ月の予定で、「東京の作家達」——彼はそういっていた——に逢って帰る筈だった彼が、だんだん帰れなくなって、ずるずるに僕の家に泊っていて、そして僕は彼の「人間性」をハッキリと知ったのだが、小林は猪突的な、正直な——一口でいえば「いい奴」だった。

一ケ月で小樽へ帰る予定が、二月のび三月のびて、六月に僕と一緒に捕まり、翌年に保釈になって出てからも、僕等は成宗の家でよく駄弁ったものだった。

小林は、僕に小樽の話をした。それからお母さんと、姉さんと、弟さんと小さな妹さんの話を——彼は、小樽の街をロシア文学の中に出てくるロシヤの街のようにこの上なく好んで、なつかしがっていたし、お母さん達をこの上なく愛していた。肉身の愛情を知らずそして郷里に対する愛着もさほど感じていない僕には、小林の心情が不思議なくらいだった。

保釈で出獄すると間もなく、小林は同盟の書記長に推された。恰度、プロレタリア文学運動が企業農村に根をおき、コップが結成される頃で歴史的な方向転換が行なわれた一番いそがしい時期だった。そのために小林は、ゆっくりと小説を書く暇もないほど、立ち働いた。いまから考えると、よくやった！と思うほど忙しく、彼は帯に時計とガマロをくるんで、せかせかと始終歩きまわっていた。ピラマキのような下積みの仕事にまで彼は率先して飛び出したものだ。

そういう忙しさは、彼から「小説をノートに書く」習慣を奪った。僕の知っているかぎりでは『オルグ』をノートに書いたきりで、次第に彼は原稿にぶっつけ書きするようになった。そして『沼尻村』などは、夜疲れて帰ってきてから書き、そして驚くべき短時間に仕上げていたようである。

当時彼は時々僕にコボしていた。

「おれは、小説を下書きしないと駄目なんだが……」

そしてゆっくりと下書きのできた小樽の生活を、しきりになつかしがっていた。が、それもホンの一寸である。彼は、個人的な好みや習慣を固執して、そのために階級的な仕事をサボるようなことは、断じてしなかった。仕事に対しては、全く献身的にぶっかって行く男だった。で、地下に潜るまえ頃には、もはや小説の「下書き」のことなどは、おくびにも出さなかった。

一度小樽へ帰したら

小説の「下書き」もできないような状態は、小林の作風をいくらか荒したようである。それは小樽で書いた『三月十五日』や『蟹工船』や『工場細胞』と、最近の作品とを比較すればわかる。

だが、僕はブルジョア批評家のように、それをもって直ちに「小林は悪くなった」とは思わない、むしろ大きな躍進の過程における、一種の「不十分さ」であったと思う。

そして僕は、一友人としてひそかに思っていたのである——小林は、潜って苦労するだろう。が、やがてその苦労が実になって、作品に出てくるだろう！僕はそれを待っていたのに……残念で堪らない。

小林は、東京には住むつもりで出てきたのではなかった。帰るつもりだったのである。それがとうとう「帰れずじまい」になってしまった。

僕は、それで彼を一度小樽へ帰したかった——という気がしてならない。小樽へかえったら彼はきっとノートにゆっくりと、小説を楽しんで下書きしたにちがいない。彼に、そういう暇をやらなかったのは、何だか僕等に罪があるような気がしてならない——これは、僕のような無力な一友人が人知れず吐いた繰言だ、と思ってほしい。

ともあれ、小林多喜二は「死」んだ。

残された仕事は作家小林の歩いた道を、具体的に究明し、彼の如き型の作家を沢山育てることだ。それがプロレタリア文学の当面の大きな任務である。

（三月三日）

そのふた月前の彼

鈴木　信

緑丘人で、小林多喜二に会った最後の者は、恐らく私ではなかったかと思う。

昭和七年の暮のある日曜日（暦を調べれば、正確な日が分かると思うが）新宿駅の地下道で、偶然私は彼と行き逢った。彼の肖像写真に和服姿がよく使われているが、その時の彼も、あれとそっくりの着流し姿であった。その頃彼は、官憲の厳しい追及を受けて地下生活に入っているということは、仄かに私にも伝わっていた。

彼は、樽商と高商を通じての私の一年先輩である。（だから私はかつて彼を呼び捨てにしたことはないがここでは彼を歴史上の人物として、こう呼ぶことを許して頂く）従ってお互い顔を充分知り合ってはいたがしかしそれまで一度も言葉を交わしたことはなかった。在学時代、私は彼を単なる文学青年位に見ていたし彼もまた私を、頭の固い運動選手の一人と思っていたに違いない。

ところが、新宿駅の雑踏のなかで九年振りで顔を合わした時、思わず二人は、どちらからともなく歩み寄って声をかけ合ったのである。私はその後の彼の華々しい文学活動には関心を持つようになっていたし、敬意を払うようにもなっていたが、彼としては、孤独で淋しい緊張した毎日の生活の間に、ふと同郷の後輩に遭遇して、懐しさのあまり危険をも忘れて思わず声をかけたものに違いない。

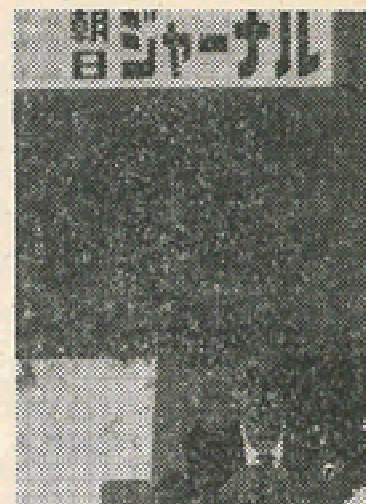
その日は誘われるままに、中村屋の二階でお茶を飲んで別れたが、次の日曜日、彼は牛込の私の家へやってきた。それは暮れも押し詰った寒い日であった。この前会った時、私が、ある農民運動家が獄中で綴った広輸なノートが私の手許にあるが、彼の役に立つことはないだろうかと話したので、それを見るためであった。「そんなにひょこ〳〵出歩いてもよいのか」と私がいうと、「なに大丈夫だ」と彼は笑って答えた。

その時は随分ゆっくりと色々な話をした。しかし彼は運動の話などは少しも口に出さなかった。話題は、小樽での共通の知人の噂さや学校での想い出話ばかりであった。わけても寺田という共通の友人（彼を通じて多喜二は私のことをよく知っていると言った。寺田は、多喜二の思想形成について研究する人には忘れてはならない名前である。彼は大正十五年卒業、昭和十八年に大阪で死んだ）の話は一層二人を隔意のないものにした。彼は本当に楽しそうであった。

こうして寛いだ数時間を過した彼は、日の暮れるのを待って、インバネスの下に、さっきの部厚いノートを抱えて帰って行った。彼が虐殺されたのは、それから二ケ月後のことである。

（大一四）

一九二八・三・一五



第一回普選の興奮がまださめやらぬ春さきの、つむじ風として巻起ったこの「三・一五事件」は、戦前数多い弾圧事件のなかでも、その規模の大きさと、それが社会に与えた影響の深さによって、長くひとびとの記憶にきざまれることになった。

この日、内務・司法両省のかねてからの緊密な連絡のもとに、全国各地の検事局は警官隊を動員して、労働団体・農民団体・無産青年同盟・労農党などの事務所や、ブラックリスト上の人物の寝床を急襲した。中心の東京では、纈纈警視庁特高課長の指揮する検挙隊員が、午前四時、数十台の自動車に分乗して夜明け前の町を疾走し、腕時計の針が五時をさすのを合図に、いっせいにめざすえものに襲いかかった。

「電報電報」「おはよう」「オーイ〇〇君」などと呼起すものあるいは戸をはずして泥靴のまま飛びこんだもの、春の暁は一瞬にして修羅場と化した。留置場に収容しきれぬほど引っぱった警察もあり、検挙者は全国で一六〇〇名にのぼった。そのなかには徳田球一・野坂参三・志賀義雄・杉浦啓一、河田賢治・山本懸蔵・水野成夫・唐沢清八・春日正一らの名前があった。労農党本部・無産者新聞社・日本労働組合評議会・日本農民組合・マルクス書房・産業労働調査所・全日本無産青年同盟本部などの団体事務所は徹底的に家宅捜査され、その後数日間、訪問者は張込中の警官に片っぱしから検挙された。

警察での調べは、猛烈であった。これ以来、日本特高警察の「拷問」が、世界に名をとどろかすことになった。作家小林多喜二は、北海道小樽の実況を、短編『一九二八・三・一五』に書きしるした。

「渡は裸にされると、いきなりものも言わないで、後から竹刀でたたきつけられた。力一杯になぐりつけるので、竹刀がビュッ、ビュッとうなって、その度に先がしのり返った。彼はウン、ウンと、身体の外面に力を出して、それに堪えた。それが三十分も続いた時、彼は床の上へ、火のかざした〝するめ〟のようにひねくりかえっていた。最後の一撃（?）がウムと身体にこたえた。彼は毒を食った犬のように手と足と硬直さして、空へのばした。ブルップルッと、けいれんした。そして次に彼は気を失っていた。

次に渡は裸にされて、爪先と床の間が二、三寸位離れる程度に吊し上げられた。……

渡は、だが、今度のにはこたえた。それは畳屋の使う太い針を身体に刺す。一刺しされる度に、彼は強烈な電気に触れたように、自分の身体が句読点位に ギュン と瞬間縮まる、と思った。彼は吊されている身体をくねらし、くねらし、口をギュッとくいしばり、大声で叫んだ。

『殺せ、殺せーえ、殺せーえ!!』

——『覚えてろ!』それが終りの言葉だった。渡は三度死んだ」

この残酷物語を暴露した小林多喜二自身、のちに地下運動中検挙され数時間後に東京築地警察署で絶命した。「病名」は心臓まひであったが遺族に引渡された死体をみると、かれが小説に書いたよりも、もっとすさまじい拷問を受けたことがあきらかであった。一九三三年（昭八）二月二〇日のことである。

朝日ジャーナル所載（治安維持法の暴威—三・一五事件）

親おもいに泣く

帖佐　猛

　小林多喜二君の『親おもい』であったことは、もう周知のことであるが、それについて、まだ秘められた一コマがあるのでここにご披露したい。

　同君は学校を出てからすぐ北海道拓殖銀行に就職したが、その勤務先は小樽支店為替課であった。この課には比較的永く、次いで調査課に転じた。ここには銀行をやめるまで居ったものの短かったから、初期の労作は多く先の為替課勤務時代のものでないかと私は思う。

　同君のズバ抜けた頭脳明断は、執務の面で敏速・正確となってあらわれ、忙しい窓口事務や記帳でも悠々余暇をつくることが出来たから、こともなげに同僚と話したり、秘かにメモをとる余裕ももったし、おつき合いもした。従って、作品が発表されるたびに多喜二はいつ書くのかなど驚いたものである。

　調査課に転じてからは、窓口に関係ないだけに遣繰り出来る仕事ではあったが、几帳面な彼は担当事務をけっして疎かにしなかった。しかし支店長から見れば次々に作品が発表されるので、仕事を放っている位にしか思えなかったものらしい。支店長の風当りは時に強いものがあったようである。

　しかし、こんな時でも超然とした彼はいささかの動揺もなく、相変らず仕事の合間を見ては、断片的に執筆して居ったのをよく見かけたものである。しかしさすがに、彼も腹の虫が治まらない時もあったと見えて、かの『蟹工船』紙上では支店長の名前を雑夫の名前に借用して居るのは、その時のせめてものウサ晴しではなかったかと思う。微笑ましい限りである。

　そうこうしているうちに、中央公論に『不在地主』が、掲載されて、ここに始めて銀行最高幹部の問題となったのである。激怒した副頭取からは、直ちに支店長に電話がかけられ、即刻の処置を迫って来たのはもちろんであるが、肝心の支店長は案外『燈台もと暗し』であったから、あわてざるを得なかった。結局、銀行では円満な善処を希望し、しかも大事をとって直接の云渡しなどを避けることになって、その交渉のお鉢が色々の事情を考えた揚句小生に廻って来たのである。

　夕刻、ミルクホール『自養軒』で二人だけで懇談した情景を今でもまざまざと目の前に思い浮べることが出来る。

　彼の態度は予期した通り立派なものであったのは当然であるが、その親を想う心の特に篤かったのをその時はじめて知って、感にうたれたものである。対談の中心がもっぱら母親が、この退職を知った時のショック、悲しみをいかにするかに絞られた。多喜二は小生の立場も了承してくれ私もまた同君の気持になって善処することを約して、別れたことを記憶している。

（大一一、室蘭信用金庫常務理事）

日本製粉

本社　東京都中央区京橋三ノ二ノ四
電話　28局（代）2221・5191
工場　横浜・東京・高崎・小山・名古屋
　　　神戸・門司・久留米・小樽

多喜二特集に寄せて

小林多喜二と伊藤整

小野寺　佐（昭一一）

　小林多喜二と伊藤整の学んだ当時の小樽高商は、自由主義者の伴房次郎が校長で後に「学園のルネサンス時代と呼ばれた俳句、短歌、文芸、洋画、音楽、映画、新聞、カトリック研究など学生の文化活動が一斉に花を開いた。卒業論文のテーマも社会問題を扱ったものや、哲学的な傾向を持つものが多くなった。寮舎監の中村賢二郎教授は「男の子が生れたら〝改造〟女の子が生れたら〝デモ子〟（デモクラシーの〝デモ〟）と名づける」といっていた。

　〝改造〟はともかく〝デモ子〟ではと気をもんだ寮生は男の子が生れた時、きいてほっとした、という伝説や美男子の大熊信行教授が、学問上の問題が行きづまり「辞職して映画俳優となる」と宣言して同僚教授にようやくひきとめられたという伝説もあった。

　多喜二は大正十三年卒業して、北海道拓殖銀行小樽支店に勤めた。伊藤は一年おくれてできたての市立中学校の英語の教師になった。二人は妙見川ぞいの喫茶店「越路」？に時々来合わせたが、めったに言葉をかわさなかった。この喫茶店は同じ名前の洋品店の二階にあった。当時はできたばかりで東京風の喫茶店は小樽ではこれだけだった。窓から妙見川のせせらぎが聞こえた。

　その頃、小林は入舟町にあった売春街の女田口タキを救おうとして苦しんだ。非合法活動へ突き進んだのも、それが一つのきっかけだった。

　伊藤は面白半分に売春街を歩き廻っているうち、幼な友達の少女の客をひく声に呼びとめられて心が痛むが、「しかしオレは違う、オレにはしかと分らないにしても未来の生活がある」と思いなおし、詩人としての名声を夢みた。

　多喜二は貧農の家に生れ、伯父のパン工場に住み込んで働き、やっと学校にやってもらえた。潜水夫の空気ポンプを押して金を得たこともあった。社会へのうらみを心にひめて育った魂だった。伊藤は何といっても軍人恩給を持つ典型的なプチブルの出である。

　小林の友人武田暹によると、多喜二は田口タキを自由の身にしたあくる年の大正十五年、母の許しを得て自宅に迎えた。小学校もろくに出ていないタキに女学校程度の教養をほどこそうとした。妻にと心にきめて一緒にくらしながら二人の間は純潔のままだったらしい。だがタキはこの年の十一月、突然家出した。

　その理由を多喜二研究家布野栄一は「彼女と彼との愛に疲れ、尊敬と信頼をよせながら、女としてもっとちがった愛を求めていたのではないか」と想像している。このあたりの事情を当時の伊藤がどの程度知っていたかは解らないが、昭和五年七月こんな短編を書いている。

　左翼青年が妹のダンサーと生活し、妹の稼ぎに頼っている。夜おそく妹が帰ってくると兄は左翼理論を仕こむ、こうすることによって妹を誘惑から守れると信じている。だが、結局妹は家出して男のもとに走る……。伊藤はこの作品に「皮膚の勝利」と題をつけた。伊藤はこの前後「歴史的なひとつの斜面」という論文で、小林が属するプロレタリア文学運動の倫理的正しさを認めながらも、経済機構で人間生活の全部を割切れるとは信じられない。その割切れない部分をえがく仕事が残されているはずだと述べた。この立場はその後もほぼ貫ぬかれている。（「北海道文学散文」より）

　小林多喜二と伊藤整の二大文学者思想家を生んだ母校は今も昔に変らず緑ケ丘の丘上に神秘のなぞを秘めた殿堂と偉容を示めしているらしい。しかしながら、かつての二人のように思想になやみ、詩を愛し、哲学にふけり暗くなった図書館になお名残りを惜しむ学生は少なくなったらしい。

　文学も哲学も最も人気のない講義になってしまったらしい。この偉大なる先輩の遺産を今の学生はどう受取っているのだろうか。小樽には多喜二の像が近く建つときいている。

　一昨年伊藤整先輩来遊の際、酔余に論「小林多喜二」に及んだ際「多喜二の文学を理解する者なくして、多喜二は偶像視され、多喜二も苦笑しているでしょう」と笑っておられた。

多喜二文学と　あの頃の学友達

飯坂久男（昭一二）

われわれが小樽に入学したのが昭和九年、その前年に小林多喜二は獄死している。だから、多喜二文学、その人柄については、いろんな人から話をきき、またその作品も読んでみた。私は同郷の先輩での関係で高商のロシヤ語講師高崎徹先生（小樽新聞記者が本職）に保証人をお願いし、本当にお世話になった。第二寮での寮生活一年で、先生宅に下宿までさせて頂いたが、その居間でロシヤ語、ロシヤ文学、多喜二先輩のことなど、教えてもらったもので ある。

先生は東京外語で蔵原惟人氏と同期だったが、「あの男が左翼になるとは思わなかった。おとなしい男でね」などと言っておられたが、文学理論のうえでは、蔵原氏は多喜二の指導者格であったし、最後まで行動を共にした仲であったわけだ。多喜二の日記の中に「ソヴェト文学をきくため高崎君の家に行く」という言葉があったが、よく遊びにきたらしい。

高崎先生は酒豪だったが、多喜二は二本も飲むと朗かになって面白い話をしていたそうだが、自分の顔は表が裏みたいだと言ったとか、こういう表現は当時ストリンドベリに没入していたことからのものらしいがまた志賀直哉も愛読した。「転形期の人々」の中と思うが、書き出しで段々になって赤土の見える小樽の街の風景があった。それを書く頃でもあろうか、よく着流しで夜おそく街を一人歩きしていたという。ともかく多喜二という人は、いろいろな作家に没入しながら、そこから抜けだし、独自のものを創るといった素直で幅広い探求心、強烈な意志、気魄ある独創力をもった人だったようだ。「将来とも、どこまで伸びるか底知れぬ作家で偉い人物、惜しい男だった」と、いう意味のことを先生が話しておられたのをいまも覚えている。

私はそのころ編纂部に入り、緑丘新聞の編集をしていた。どこにあったか、古い校友会誌を見つけ、ここに掲載されていた多喜二のデビュ前の作品「人を殺す犬」を読んで、学友たちと話したものだ。「これでデビュは決ったようなものだね、読んだあとにガンと胸に迫るものがあるぜ。」当時編纂部と講演部は仲がよかった。緑丘新聞や緑丘という校友会誌の周囲に集っていた人々には、先輩として当時講演部の中心であった、専修大教授大友福夫氏（私は東亜研究所で、お世話になった）北大教授鎌田正三氏、在学中亡くなったが、放胆で個性的な英語劇の立役者笹内清氏、一緒に編輯をした、温厚で信望厚かった小樽の本間誠一氏、同級では、先ず幼名稜君の現社会党代議士岡田春夫君と、おとなで物知りで、いま大阪で税理士をしている森川正明君。

岡田君は大友先輩の次の講演部理事で映画評も書き（ペンネーム丘一路）森川君は詩を書いていた。岡田君は生れながらの政治家で、策を用いても、開放的な明るい性格と愛すべき稚気で親しまれ校内の人気者だった。配属将校がムチを振ったとき抗議の先頭に立ったりした。手塚教授のゼミナールの俊秀で毎日、昼と夜の二食分の弁当をもってきて図書館に閉館まで頑張っていたのは亀田栄蔵君、緑丘誌にマルクスの均衡論を載せたりした。惜しいことに戦死している。ロシヤ文学飜訳と鋭い漫画で傑出し、天才肌の貴公子然たる御仁は福光堅平君で、札幌大教授で詩人の和田徹三先輩の実弟、在学中亡くなったが、必ずや世に出る人物だった。三菱地所人事部副長の梅原音二君、ボルネオ石油の岡島君、合同酒精の国島君らとは編纂部でよく議論したものだ。木下産商の重役、米川辰男君と近作「とられるばかりが能ぢやない」の著者、税理士北篠恒一君らは気骨ある文人でわれわれより後の編纂部出である。

私はあのころの学友の皆が小林多喜二の影響をうけて育ったなどと言いたいのではない。傑物、渡部龍聖先生によって創立され、歴代の名校長、よき師、よき学生によって天下の名門となった小樽は、すでに民主的でよい意味での進歩的な独特の校風をきずいていたが、満州事変後の社会環境の中でも、学友達がこの校風のおかげで将来、どんな人生を歩むにせよ、自由に広く読書し、考え、体験してあの年代に幅広い生き方を学ぼうとしていたことは確かだと言いたいのである。多喜二先輩だって、この過程を経て始めて作家として大成したのではないだろうか。

（若松商高校勤務）

亡き先輩　小林多喜二氏に送る

清水摂三（昭一六後）

古い大先輩に対し無躾きわまるかつ唐突な申し上げ方を許して頂きます。あなたの作品はとこしえに生命を続けていますが、作者であるあなたは、現代の大方の青年にとって（おそらく緑丘学園内においてすら）半ば伝説的な存在になりつつあるのでないかと思えるのです。

大変残念なことですが、私共の感情如何にかかわらず、辿りゆく時の経過というものでしょうか。

それは丁度、あなたに酷い最後を強い国家権力が、間もなく無暴な戦争に突入しやがては、遂に幾多の国民の生命、財産を破壊しつくし「国敗れてはげ山のみ残した」あの悲惨な現実も、戦後生れた若い人々にはいくら説明しても分って貰えぬのと良く似ていると思われるのです。

と同時に過去の暗い陰惨な悲しい出来事も、時がたち追憶される場合には、常に美しい装いで霞の中に覆われ易いものだということも忘れてはなりますまい。

人々があなたの名声にのみ目をうばわれて、生活された時代と、最初には心の、そして終りには生命の苦しみがどのようなものであり、またその社会とあなたとの間がどのようなつながりがあったのかという、むしろ最も大事な点を忘れやすいのではないかと考えています。

青年にとっては伝統に近く、壮年にとっては、日々忘却の彼方に遠のいて行くというのでは、たとえそれが一般的傾向だとしても、私にとって全くやり切れぬことなのです。

これと同じようなことですが「緑丘が小林多喜二というすぐれたプロレタリア作家を生み、蟹工船その他の偉大な作品が残されている」といった式の通俗的な言い方に、満足できないのです。その人の筆がどのような社会的背景の中で活動したのかということと共に、緑丘に当時どんな思潮が流れていたのか。この人は緑丘の伝統や歴史とどういう関係にあるのかも知りたいものです。緑丘から受けつぎ、また育ててあげ残した遺産というべきものがあるのか。あるとするなら、私共を経て今どのような形で残されているのか。そこまで考えてみたいのです。

しかし甚だ残念なことに、近代日本の文化思想史はおろか、母校緑丘のそれすら体型的に把えて表現するには当然のことながら何一つ私には力がありません。ただあなたと同時代の先輩の方々の口から聞き、また評論家の書いたものを読んで、自分の独善的かつ断片的な知識の切れ端をつなぎつつ、考えて行く外はありません。

ただ私共四十代のものは戦争を最もじかに体験した年代でもあり、この四十年間は、「価値の転換」「世界史の激動」ということでは他のどの年代の人よりもある意味では激しく、めまぐるしくゆりうごかされたといいうると思います。

世相の激流に押し流されて漂ってきて、「今なお何処かに行かん」としているような感じですが、社会の歴史の中で、時に人間の意志や期待とは全く相離れた何か別な巨大な力がこの動きを支配しているような思いに落込むことがあります。

しかしながらそれはあくまで錯覚だと信じており、歴史は人間の集団としての社会が、その種々の組合せが、時と場所を変えて緯糸と経糸の如く織りなして、時系列の上で連続しているものだと考えます。

先刻、私は自分達年代の急激な変化ということを申し上げましたが、私の育った周囲の人々を憶い出してみることにします。

私があなたの名前や一部の作品の題名を始めて目にしたのは小学生の頃、父の書棚の或る文学全集の中からでした。しかしパラパラとめくってやたらに××印の多い本だという位で一行すら読みませんでした。

やっと拾い読みながら、「不在地主」を読んだのは中学二年（昭和十年）頃のことかと思います。当時、兄は左翼関係の書物を土蔵の奥深くしまい込んでいましたが、藤森成吉徳永直といった人々の作品集やら、資本論、経済学序説等の中にそれを見つけ、格子戸のアカリの中で読んだのを覚えています。

上級学校進学のときも兄は小樽の受験に快よく賛成してくれましたがそれは兄が卒業生としての「小林多喜二」を、人口論の南亮三郎という名と共に知っていたことがその理由の一つでもあったようでした。

この兄は私と十一才の開きがあり長兄というより親代りになって養育してくれたのであります。

私にとって、大袈裟な表現ですがその頃、思想の芽萌えというものがあったとするならば、その動機は直接にはこの兄によってであり、間接には兄が強く心をひかれたあなたの作品であったと思います。

私が未だ小学校の折、ただ訳もわからず毎日不安な思いにかられたころのことどもを想い起します。急速な資本主義の発達の歪みからの深刻な経済恐慌、それから派生する救いようのない失業と貧困、農村のどん底の疲弊、小作争議、ストライキ、騒然たる社会事象だったのでしょう（私には不景気の波の中で、かなりの間家計の切盛りが苦しく緊縮と節約を家中強いられたことがはっきり記憶に残っているだけですが）

この頃、社会主義感の最も強い青年時代の故もあって、兄がその多くの友人と共にこの渦中に飛込んで行ったのも当然のことだと思われるのです。

彼もまた随分と手荒い仕打を官憲から受けたようでしたが、このことについては当時私はあまりに幼かったでしょうが然し、それより後にも直接にそうした思想や社会に対する批判は私に対したことはありませんでした。

時代も少し移り、満州事変の勃発等もあり少なくとも表面的には様相が変っていたからかも知れません。然し社会に対する心の窓は、私にとって緑丘に学ぶに至って、知識欲が媒介となって急速に展けてきたのであります。

ロバートオーエンから、またヘーゲルからマルクスへと手許のみ明るく照らすあの図書館の暗いしじまの中で心を躍らせた夜も幾度かありました。

手塚教授の理論に感激し、一方では「ゴットル」を噛ってもみたのでした。

昭和十六年卒業とともに戦線へ。ここで、全体主義の理論的武装は一遍で打飛ばされ、真空地帯の中で思想は一時重荷にさえならざるをえなかったのであります。

ポツダム宣言の受諾。日本の無条件降伏とそれから今日に至る諸々の社会の動きと私の心の変遷はもう申し上げますまい。

最後に首尾一貫しないながら私の精一杯表現できる範囲内でのまとめを申し上げます。

あなたがどういう社会的背景の中で生きられ、労作を成就されたかを良く理解したいといいました。

古い作品を現代において熟読玩味するとき、その作品の生れた時代から現代までの過程を、脳裏に画きながら読むという態度、いい換えれば矛盾の中に統一され来っている歴史的現実―従ってまた将来に向って動いている―の中で読むという態度が正しいと思うからなのです。

この時系列を無視し、過去とかあるいは現在に限定して読むことは、意味がない処か、時として大きな過ちを冒すのではないでしょうか。

あなたの信念とされた主義を今日受けつぐ人々の間に、歴史的見方を

尊重すべき流派であるのに、意外に頑なな公式的論理と教条主義が多く残されているのに驚きます。

そこでは意見の相違はマルクスレーニン主義に反するという名分の下に一刀両断され追放されるのでしょうが、これこそ非科学的であり、かつての中世における教会の地動説者の取扱と殆んど変らぬものであろうかとさえ思われます。

あなたの「蟹工船」における悲惨な内容が今日絶無でないにしても、殆んど消滅しつつある事実は正しく把えねばならないと考えます。民主主義の鈍足は、鈍足を責めるよりもその確実な足取りを評価すべきでありましょう。

あなたの作品にうかがえるヒューマニズムは、あなたをふくめて、今は亡き多くの人々から私達若い世代まで続く絶間なき社会向上の努力の中に共通意識として流れねばならぬものであるしまた流れていると確信しております。そしてこれを成就して行く過程で大事なことは「全体の為に」という側面とともに、個々人が個を確立するということでないでしょうか。

国家の為に死ぬとか、革命の尖兵になる言葉の幻影に惑わされないで個を確立し、個人々々が全体として生きるまでと個人として生きる道を苦斗しながら追求することをおいて社会と個人の本当の幸はありえないと考えるものです。

こうした心の遍歴は個人の実在の投影ともいうべき貴重なものでないでしょうか。然も歴史家によって応々にして誤り伝えられ、時の努力によってゆがめられる国家の歴史等に比し何の掛値も水増しもないという意味合で。

（不二製油㈱総務部長代理）

小林多喜二を思う

大島　晃（昭一九）

私が小樽の学校にいっていたのは昭和十八年頃であり、大東亜戦争中であったので小林多喜二の本など本屋にはなかった。どこかで見つけてきても、大っぴらに読める時代ではなかった。伏字のない「蟹工船」「党生活者」を読んだのは終戦後間もなくであり、彼の写実に強烈な印象を受けたのはそのころである。

○

学校にいっていた頃のある夏だと思うが、友人と朝里に海水浴に行ったことがあった。小樽築港からぶらぶら歩いて行った時、友人が「あそこに見えるのが小林多喜二のお姉さんの家だよ」と教えてくれたことがあった。そこに小林多喜二のデスマスクが置いてあるということも、その時の友人の話で知った。

○

最近伊藤整の「若い詩人の肖像」を読んだら、その中に小林多喜二のことがいろいろ書かれていたが、小樽の妙見川の角にあった「越路」という名前がなつかしかった。私はしばらく小樽の町をはなれていた時代があったので、いつからこの「越路」という喫茶店がなくなったのかはっきりした記憶はないが、小さい時に叔父と一緒に「越路」に入ったことを覚えている。

一階が洋品店になっていて、モダンなセーターとかネクタイなどウインドウに飾られていた。川下に向って左側にやや急な階段が二階に通じていて細長かったが、かなり広い面積がこの喫茶店にあてられていた。奥まったところに一尺くらい高くなっている広間があった。叔父と私はその奥まった隅に席をとったのである。今でもその時の部屋の様子が、ありありと思い出される。テーブルその他の装飾品は古色蒼然としていたが、コーヒーの真白いカップのそばに置かれていた銀色の匙が、窓からの逆光線にキラキラ輝いていたのを。「若き詩人の肖像」の中で伊藤整は次のように書いている。

「或る日私は越路の二階で河原直一郎に逢った。河原は階段を上ってすぐ右側の二人向い合える席にいた。その時向うの道路に面した窓のそばのテーブルに三、四人の青年が座っており、窓に背を向けてこちらを見ているのが、小林だと私は気がついた。彼は「やあ」と言って私に声をかけた。私はそれに答えてから河原の前に座って話していると、小林は立ってきて私のそばでしばらく立ち話をした。私が詩集を出したことを彼が知っていてそれを話題にしたのだったと思う。」

この小説の中で書かれている時代は昭和二年頃であり、私が小さい時叔父と一緒にこの喫茶店に入ったのが昭和七年頃でなかったかと思う。小林多喜二が座っていたテーブルの席が、一尺くらい高くなった奥の席で叔父と一緒にすわった同じテーブルの席であったかも知れない。私はこの小説を読んだ時、小林多喜二がぐっと身近かに感じられた。

○

手塚英孝の年譜によると、小林多喜二は大正十三年三月に小樽高商を卒業、同年北海道拓殖銀行小樽支店に勤めた。在学中から小説をかきはじめ銀行に勤めながら同人雑誌「クラルテ」を発行した。「不在地主」の発表が直接の理由となって彼は銀行を追われ、昭和五年三月末小樽から東京に移り、その年の六月に、関西地方の戦旗防衛講演から帰京後まもなく治安維持法で逮捕、起訴され、昭和六年一月末まで豊多摩刑務所に投獄された。その年の七月彼は作家同盟の書記長にえらばれ十月には非合法の共産党に入党した。そして昭和八年二月二十日非合法の街頭連絡中に逮捕され築地警察署で虐殺された。

「蟹工船」は昭和三年十月から昭和四年三月にかけて完成され、芸術運動の機関紙「戦旗」の五・六月号で発表された。この作品は作者の名声を高めたばかりでなく、日本のプロレタリヤ文学を世界的なものにした。

「党生活者」は昭和七年八月、非合法活動中に書かれたものであり、プロレタリヤ文学の最盛期をかざる作品である。

○

私は小林多喜二文学の本質は決して社会主義的プロレタリヤートは党の文学の原則を打ち立てなければならないというレーニン主義から出発した訳ではないと思う。彼が学生時代から心酔していた志賀直哉から彼にあてた手紙の中に次のような文章がある。

「プロレタリヤ芸術の理論は何にも知りませんが、イデオロギーを意識的に持つことは如何なる意味でも弱くなり悪いと思います。作家の血となり、肉となったものが、自然に作品の中で主張する場合はとも角何かある考えが作品の中で主張することは、芸術として困難なことでよくないことだと思います。運動の意識から全く独立したプロレタリヤ芸術が本当のプロレタリヤ芸術で、その方が結果からいっても強い働きをするように私は考えます」と。これは文学というものは、あくまでも芸術であって、政治の手段でないということであろう。小林多喜二の文学の根底には、この精神が流れていると思う。小林が歩んだ文学の道は労働運動から出発したものではなかったが、学校を卒業して拓銀に入ってからまもなく実際の労働運動に入っていったことも事実である。

何が動機でこの世界に入っていったかは知るよしもないが、伊藤整の説によれば彼は昭和元年「クラルテ」を廃刊にする頃までに売笑の巷にいる女性に近づいていて、それを救おうとして苦しんだようである。その問題を解決できないことと文学的野心とが、彼を実際運動の世界にまたプロレタリヤ文学の世界に駆り立てたらしい。然し私の推測ではむこう気の強い小林が、この世界に飛びこんでいったのは真実を書きたかったからではないだろうかと思う。

その当時のプロレタリヤ文学が政活的権力の弾圧下に、社会的な真実を追求するということは容易なことではなかった。政治的権力のために表現の自由を失なうということは、それ自体作家精神の死滅であると思う。彼はこの真実の追求のために若き生命を賭けたような気がしてならない。

弥勒面

宮地邦介（大一一）

写真の仏面は私の緑丘同期、今野吉之助氏（北海道食糧協同組合連合会長）の作です。十年前医師より高血圧のため死期近きを宣せられた同氏が一念発起、仏面の彫刻に魂を打ち込み、作意動けば、夜中といえでもノミを持ち、知人より乞わるるままに製作を続け、余技とはいえぬ入神の作品すでに百面を凌ぐとのこと、その幾十面は、一両年前、北海道知事町村氏の主催で開眼式が行なわれたと聞いております。

私も亡息禎介（昭和二十四年二月二十三日死亡）の冥福を祈る情、切なるあまり、昨年暮近く同氏に乞うて一面の製作を依頼しましたが、越えて本年二月十二日道産の名木で彫なれた弥勒面が届けられましたが、写真で見られる通り、慈悲の仏心が美しく具象化され、拝しておりますと自から心温まる思いが致します。

次いで同氏から次のような御手紙を頂戴しました。すなわち

「…………実は今年正月に入ってから身体の具合が悪かったのですが、御子息の命日が二月二十三日と承知しておりましたので、どうせ作るなら、それに間に合うようにと頑張って見たわけですが、できあがるや否や医師から入院を命ぜられ、二月八日入院、荷造りは病院でして御送りしたような次第です。でも入院前に出来上ったことは幸だったと思っています。……ただ私としては御子息御供養の儀に間に合ってくれれば満足です」

とありました。いまさらながら友情の有難さが身にシミジミと感ぜられ、亡息も定めし感謝していることでしょう。近いうちに奈良二月堂に参詣、開眼式を御願いするつもりです。

右の次第で今野氏の御病気平癒を心からお祈りしております。

それにつけても、本誌の小林多喜二記念号の発刊に当り、蟇目さんから多喜二の命日が、二月二十日と聞き、亡息と同じ二月が命日というのも奇しき縁とも考えられ、さらに月刊「おたる」誌上学友越崎兄のものした多喜二抄を拝見したが、よしやイデオロギーの相違はあるにしても若き日の多喜二の詩「秋の夜の星」を通し彼が人の子としての純真さも偲ばれ、誤まられて惨殺の憂き目に遭った彼の真情を思う時、この記念号に仏面のことども書きつらねることも敢えて意味なきことでもないでしょう。この拙文が彼の冥福を祈る一片ともなれば幸です。

伊藤整著

「若い詩人の肖像」から

＝詩人たちとの出合い＝

小林はこの頃左翼活動をしているそうだが、銀行員としてはなかなか有能なので、銀行の方でも首を切れないでいる。という噂であった。それを誰から聞いたのか私は思い出せないが、あるいは河原直一郎から聞いたのではないかと思う。それとも※湊静男氏という、小林や私の後輩で、私の村の出で高商を出てから拓殖銀行の向い側の第一銀行に勤めていた友人であったかも知れない。

※現、緑丘会神戸支部長（神戸製鋼常務取締役）

小林多喜二年譜

▽明治三十六年（一九〇三）
十月十三日、（戸籍面では十二月一日）、秋田県北秋田郡下川沿村川口一七（現・大館市川口）に、父末松、母すきの二男として生れた。
一家は貧しい農家で、農閑期に父母は土工のトロッコ押しに出かけたりしていた。母は日雇の娘であった。多喜郎、ちまの二人の兄姉があったが、兄は早逝した。
▽明治四十年（一九〇七）四才
一月、妹つぎ誕生。
十二月、小作料や借金を払うことができず、小樽市新富町五一の伯父小林慶義のすすめで一家は北海道に移住した。
▽明治四十一年（一九〇八）五才
一月、小樽市若竹町に住所を定め、両親は伯父の経営していた三星パン店の支店を開き、五月から数年にわたる小樽港の築港工事が若竹町を中心に着手されその土工部屋をまわってパンを売り歩いた。
▽明治四十二年（一九〇九）六才
十二月、弟三吾、誕生。
▽明治四十三年（一九一〇）七才
四月、潮見台小学校に入学。港湾労働者や小商人の子供達の通う小学校であった。
▽大正五年（一九一六）十三才
三月、六年間無欠席で潮見台小学校を卒業。
四月、伯父慶義の補助をうけて北海道庁立小樽商業学校に入学。新富町の伯父の家に住みこみ、パン工場の手伝いをしながら通学した。
七月、妹幸、誕生。
▽大正七年（一九一八）十五才
入学後まもなく知り合った**島田正策**、**片岡亮一**、**高橋次郎**ら数人と学内サークルをつくり、水彩画を描きはじめた。
▽大正八年（一九一九）十六才
この頃から詩、短歌、小品等を書きはじめる。校友会誌「樽商」の編集員になる。
十一月、絵のサークルを小羊画会とし、稲穂町、中央倶楽部にて第一回洋画展覧会をひらいた。木下鳳一郎、**片岡亮一**、小野貞一、**小林多喜二**、灰野文一郎、斎藤次郎、**高桑市郎**、浜本為一郎、島田正策などが出品。灰野、高桑、浜本の三人が油絵、その他は全部水彩画で、多喜二も六点出品した。展覧会後、有幌町の**高桑**の家を研究所にして活動をつづけた。
▽大正九年（一九二〇）十七才
四月、**島田正策**、**蒔田栄一**、**片岡亮一**、斎藤次郎、灰野文一郎等と回覧雑誌「素描」を創刊（十二月、七号まで）。
五月、「文章世界」「中央文学」に詩を投稿。小羊画会の第二回展覧会に水彩画を出品。
九月、小羊画会を改名した白洋画会に水彩画を出品。その直後、伯父に絵をやめさせられた。次第に小説に力を注ぐようになり、短編「晩春の新開地」その他の習作がある。
▽大正十年（一九二一）十八才
三月、小樽商業学校を卒業。
四月、伯父の補助をうけて**小樽高等商業学校**（現・小樽商科大学）に入学。同校は、当時のデモクラティックな思潮をうけて、比較的自由主義的な学風があった。若竹町一八の自宅より通学。習作の原稿をミシンでつづり「生まれ生づる子ら」という表題をつけ、回覧して友人の批評を求めた。志賀直哉の文学を学びはじめた。
▽大正十一年（一九二二）十九才
四月、高商校友会誌の編集委員にえらばれた。山田清三郎編集「小説倶楽部」「新興文学」へ短編を投稿。
この年、校友会誌に小説、バルビュスの翻訳を発表。高商の教師大熊信行を知った。
▽大正十二年（一九二三）二十才
一月「健」を「新興文学」に発表。
七月「藪入り」を「新興文学」に発表。
十一月、高商の関東震災義捐外国語劇大会**フランス語劇**「青い鳥」（メーテルリンク）に出演。
この年「継祖母のこと」「ロクの恋物語」を校友会誌に発表。
▽大正十三年（一九二四）二十一才
卒業論文はストリンドベルヒの研究を選んだが、純文学という理由で教授に反対され、失業問題を主題にしたアルフレッド・スートロの戯曲「見捨てられた人」とクロポトキンの「パンの征服」の一章「食物」の訳文に「自己の態度と覚書、二つの訳文に対する附言」という自序をつけた。
三月、**小樽高商を卒業**。**北海道拓殖銀行小樽支店為替課**に勤める。
四月、同人雑誌「クラルテ」創刊。その編集責任者になる。
十月頃、小料理屋ののろわれた生活から逃れようとしていた酌婦**田口たき**を知った。
▽大正十四年（一九二五）二十二才
三月、上京して東京商科大学（現・一橋大学）の入学試験をうけ不合格。
四月、銀行員の安易になりがちな生活態度を反省し、ノートの原稿帳をつくって刻苦の努力をはじめた。
（同月、治安維持法制定。八月、小樽総労働組合創立。十月、小樽高商軍教反対斗争）。
十二月、年末賞与と借金をもって田口たきを救い出した。プロレタリア文芸連盟結成。
▽大正十五年、昭和元年（一九二六）二十三才
三月、「師走」を「**クラルテ**」（第五集、終刊号）に発表。
四月、田口たきを若竹町の自宅に住まわせた。
七月「龍介の経験」を「極光」に発表。
十一月、田口たきが家出し、自活の道をとった。
この年、葉山嘉樹の「淫売婦」に感銘を受け、また高畠素之の「マルクス十二講」を読んだ。
▽昭和二年（一九二七）二十四才
マルクス・レーニン主義の著書をこの頃から読みはじめる。
三月、磯野小作争議を応援。
六月、労農芸術家連盟が結成され小樽支部の幹事になる。
七月、小樽港湾労働者の大争議に参加。
八月、長篇「その出発を出発した女」（未完）の中篇の稿を終える。
九月「最後のもの」を郷里基という署名で「創作月刊」に投稿（翌年の二月号に発表）。戯曲「女囚徒」を「文芸戦線」十月号に発表。
十一月、労農芸術家連盟が分裂して前衛芸術家同盟を結成したときこれに参加。また、この年の九月頃から古川友一、**高崎徹**等の社会科学研究会に加わり、小樽の労働団体との関係も次第にふかまるようになった。
十一月、「**防雪林**」を書きはじめる。
▽昭和三年（一九二八）二十五才
二月、普選法最初の国会選挙がおこなわれる。労農党候補、山本懸蔵を応援して東倶知安方面の演説隊に加わった。
三月、「滝子其他」を書く。三・一五事件、その直後の二十五日、全日本無産者芸術連盟（ナップ）が結成され、小樽支部をつくり幹部になる。
四月「防雪林」を脱稿。
五月、上京して蔵原惟人にはじめて会う。ナップ機関誌「戦旗」創刊。
七月、銀行の為替課から調査課にかわる。
八月、「**一九二八年三月十五日**」を脱稿、「戦旗」十、十一月号に発表。
九月、「**東倶知安行**」を書く。
▽昭和四年（一九二九）二十六才
二月、日本プロレタリア作家同盟創立、中央委員に選ばれる。同小樽支部準備会をつくる。この前後には小樽海員組合関係の海上生活者新聞の編集に加わり文芸欄を担当する。
三月、「**蟹工船**」を脱稿、「戦旗」五、六月号に発表。四・一六事件で検束される。六月から八月の間、全小樽労働組合の再組織に参加。
九月、「**不在地主**」を脱稿、「中央公論」十一月号に発表。
十一月、「暴風警戒報」を書く。
「不在地主」の発表が直接の理由となって拓殖銀行を解雇された。
▽昭和五年（一九三〇）二十七才
一月、「救援ニュースNo.18付録」「同志田口の感傷」を執筆。
二月、「工場細胞」を脱稿。
三月末、上京して中野区上野町に住む。
四月、作家同盟の二回大会に出席、五月下旬から江口渙、**中野重治**、貴司山治、大宅壮一、片岡鉄兵らと、「戦旗」防衛講演のために京都、大阪、松阪をめぐり、大阪で逮捕され、六月中旬、帰京して杉並区成宗**立野信之**方に寄寓したが、同月下旬ふたたび逮捕される。治安維持法違反（共産党へ資金提供）により起訴、八月下旬、豊多摩刑務所に収容された。のち不敬罪（蟹工船）による追起訴をうける。
七月、新築地劇団は「蟹工船」を帝国劇場で上演。
十月、東京左翼劇場は「不在地主」を市村座で上演。
▽昭和六年（一九三一）二十八才
一月下旬、保釈出獄、杉並区成宗に下宿。
二月、プロフィンテル五回大会に出席した蔵原惟人帰国。
四月、「オルグ」を書き「壁に貼られた写真」を執筆。
五月、作家同盟三回大会で中央委員に選ばれた。
六月、「独房」「テガミ」を執筆。
七月、作家同盟四回臨時大会で中央委員、書記長に選ばれる。この頃杉並区馬橋に一戸を借りて母と弟と暮らす。
八月―十月末、「安子」を執筆、この頃日本共産党に入党して作家同盟党グループ員になり、蔵原惟人の提唱する日本プロレタリア文化連盟（コップ）の結成、同盟再組織の仕事に働き、十月末、コップ結成のとき中央協議員におされ、のち主に芸術協議会のため働く。長篇「転形期の人々」を「ナップ」十月号から連載しはじめる。国際革命作家機関誌「世界革命文学」の各国版に「一九二八年三月十五日」が訳載される。
▽昭和七年（一九三二）二十九才
一月、「失業貨車」を執筆。
二月、作家同盟は国際革命作家同盟（モルプ）に加入した。
三月、「沼尻村」を書く。
四月下旬から文化団体への弾圧がはじまり、多くの指導幹部が逮捕される。逮捕をのがれ、作家同盟五回大会報告を執筆。この頃奈良に志賀直哉を訪ね帰京後非合法生活に入り、同じく非合法活動中の宮本顕治等と文化運動の再建のために働く。四月下旬、伊藤ふじ子と結婚、麻布区東町に住む。
八月、「党生活者」を書く。
九月、下旬同区桜田町に一戸を借りて移る。
十二月、渋谷区羽沢町に移る。この間、文化団体党グループの責任者になり、文化、文学運動の発展に努力し、内部の敗北的見解にたいしはげしい論争を展開、伊東継、堀英之助の署名で多くの論文を書く。
▽昭和八年（一九三三）三十才
一月、「地区の人々」を書く。
二月二十日、港区福吉町付近で街頭連絡中を今村恒夫とともに築地署特高課員に逮捕され、同日夕刻、同署内で警視庁特高課員の**拷問により殺される**。
検察当局は死因を心臓マヒと発表、死体の解剖を妨害して死因の究明を妨げ、二十二日の通夜、二十三日の告別式の参会者を総検束し、杉並区堀之内の火葬場まで警戒をとかなかった。のち小樽市奥沢共同墓地に埋葬された。
三月十五日、築地小劇場で全国的な労農葬が挙行、魯迅をはじめ海外からも多数の弔電がよせられた。
「赤旗」「大衆の友」「文学新聞」「プロレタリア文化」「プロレタリア文学」等は追悼と抗議の特集号を発行した。「**地区の人々**」が「改造」に掲載された。
四月、「転換期時代（前編）」（後に原題通り「党生活者」となる）が「中央公論」（四月、五月）に掲載されたが、六百三十九カ所の削除が行なわれ判読が困難であった。しかし削除のない校正刷りが分散して保存されたため、後日の復元が可能となった。論文集「日和見主義に対する斗争」が日本プロレタリア文化連盟より刊行された。
五月、「地区の人々」が改造社より「転形期の人々」が国際書院より刊行された。
（三月、築地小劇場で新築地劇団による追悼公演「沼尻村」上演）。

【この年譜は小野寺佐、野沢正一両氏（昭一一）の提供による】

小林多喜二著作目録

作品名	発表刊行年月	年令	発表の機関誌・雑誌・発行所名
回覧雑誌　素描	大正9年4月	17才	島田正策、蒔田栄一、片岡亮一、斎藤次郎、灰野文一郎等と創刊同年12月第7号まで続刊（小樽商業学校時代）
小説　晩春の新開地	大正10年3月	18才	小樽商業学校機関誌「樽商」に発表、同月小樽商業学校卒、小樽高等商業学校に進学
翻訳小説　バルビュス	大正11年〇〇	19才	小樽高商の校友会誌に発表
小説　兄	大正11年12日	19才	雑誌「小説倶楽部」に懸賞当選作として掲載
健	大正12年1月	20才	「新興文学」に発表
藪入	大正12年7月	20才	「新興文学」に発表
継祖母のこと	大正12年〇〇	20才	小樽高商の校友会誌に発表
ロクの恋物語	大正12年〇〇	20才	小樽高商の校友会誌に発表
同人雑誌　クラルテ	大正13年4月	21才	創刊す
暴風雨もよい	〃	21才	「クラルテ」創刊号に発表
駄菓子屋	大正13年7月	21才	「クラルテ」7月号に発表
彼の経験	大正14年2月	22才	「クラルテ」に発表
師走	大正15年3月	23才	「クラルテ」第五集終刊号に発表
竜介の経験	大正15年7月	23才	「極光」に発表
人を殺す犬	昭和2年3月	24才	後に改作して「監獄部屋」となる、小樽高商校友会誌に発表
田口の「姉との記憶」	昭和2年6月	24才	「北方文芸」に発表
残されるもの	昭和2年10月	24才	「北方文芸」に発表
戯曲　女囚徒	〃	24才	「文芸戦線」に発表
滝子其他	昭和3年4月	25才	「創作月刊」に発表
防雪林	〃	25才	脱稿—発表は昭和22年「社会評論」
誰かに宛てた手紙	昭和3年8月	25才	「北方文芸」に発表
蟹工船	昭和3年10月	25才	執筆を開始する
一九二八年三月十五日	昭和3年11月	25才	「戦旗」十一月、十二月に発表
蟹工船	昭和4年5月	26才	「戦旗」五月、六月に発表
評論「プロレタリア文学の大衆性と大衆化について」	昭和4年7月	26才	「中央公論」に発表
『蟹工船』	昭和4年9月	26才	「日本プロレタリア作家双書」として戦旗社より刊行
不在地主	昭和4年11月	26才	「中央公論」に発表
評論「プロレタリア文学の方向に就いて」	和和5年1月	27才	「読売新聞」に発表
『不在地主』	昭和5年1月	27才	「日本プロレタリア傑作選集」として日本評論社より刊行
暴風警戒報	昭和5年2月	27才	「新潮」に発表
救援ニュースNo. 18付録	〃	27才	「誰かに宛てた手紙」の改作「戦旗」に発表
同志田口の感傷	昭和5年4月	27才	「週刊朝日」に発表
工場細胞	〃	27才	「改造」四月—六月に発表
中国語訳『蟹工船』	〃	27才	「潘念之訳」にて上海大江書舗より刊行
評論「プロレタリア・レアリズムと形式」	昭和5年6月	27才	「プロレタリア文学」に発表
市民のために！	昭和5年7月	27才	「文芸春秋」に発表
『工場細胞』	〃	27才	戦旗社より刊行
東倶知安行	昭和5年12月	27才	「改造」に発表
評論「わが方針書」	昭和6年3月	28才	「読売新聞」に発表
『東倶知安行』	〃	28才	「新鋭文学双書」として改造社より刊行
オルグ	昭和6年5月	28才	「改造」に発表
壁にはられた写真	〃	28才	全日本無産者芸術団体協議会機関誌「ナップ」に発表
文芸時評	〃	28才	「中央公論」に発表
プロレタリアの修身	昭和6年7月	28才	「戦旗」六、七月合併号に発表
独房	〃	28才	「中央公論」に発表
『オルグ』	〃	28才	戦旗社より刊行
テガミ	昭和6年8月	28才	「中央公論」に発表
新女性気質	昭和6年8月	28才	後に「安子」と改題、「都新聞」に連載（十月完結）
争われない事実	昭和6年9月	28才	「戦旗」に発表
文芸時評	〃	28才	「東京朝日新聞」に発表
転形期の人々	昭和6年10月	28才	「ナップ」十月、十一月及び「プロレタリア文学」の昭和7年一—四月に連載したが序編にて中絶
母たち	昭和6年11月	28才	「改造」に発表
疵	〃	28才	「帝国大学新聞」に発表
「一九二八年三月十五日」	昭和6年中	28才	国際革命作家同盟の機関誌「世界革命文学」の各国版に訳載された
失業貨車	昭和7年3月	29才	「若草」に発表
沼尻村	昭和7年4月	29才	「改造」四、五月に当表
評論「文学の党派派性確立のために」	〃	29才	「新潮」に発表
党生活者	昭和7年8月	29才	脱稿
『沼尻村』	〃	29才	作家同盟出版部より刊行
評論「右翼的偏向の諸問題」	昭和7年12月	29才	堀英之助の筆名で「プロレタリア文学」十二月、昭和八年一月及び「プロレタリア文化」八年四月に発表
露語訳『蟹工船』	昭和7年〇〇	29才	モップル出版所より刊行
	（昭和8年2月	30才	東京築地署にて死亡）
地区の人々	昭和8年3月	死後	「改造」に掲載
転換時代前篇（後に原題通り「党生活者」となる）	昭和8年4月	死後	「中央公論」四、五月に掲載
論文集『日和見主義に対する斗争』	昭和8年4月	死後	日本プロレタリア文化同盟より出版
『地区の人々』	昭和8年5月	死後	「改造社」より刊行
『転形期の人々』	〃	死後	「国際書院」より刊行

注＝『 』は単行本として発行されたもの

全集本

小林多喜二全集　ナウカ社　全五冊　昭和11年
小林多喜二文庫　新興出版社　全二冊　昭和22年
小林多喜二全集　日本評論社　全九冊　昭和23年（全十一巻完結予定のところ都合により中絶す）
小林多喜二作品集　創元社　全三冊　昭和28年
小林多喜二全集　冨士出版　全九冊　昭和27年
小林多喜二全集　青木書店（青木文庫版）　全十二冊　昭和29年
小林多喜二全集　青木書店　全五冊　昭和34年

≪小林多喜二参考文献≫

単行本

江口渙「作家小林多喜二の死」（書房ロオゴス　昭和二一・二）
蔵原惟人・中野重治編「小林多喜二研究」（解放社　昭和二三・八）
小田切秀雄「小林多喜二」（新日本文学会　昭和二五・二）
蔵原惟人「小林多喜二と宮本百合子」（河出書房　昭和二八・三）
宮本顕治「批判者の批判」上下（新科学社　昭和二八・一・一二）
多喜二・百合子研究会編「年刊多喜二・百合子研究」(1)・(2)（河出書房　昭和二九・四・三〇）
手塚英孝編「小林多喜二」（日本文学アルバム」（筑摩書房　昭和三〇・四）
多喜二・百合子研究会編「小林多喜二読本」（三一書房　昭和三三・九）
橋爪健「虐殺多喜二」（新潮社　昭和三七）
手塚英孝「小林多喜二」（改訂版）（新日本出版社　昭和三八・二）
（平本英夫氏調査提供による）

技術革新に貢献する
MARUKA
丸嘉機械株式会社
大阪（本社）・東京・名古屋・岡山・広島・姫路・仙台

学校法人野又学園設置
商学部商学科二〇〇名
昭和四十年四月開学

（新設）

函館大学（四年制）

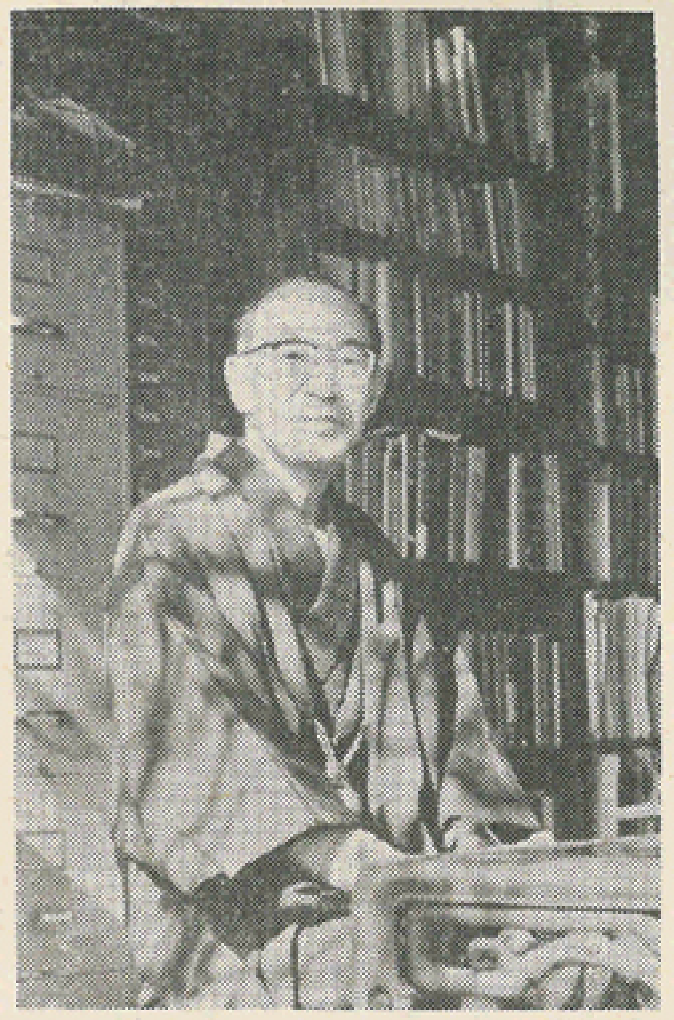
願書締切　四月十日
入学試験　四月十五日

理事長兼学長　野又貞夫（大十二卒）

併設校
函館短期大学（栄養科）
函館有斗高等学校（普・商・工化）
函館女子商業高等学校（商・普）
函館保母専門学院

僕の書斉

板垣与一（昭4）
（一橋大学教授）



　正直なところ、現在の僕は書斉らしい書斉を残念ながらもっていない。停年退職金で前庭の一隅に書庫のある気の利いた書斉一棟を新築し、そこで能率的な勉強をしたいというのが僕の夢である。この夢について語るのは、いまは適当ではない。

　写真で御覧の通り、いかにも書斉らしく見えるが、実際は書庫になり果てた書斉なのだ。僅か十畳の広さしかない洋室でも、建てた当時はもちろん書斉として設計された。西側と北側は天井まで書棚をはめこみ、スマートな洋机と廻転椅子を東窓の位置におき、南向きの陽の当たるところに一対の来客用応接セットをおいて、多少くつろいだ雰囲気をただよわせた書斉だった。それが間もなく、本がふえるに従って、部屋のなかに本棚が一本、二本と立ちならび東窓の雨戸も締め切って本棚をならべ、ついに現在では十三本！　本棚と本棚との狭い空間を、身体を斜めにしながら、蟹の横這えよろしく本探しをする始末となってしまった。洋机、廻転椅子、応接セットはいつの間にやら地下倉庫に投げこまれ、小さな和机一つの前にようやく坐る程度の空間しか残されていない。手紙を書いたり、講義の下調べをするぐらいがせいぜいで、ここはもはや僕の仕事場ではなくなってしまった。別に四畳半の小さい書庫はあるが、これは最初から飽和状態。廊下にも本棚が八本ならんでいる。家族の者は廊下は一方交通と呼んでいる。国立の大学研究室も本や雑誌で一ぱい。一体本が何冊あるのか、数えたことがないので答えられない。しかし自分の読みたい本を探し出すとき、どこの棚にあるかは大体見当がついているから不思議なものだ。

　僕の蔵書の中心は何といってもアジア関係の本である。この方面の本を集めだしてからもう二十五年になる。戦前インドネシアで集めた約千百冊のオランダ語の本を、終戦時の空襲で焼失したので、誇示しうるものはない。戦後東南アジア諸国を半年歩いて現地で集めた本が約千五百点ある。これが唯一の特色といえようか。数は少ないがマキアヴェリやフリードリッヒ・リストやナショナリズムに関する文献もやや揃っている。戦前の蒐書は哲学、社会学、経済学関係が中心だったが、皆焼失したので、それはあきらめ、現在は政治学や国際経済関係が中心となっている。

　書物を読んだり論文を書いたりする本当の意味での仕事場としての僕の書斉は、実は伊豆の伊東の良東泉という僕の知合いの小さな旅館の二階の一室（六畳間）である。戦後の僕の著作や論文はすべてここで書かれた。この小文もここで書いている。結構な身分と羨やまれるかも知れないが、実は宿料の支払いは停年退職まで据置きになっているのだ。必要な本は昔は学生がリュックサックで運んでくれた。一時多いときは五百冊を超えた。いまでも三百くらい側にある。宿料を支払い、自宅の庭の一隅に書庫つき書斉を新築するほどの退職金がもらえるのかどうか頗るあやしいけれども、それを唯一の頼みにして、余暇さえあれば、東京駅発伊東行き最終電車で滑りこんでいる。

次回は昭和十三年卒室谷邦雄氏の登場です。

普通倉庫業
東罐倉庫株式会社
取締役会長　佐藤栄治（大14）
取締役社長　堂城不二人（昭2）
（本　社）　大阪市北区中之島5の17　電話大阪(44)3151(代)
（支　店）　大阪市　茨木市　青森市
（営業所）　東京都

韓国紀行

大平善梧（一橋大学教授）

二月十七日、ノースウェスタン機にて韓国に向い、五日間滞在して日韓両国間の文化親善の旅をなした。招待先きは、韓国の最大の文化誌『思想界』（サザンゲ）の発行社にて、当方は『自由』の編集関係の一行である。すなわち、平林たい子と編集の石原・塩田の二君と小生の四人であった。

韓国は文化・経済その他各方面でまだ大変に遅れているが、社会的雰囲気は極めて堅実であって、新興国として独立と建設の意欲に燃えていると見てとれた。日本が不用意に接近したならば、日韓関係は回復しがたい症状になるかも知れない底流が根深く観察された。国交調整は早い方がよい。

しかし、当方も十分に慎重に構えねばなるまい。自己の弱さを利用するものは強いと言われているが、確かに韓国はその意味で強い。韓国との交流接渉がうまくゆかないようならば、日本人には外交能力がないと言ってもよかろう。早く、しかし、堅実に日韓接近をすべきだというのが、短い今回の旅行の印象から引き出された結論である。旅の詠草を附記するのを許して欲しい。

渡航ビザ下附おそくして韓国は近くてまさに遠い国かも

李ライン越ゆれば山々赤くして東京はすでに遙かなる空

椎名外相を迎ゆると一列に警官並び飛行場に日章旗立つ空しさや

優逸感なしとは言えず省りみれば確かに鮮人とかつて言ひにし

慶州にて

回想を新にしたり新羅武烈大王の墓に入り日さすとき

加藤清正この寺を焼くと冬雨のなかを住持は案内して告ぐ

金色のみ仏いまし雨ふれば仏国寺の朝寂かなるかも

日韓の縁とならむ石仏は東を向きて立ちたまひたり（石窟庵）

日立商品特約店

日本電氣機器株式會社

取締役社長　天野雅司（大正15年）

本社　サクラバシ日立ショーストール

大阪市北区曽根崎新地2丁目50番地

電話大阪（361）8871番（代表）
大阪（361）4602番（夜間専用）

名古屋地区緑丘会

十日会と金曜会

船越好文氏（東京 昭5）撮影

〈十日会〉

名古屋の十日会の特色は何といってもサロン的雰囲気にあるといえましょう。参加されたどなたかが、適当な話題を提供されると、その人がいわばムードメーカーとなって話がはずむという具合に極めて和やかに歓談しております。名古屋周辺に住む緑丘人ならば誰でも参加できますので開放的でもあり、東京、大阪のように講師をお招きして話を聞く行き方とは全く違った味合いが感じられます。

毎月十日（当日が土曜の時は、前日、日曜の時は翌日）栄町、丸栄デパート前の「ライオン」で昼食を共にしていますが（会費三百円）毎月一五―二五名の出席であり、毎回数人程度、珍らしい緑丘人が参加されますので、文字通り旧交を暖める場面がみられます。十日会の御常連といえば支部長の増田常次郎氏（大一五 中部証券金融社長）をはじめ、寺田初平氏（昭二 明治生命）高橋一男氏（昭四 サッポロビール）高見美雄氏（昭八 拓銀支店長）宮嶋巌氏（昭一二 北炭営業所長）相羽清一郎氏（昭一四 住友火災海上次長）加藤敏氏（昭一五 大成建設次長）山田鳳蔵氏（昭一七 日光商事社長）劒物資郎氏（昭三十 高千穂交易支店長）加藤利雄氏（昭三四 加藤政谷商店）佐藤良雄氏（昭三五 三菱商事）などの他に岐阜から山崎丈夫氏（昭二 中央木材社長）金沢から上村高満氏（昭一五 別川製作所販売事業部長）が遠路よく姿を見せて下さるのは嬉しい限りです。

〈金曜会〉

十日会がいわば社会人大学卒業生達のサロンとすれば、金曜会は社会人小学校在校生徒のサロンといえましょう。昭和三十三年以降新卒までの若手緑丘人が毎月一回夕食を共にしながら歓談しております。

昭和三六年一月発足以来、殆んど毎月二十名前後集まっており、今年の一月で満四周年を迎えました。幹事は持廻りですが、五百円程度の会費のため安くて良い会場というわけで会社の寮とかクラブを利用することが多いのですが、どこであれ緑丘ムードを横溢させて楽しいひとときを過しております。ことに緑丘人は口下手であるという定説を打ち破ろうと、スピーチの練習のため各自必ず近況報告をすることにしています。職場のPRまたは不満からオノロケ、世相診断、etc、多種多様の報告がなされて良い意味の連帯意識が深められております。言いたいことが気軽に喋べることができるという一種のカタルシス的効果をもつ会合ですので、一回でも欠席すると会に対して借金ができたような気持になるほどで、このような会合が他の地区の緑丘人の間にも是非もたれるよう御推奨いたします。

また時には大先輩をお招きして思い出話、生活の知恵などスピーチを伺って大いに発奮させられることもあります。金曜会は年二回宴会形式をとり、緑丘ソングを唱って、大気焔をあげております。今年の新年会には増田支部長、水越金二氏（昭一九、名鉄百貨店人事部長）劒物資郎氏の方々をお招きして親睦を深めました。増田支部長の「経験より生ずるものを信ぜよ」とする酒談義、さらに人間常時自然であれと諭す「眼横鼻直」論にはじまり、水越氏の貴重な人生体験、劒物氏の実践的体験に基く女房論等の有益なスピーチは既婚、独身を問わず、出席者に深い感銘を与え、誇るべき先輩、誇るべき母校をもてる人はしあわせだとつくづく感じた次第です。

異動

栄転

劒物二三男（昭三四）株式会社リコー名古屋支店（東京）名古屋市中区西瓦町五三

宮袋虎雄（昭四）日本紙業取締役社長（富士銀行本店公務部長取締役）

二瓶正男（昭一〇）富士銀行上野支店（仙台支店長）

酒井誠（昭一一）富士銀行池袋支店長（八王寺支店長）

岸要之助（昭八）三井生命大阪支社（広島支社長）

村田久夫（昭一〇）北川鉄工所常務取締役に（取締役社長付）

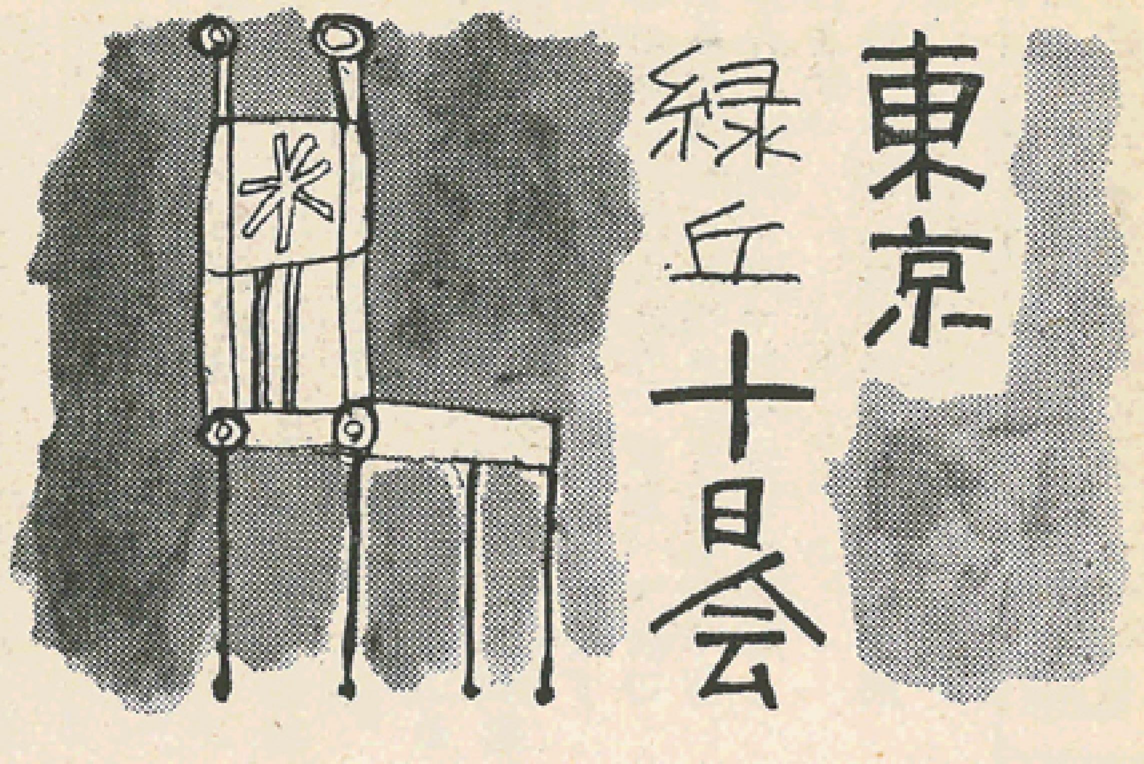
住所変更

向当賢一（大一三）大阪府茨木市宮元町一番十号

名雲賢（昭八）川崎市細山二〇五―九

劒物二三男（昭三四）名古屋市千種区桐林町一丁目九 中島方

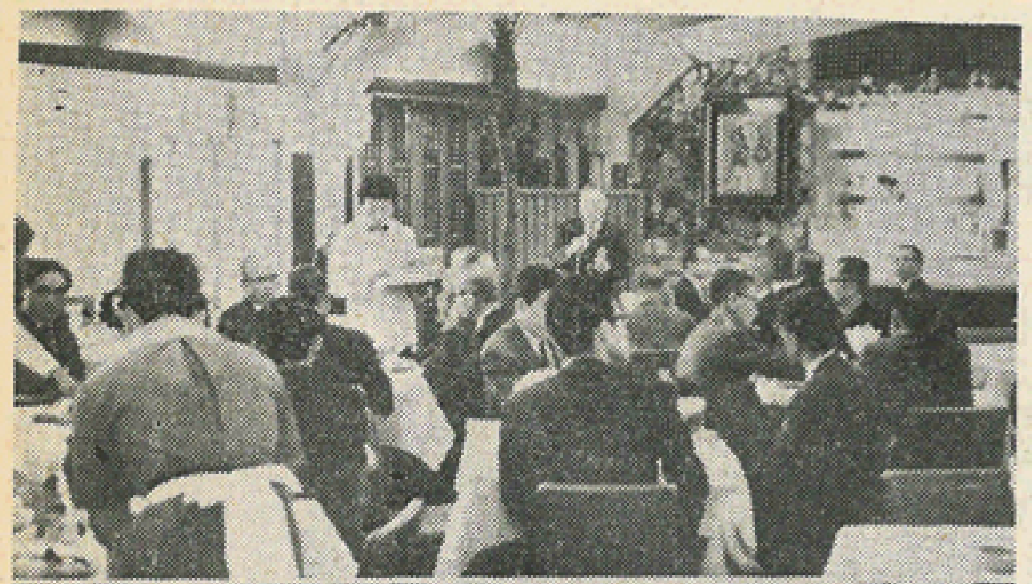
高坂恒一（大一二）東京都世田谷区松原町六丁目三〇ノ二四（番地変更）

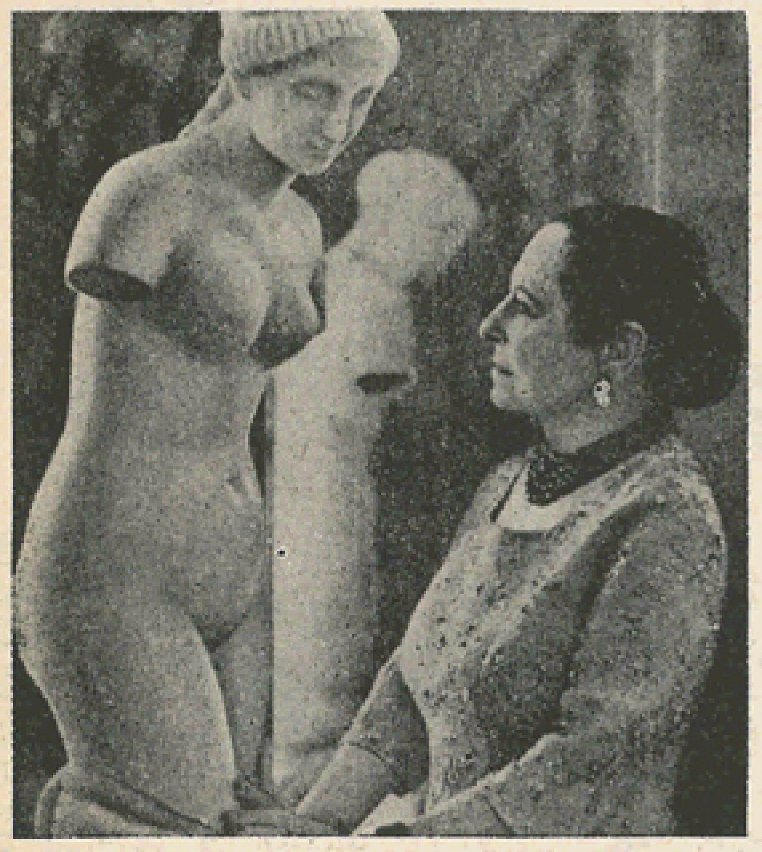


東京支部　新年懇親会

恒例の東京支部新年宴会は一月九日(土)午後一時半から銀座七丁目のサッポロビヤホール二階で、会員八十九名の出席を得て、極めて盛大和やかに行なわれた。在京の旧師木村さん(東大)峯村さん(教育大)お二人の御参加をはじめ、年ごとに参加会員も、若いメンバーもふえて、清新の気に溢れる会合であった。

会員相互の親睦と、新年の交歓を目的とするこの会合は、議題なし、しかも会費六〇〇円という肩のこらぬ和やかな宴席であり、クラスの新年顔合わせをかねての参加には絶好といえる。開会に当って佐々木理事長、上村支部長がそれぞれ新年の喜びと緑丘の発展をと簡潔に挨拶される。武岡氏(昭三)の親しみ深く巧みな司会にリードされて会は盛会裡に終った。





Helena Rubinstein

新会社設立の御挨拶

私は，世界の美容界に君臨するヘレナ・ルビンスタイン女史と数年に亘って親しく交際してまいりましたが，このたび女史と提携し，日本に合弁会社を設立し，その社長を勤めることになりました。ヘレナ・ルビンスタイン化粧品は，世界で最も格調の高い化粧品として，ヨーロッパの王室，欧米の社交界から絶対的な信頼をえております。一度でも海外に行かれた方なら知らぬ人のない，伝統と名声につつまれた化粧品です。日本発売にあたっては，名品の香りを失わないように原料はフランスから輸入し，製造はスイス人の技師が担当しております。

みなさまの美しい奥様，お嬢さまにより一層美しくなっていただくために，お役に立つことを心から願っております。まず関東地区から発売を始めました。

東京都港区芝西久保桜川町６番地
ヘレナ・ルビンスタイン株式会社
社長　加　地　幸　一（大12卒）

大阪支部

新年懇親パーティ

一月十一日　於サッポロビール㈱

ここ新阪急ビル八階日本麦酒ホールには、朗かな笑いと話声が部屋一杯に溢れている。

立ちこめた紫煙で、テーブル越しには誰と誰か定かに分ち難いが、どの顔も熱気に上気して赤い。

長老格の大泉さん、宮地さんを始め、椎名先生を囲んだ三十名。

人々の静かな動きが、めいめい別々のそして思い思いの流れなのに、キレイな華麗なホステスの晴着の動きと織なす調和は、心のこもった「つどい」だけに気持のよいものだ。

(こんな雰囲気の中で、新年宴会にさえ顔を出しておけば一年中サボッても目にもつかないし、自らの心に弁解もできるなどという不了見な出席者はどうやら筆者一人らしい。些か申訳なく白ばくれてビールをガブガブ飲む)

やがて司会者に紹介されて恒例の年男の祝賀が始まる。

本年は巳年、石田さん(昭二)若山さん(昭十三)菓子君(昭三九)の三人がホステスの一人とともに上座に斉列し、それぞれ持味のある軽妙な本年の抱負を開陳し万場の拍手をうける。

執念深くかつ陰険の標本みたいにされてきた蛇にとってこの通念は如何に偏見に満ちた濡衣であることか

年男の三氏はまことに明るい。勇気凛々、攻撃的かつスマートなタイプでこれが本当の巳の姿であろうか。巳の姿は流線型で行動的と見なおせば、気味の悪い蛇という観念はすでに正反対のものになる。

この年男三氏を始め、出席しているすべての人々にとって、春はもうすぐそこに来ている。暗雲低迷久しかった景気ももう冬の彼方に消えさろうとしている。

失言取消！本日出席できなかった人々の上にも同じことだ。

緑丘の同窓各位の本年の健斗を互に祈り会を終る。

おわりで恐縮至極ながら本日の会合に御骨折り下さった石田支部長以下役員の方々の御苦労と、会合に花を添えたお土産の提供を頂いた昭五水垣さんに心から感謝を申上げます。

(S生記)

当日出席者(入場順)

椎名幾三郎先生

石田(昭二)樋山(昭三)蓑目(昭一一)石井(昭六)田中弥(大一二)山本(昭一六後)阿部敬作(昭一七)菓子(昭三九)市橋(昭一四)安部、竹中(昭三一)山内(昭一六後)砥上(大一〇)宮地(大一一)大島(昭一〇)滝沢(昭三)三浦(昭五)大竹(大一二)細川(昭一四)黒羽(昭二)近藤(昭三九)実方(昭二)安藤(昭一七)大泉(大一〇)三上(昭三九)梅野(昭三五)藤井(昭九)外村(大一五)玉井(昭四)大塚(大一五)清水(昭一六後)

(会　場　風　景)

(世界の味をＰＲする幹事長)

(余　興　の　部)

(年　男　な　ら　ぶ)

昭和十二年　東京クラス会開催

一月二十五日　於「スエヒロ」

去る一月二十五日、大森海岸「スエヒロ」において昭和十二年東京同期会の新年宴会を開催致しました。灯が水に揺らぐ頃から栃木県の福田氏を筆頭に続々と参集、中には北海道滝川市から偶々上京中の岩本氏、高岡市在住の浜井氏の顔も見え、総勢二十名、しっとりと落着いた静かな環境の中で、全員学生時代の気分にかえり、まことに愉快に歓を尽しました。会員とっておきの秘芸なども披露され、宴はいつ果てるとも知れず、別れるには誠に惜しい一夜でしたが、終りに、元吾等が応援団長浜井清一氏の音頭で校歌から行進歌、応援歌と斉唱し、次回を約して会を閉じました。

出席者は

後　列　前　列

松本浩三郎

高木　光孝、金　三郎
菅原　文夫、斉藤　彪吾
粟野　俊助、浜井　清一
桜庭　幸雄、佐々木成彰
牧田　恒雄、大村　良雄
追分　努、木内武之内
岩本　正義、広瀬　順造
福田　政治、関　泰明
石川　孝一
矢野　正郎
新谷　健夫

なお、これで当会の幹事交替。次期は電気化学工業株式会社の大村良雄、同長谷川順次の両氏が担当されることになりました。（松本浩三郎記）

競技成績及参加者

		O	I	O	G	H	N
優勝	一谷秀男	52	52	57	161	54	107
二等	伊藤英二	49	45	44	138	24	114
三等	八木勇平	49	47	55	151	33	118
四等	永井静男	54	57	52	163	45	118
五等	名雲賢	49	48	47	144	24	120
六等	南俊栄	48	47	51	146	25.5	120.5
七ブービー	能沢正義	59	58	59	176	48	128
八等	森正明	60	54	53	167	34.5	132.5
番外	日下一郎		58	60	118	36	83

昭八告知板

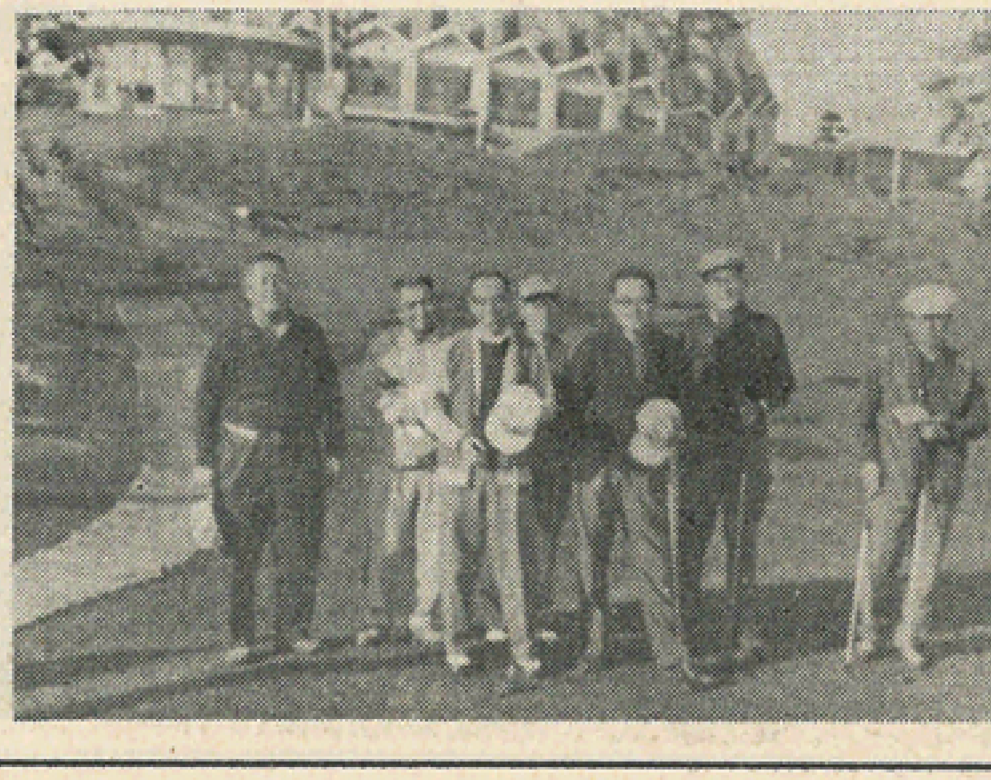
東京昭八回第一回　ゴルフ大会便り

東京昭八会の第一回ゴルフ会が本年一月二十三日(土)九名の参加者を得て読売メンバーコースにて賑かに開催された。

当日は大寒中にもかかわらず、一日中朝から無風快晴、非常に温暖な日和に恵まれて、一・五ラウンドを全く快適にプレーを楽しむことができた。

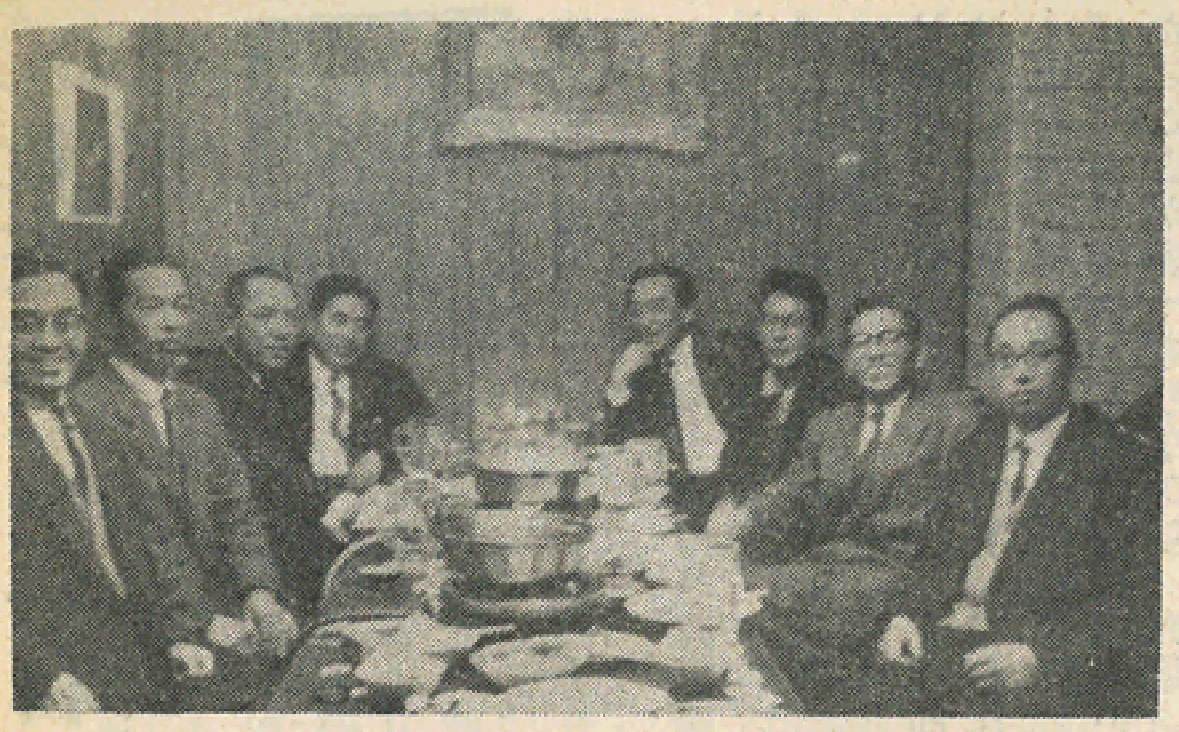
競技終了後ドーム屋根のクラブ食堂にてビールを抜きながら快談し、幹事南君より本日の成績発表があり世話人能沢君寄贈のマザーカップと第一回大会のレプリカが優勝者一谷秀男君に贈られた。

次いで世話人から提案された本会の規約及び申合事項について検討。結論をえたので、次回幹事（規約により優勝者及びブービー者の共同幹事）がこれを各地区昭八会へ通知することになった。なお次回は三月二十日（土）読売パブリックコースにて開催と決定した。



大阪十六年後期会（於ミュンヘン 一月二十二日）

「次回結論を出そう」という結論で



昭和十六年後期といえば、お互に下宿や寮で朝食を食いながら、あの「昭和十八年十二月八日未明、帝国陸海軍は南太平洋上において米英両国と戦闘状態に入れり」との大本営発表を聞いて、間もなく小樽を去って、すでに二十三年余の歳月となる。繰上げ卒業第一期生というわけだが、今にしてこの失なった三ケ月が何とも取返しのつかぬ損失と思える。高々三ケ月だが、学生生活の最後の時は、細々した断片的知識の追加よりも、その根底のなす本質について、もう一度考え直して見る大事な機会でなかろうか。失われた時が再び戻らぬだけに残念でたまらない。

これがわれわれがどうも世間一般に比べ、何処かもっさりと抜けている理由の一つでなかろうか。だがそれだけに口に出さなくとも、仲良く互にいたわり合えるのかも知れない。毒舌や皮肉がこの上なく辛辣であっても、いい返す言葉がそれ以上に露骨でもお互に自分自身のことの如くに話し合える仲間なのだ。話題は若くして散った人々のこと、そして大阪以外在住の人々のこと、それから顔を合せて今話している仲間同志、知らぬ間に何時とはなく大体順序がきまって了ったようだ。

最後に何か結論を出そうということになったが、期せずして歌の文句にある「帰ろかな」ではないが、小樽を訪れようという話になった。どうやら大多数の者が卒業以来未だ再び訪れていない。商業港として盛えたあの町も、今や政治の中心地札幌に商業経済のイニシアチブまでもとられ、さびれてきているという悲しい現実を耳にする。そんな姿を見たくもない気もするが、だが曽遊？の地、小樽の街のたたずまいや母校の面影を求めて一緒に行こう。できれば夫人同伴で。ここまでは、万場一致。だが何時にするのか具体案になると仲々纏らない。三十週年ではおそすぎる二十五年では未だ公私ともに忙しすぎる（五日も続けて休める余裕がないし、私などにはおまけに私経済的にも難しい）結局のところ夏にはもっともっと大勢集合してもらい本日の提案を具体的にきめようということになった。

本日不参の友よ、この記事を見たら次回の会合には万難を排して出席をたのむ。

本日の出席者
井下、鈴木(信)、堀尾、星、村木
山内、山本、清水

大正六年卒　大六会

第五十六回目のクラス会

一月二十一日夜三菱電機の高輪荘で第五十六回の大六会を開催した。

当番幹事住吉貞英氏は三菱電機の元役員で同氏のお骨りで楽しい一夕を過した。住吉氏の姪に当るペギー葉山と根上淳との婚約のことも話題になった。（稲垣記）

強胃・快腸
アトホーム顆粒
神経を使う仕事，運動不足，おまけに△接待や出張で△食事の不規則，ビジネスマンの胃腸は甚大です。
強い消化力と胃腸の疲れを回復させる２つのすぐれた作用をもつアトホームが楽しい食欲をつくります。
日本新薬株式会社

故佐藤宮二君のこと

能代鉄雄

二月二十六日十六時宮二君逝去の電報を奥さんより受けたのはその夜十一時頃でした。告別式に出席できないので衷心より哀悼の弔辞を送りました。

同君とは函館商業、小樽高商を通じ生涯の親友の間柄であり、昨年六月八日川崎汽船株式会社四十五周年式典に神戸に招かれ、出席の帰途九日堺市のお家を訪れました。その日は雑談して別れたものですが、七月十五日付の宮二君よりの手紙によれば久しぶりで会ったので聞いて貰いたいことが多くありながら、直腸癌の大手術及び肝硬変で語る気力がぬけてただただ聞手に廻ったが、小樽高商を出て縁故で三井銀行に就職決定をみながら、それを断って、大阪道修町の乾卯食料品株式会社に自ら求めて入社した。その間子女四人を大学に入れ、それぞれの行先を見極め六十余才の天命を終らんとする自分を省みて、薬品会社に就職したこの方が、むしろ仕合せであったと思っている。

病床の中にいて蔵書を引張り出して読むことがあるが、漱石の「こころ」を今になって読んだら、「先生と私」と言う項目が出てきたので、伴先生のことを思い出して書くのだが、数年前「先生の書簡集」を出版したいという臺目君の発案があるから、先生から最も多く書簡をもらった一人である僕に、書簡を提出して欲しいと大久保鹿弐君や同窓生より申出でがあったが、これはお断りした。それは先生の葉書は細字で大部分が私生活と家庭問題が多かったので発表を憚かったからだ。

その後奥さんに付き添われて一回大阪に御出でになった時（これが先生とお会いできた最後であったが）先生と、旧友（元大阪府立高校長当時、岸和田市に独り住い）との今世最後の生別であったが、料亭内での会話の内容（仏教の将来、戒名）やまた郊外電車内で同車の人を驚かした下車した友人への呼び声など「大人」らしい先生の一齣を苦心して描写したものを、編集者へ寄せた。これは貴兄にも一読願いたいものと思っているが、色々の関係で未出版になっているが、先生の人間としての苦悩を知った自分はその一人であると思っている。しかも先生は最後の御下阪の時は七十才を出ておられたが、大阪支部での御挨拶でも一言の乱れもなかった。ああいう人は頭脳が特別上等にできているのだネ、というのでした。

この三月四日、夜八時頃宮二君の次男昌弘君が小生宅を尋ねてこられました。告別式当日は椎名先生、大久保鹿弐、田中弥三郎、大竹正雄、喜多村久盛、小山猛君等近畿在住の級友や臺目英三さん達が出席してくれたと知らせてくれました。

（大一二）

全国版「緑丘」広告について御願い

広告効果の測定程むずかしいものはないと云われています。

然し乍ら其の広告対照を認識して広告媒体を選定する事により，より一層の効果を発揮出来ます。「緑丘人やその御家族」にあなたの会社の製品を，そしてあなたの銀行，あなたの保険に誘い入れる努力は他の何千万のあてにならない対照を目標に広告するよりも**「緑丘」**への広告が遙かに効果的と云い得ましょう。

あなたの会社の広告課員にもどうぞ**「緑丘」**への広告をおすすめ下さいますよう御願いします。さらに**「緑丘」**発展のためにも広告の御協力を御願い申上げます。

1　回	（1頁全段）	12,000円
1　回	（½　段）	6,000円
1　回	（¼　段）	3,000円

年間契約の場合は割引いたします。

代金は掲載後で結構でございます。

御申込はどうぞ「緑丘」編集部　臺目英三宛（大阪市東区道修町3丁目12 塩野義製薬K.K.内）

四〇年度申込者氏名（三月十日現在）

左の方々は四〇年度七〇〇円をいただいております。

（アイウエオ順）

ア
荒木英二　有住幸夫　青塚寛二　秋田谷清　明田伊造

イ
石井登　石崎秀策　石部敏雄　井上尚　井須荘二　稲垣芳雄　今井四郎　猪股貫一　猪木金人　一柳茂樹　今西信之　磯貝祐司　伊部政次郎　稲田憲　飯田尚文　今井慎一　池田宜弥

ウ
宇佐美武正　上田文雄　宇佐美俊彦　植田英次　梅野弥太郎

エ
遠藤周寿　榎本喜久次　江上芳雄

オ
大沼誠治　大野陽之助　大平善悟　大隅弘　岡田晴夫　小川信次　尾崎哲平　大友良治　大野章平　大島晃　岡田保司　小川愛策　小野源三

カ
加藤昌市　梶川亨司　柄沢六郎　金垣英雄　神沢重治　加藤勇

キ
木内喜右衛門　木島忠男　紀野重仁　北村太治郎　木下弥治衛　喜多村久盛

ク
窪田信一　窪田多々男　黒坂邦男　工藤恭治　桑島喜助　栗原勇次郎　国松祥三　朽木尚孝　桑田喜久男

ケ
劔物二三男

コ
向当賢一　小山猛　越崎宗一　小橋庸三　小山幹夫　小竹泰夫

サ
佐竹繁寿　佐治寛　佐々木俊雄　佐々木八郎　佐藤宮二　笹島廉平　佐藤行男　西条正博　佐々木光雄

シ
進藤孝二　城川健一　芝梅太郎　篠田正男　下村昌雄

ス
菅井長平　杉山昌作　須永誠一

セ
瀬下雅也

タ
高橋正彦　高木久新　高桑市郎　高島源一郎　田中滝一　田代昭雄　田中慶四郎　田中秀雄　武岡達良　谷口輝時　滝沢中　竹中正親　高橋勇　高野憲一郎　武智次郎　高橋徹男

チ
帖佐猛

ツ
津島正雄

ト
富成宣清　戸井正三　外山登一　富永義

ナ
中島与市　中条市郎　中村哲喜　中木常豊　永田孝一　内藤好生

ノ
野口正二郎　納冨昌幸

ハ
浜浦英祐　服部兵吾　橋本一　林宏哉

ヒ
平井勇　樋口幸治　広瀬久一

フ
福田誠　古沢精吉

ホ
北条恒一

マ
松田寛　松岡俊一　槇啓三　町野正雄

ミ
三谷晃一　宮脇音久　宮内美雄　宮崎省三　水垣敏正　皆川孝平　三森龍次　三橋三郎

ム
室秀夫　室谷邦雄

モ
百田嗣郎

ヤ
矢野健太郎　山田鳳蔵　山田豊　山本博　山下政道

ヨ
吉岡隆雄　吉川友記

リ
陸田清

ワ
和田益太郎　渡辺一夫　我満博仁　若林敏

＜お詫び＞

■まんぴっ五人集は一部原稿延着のため、次号に掲載させていただきます。早々に御執筆下さいました方々に深くお詫び申上げます。

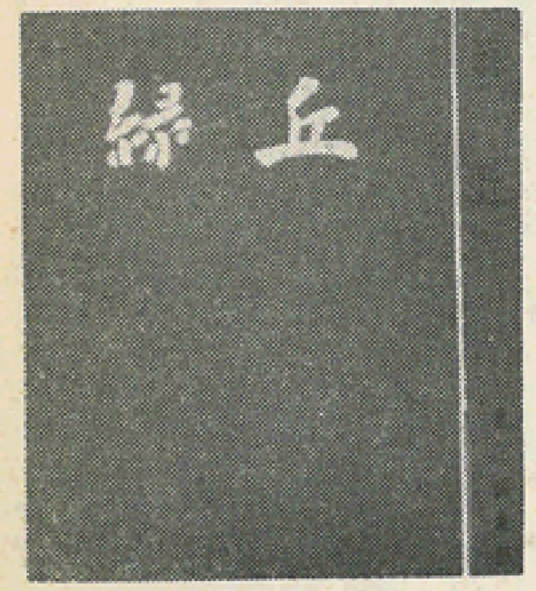
■京阪神緑丘会員名簿中小林象三元教授の現職、大阪工業大学講師とあるは教授の誤りにつき謹しんで訂正します。（大阪支部長　若山永太郎）

緑丘 綴じ込み表紙 申込受付

「緑丘」綴じ込み表紙ができました。三カ年分の「緑丘」を綴じ込めるよう計画しました。

希望者は二〇〇円お送り下さい。

大阪市東区道修町三丁目　塩野義製薬㈱　臺目英三宛



「緑丘」40年度分(1ヶ年700円) 申込受付

この振替用紙を使って（手数料無料です）

あなたの三十九年度会費はこの号で終りました

三十九年度はこの小林多喜二特集号をもって終りました。

御申込みはついお互に忘れ勝ちです。何時ものことですが四十年度第一号の**発行部数を決定**のためにお早く御申込み下さいますようお願い申上げます。

五月に入りますと第一号が品切れになることもありますから御承知下さい。

（大阪支部の方へ）

現金で御渡し下さいます方は、必らず振替用紙の一片に氏名を書き添えて下さい。

緑丘通信

□消息四十三号（緑丘会―大一一）が出ました（故讃岐梅二氏の追悼号）

□昭五会の卒業満三十五年記念大会を五月七日箱根湯本温泉で開催予定名簿もすでにでき上り発送済。行事は（A）感想近況文集、記念写真、記念品、恩師数名招待、寄せ書、物故者慰霊祭、演芸大会、近代五種競技会、福引、映画、その他碁会、麻雀会、おみやげ等（B）翌日希望者グループにて箱根近辺ドライブ会、ゴルフ会。

□「京阪神支部名簿」完成、実費二〇〇円で頒布、希望者は大阪市東区豊後町四一　丸嘉機械㈱若山大阪支部幹事長宛申込のこと。

□広島大学名誉教授中野清一氏（大一五）四月立命館大学産業社会学部初代部長に就任。

中島諭三郎氏（大六）

元北陸銀行取締役営業部長
現北日本物産㈱取締役

かねて病気療養中の処、二月九日永眠。十二日富山市明栄寺において葬儀執行につき、緑丘会を代表し藤瀬支部長、神沢幹事が会葬し弔詞を捧げた。

遺族　富山市堀端町一二
未亡人　中島みどり

臼井伊三郎氏（大一一）

昭和四十年二月四日逝去

遺族　群馬県館林市大字谷越一〇〇八の二番地　臼井志げ

編集後記

■奇しくも二月二十日の多喜二三十三回忌の命日に編集を終えました。

■北海道新聞で多喜二碑建つ計画を見てから特集を企案、浜林教授依頼による伊藤整先輩の原稿到着によって特集計画推進の決意が決まりましたものの昔「蟹工船」を一寸読んだことがあるだけで、どんな経歴の先輩であるかも知らず、特集をすすめるにあたり執筆依頼を誰れにすべきかという、出発から全く迷いました。しかし当時広大教授中野清一先輩（大一五）に執筆者推薦を先づ御願いしてリンカクが出来上ってきました。多喜二と同期香川先輩に御願いして大一三多喜二と関係ある歴史的人物の発掘をねらいました。多喜二の学生時代の憶い出を書いて残すチヤンスは二度となく、未だ誰れも知らない、今だから話す式の内容の出現をも期待しました。手塚英孝なる人物が小林多喜二に関するベテランなることも知らず、また同氏筆になる沢山の書物が出ていることも特集をすすめてから判ったのですが、たとえかかる出版物があるにせよ、まだまだ同クラスなるが故に、親友なるが故に、かくれた記事が出てくるものと期待しつつ投稿を待ちました。

■この特集は編集者として政治的なものは会誌の性格から、これを拒み、ただ中野教授のいう執念（文学であれ恋愛であれ）がこの一冊に盛られるならば特集の意義は大半達せられ、しかも同クラスの方々の執筆が三十年、五十年後といえども真実の声を伝えて不滅の光を放つことを期待したからに他なりません。営業用の出版物が如何に沢山出ようとも日を経るに従って単なる伝説的人物に終るのはその資料が孫引きの感がないでもないからでありましょう。

■この「緑丘」こそは貴重な資料に必らずなることを信じます。多喜二と同期の執筆者はその意図何辺にありや資料とは不可解なりとしるされた方があります。何故進んで多喜二を描いてくれなかったかと編集途中で大きなショクでした。大阪では一月から二月にかけて大きな古書展が三つあり、昭和八年の文春を発見した時や多喜二死亡の朝日新聞を発見した時は大きな救いになりました。

■資料ともいうべき未発表の写真があります。織田ムメさんの写真は大野先生の原稿をいただいてから小樽の鈴木三七先輩（昭八）が雪の降る中、一面識もない織田さんを訪問して一枚の近影を借用して下さいました。その後織田さんが大野先生宅を訪問されたのを機会に上杉さんという方が撮影して下さったものを送っていただきました。鈴木さん宛の手紙に「御一緒に撮って頂けたなんて……いままで想像もしておりませんでした。不思議な御縁です。エンカイナ節じゃないけれど多喜二がとり持つエンカイナ……でしようか？……」とありました。多喜二と故石黒先輩の写真は石黒未亡人（鳥取）にご親戚の方から編集部のために取り寄せて下さったものです。福田勇一郎先輩は唯一枚の貴重な写真を、島田正策さんはスケッチと田口タキ女の写真を、高桑先輩は幼き頃の画塾の写真を夫々貸して下さいました。

■大阪萬字屋書店支配人平本さんは編集部に著作目録の御協力を、年譜は同期で入院中の小野寺君を助けて野沢正一君が原稿用紙の駒入れをして送っていただいたもので、それぞれの御協力によってここに出版の運びとなりましたことを感謝いたします。

■著名作家の方々の御執筆は一橋大学大平善梧教授、浜林教授、中野教授の労を煩わしましたことを厚く御礼申上げます

■今回多喜二特集に当り御多用中にもかかわらず「緑丘」のために格別の御寄稿御支援賜りました諸彦に厚く御礼申上げます。

オリンピック以来
ユニークなアイデアを買われた！

MCC

各国代表料理缶詰シリーズ
料理缶詰
世界の味

只今!! 販売店サービスとして
異質業界で絶賛好評!!

販売促進用景品
（セールズ プロモーション）

各種セット組合せ調製

料理指導
江上料理学院長
江上トミ先生

居ながら楽しめる
各国代表料理の缶詰

日本	すきやき
ロシア	ボルシチ
イタリア	ミートソース
ハンガリー	ビーフシチュー
アメリカ	コーンスープ
イギリス	トマトスープ
フランス	デミグラス・ソース
ドイツ	ハンバーグ・ステーキ
シシリー	スパゲッティグラタン
インド	ビーフカレー
スペイン	スパニシュライス
オランダ	いちごヂャム
ポルトガル	ママレード

新発売
ホームカレー

エム・シーシー食品株式会社
代表取締役　水垣敏正（昭五卒）
神戸市長田区苅藻通5丁目15　TEL神戸（67）1245(代)